

京都府埋蔵文化財情報

第 66 号

須恵器・直口甕の系譜について-----	小池 寛-----	1
愛宕神社古墳群の発掘調査-----	竹井 治雄-----	7
長岡京跡左京第399次の発掘調査(7ANVKN-11、7ANVST-7)-----	八木 厚之-----	11
南山城地域の高地性集落—一般地方道富野荘八幡線関係 遺跡(宮ノ背・西ノ口・備前遺跡)の発掘調査から—	河野 一隆-----	15
対馬の遺跡をたずねて-----	小池 寛-----	21
—平成9年度発掘調査略報—-----		26
5. 天王山古墳群B支群1・2号墳	9. 苗代古墳群	
6. 谷垣1・2・3号墳	10. 竹中遺跡	
7. スガ町古墳群	11. 余部遺跡第3次	
8. 松ヶ崎遺跡第5次	12. 柏平遺跡	
誌上遺物展示 3. 京都府京田辺市堀切7号墳の人物埴輪-----		41
府内遺跡紹介 80. 寺戸大塚古墳-----		44
長岡京跡調査だより・63-----		47
センターの動向-----		50
府内報告書等刊行状況一覧-----		52
受贈図書一覧-----		57

1997年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

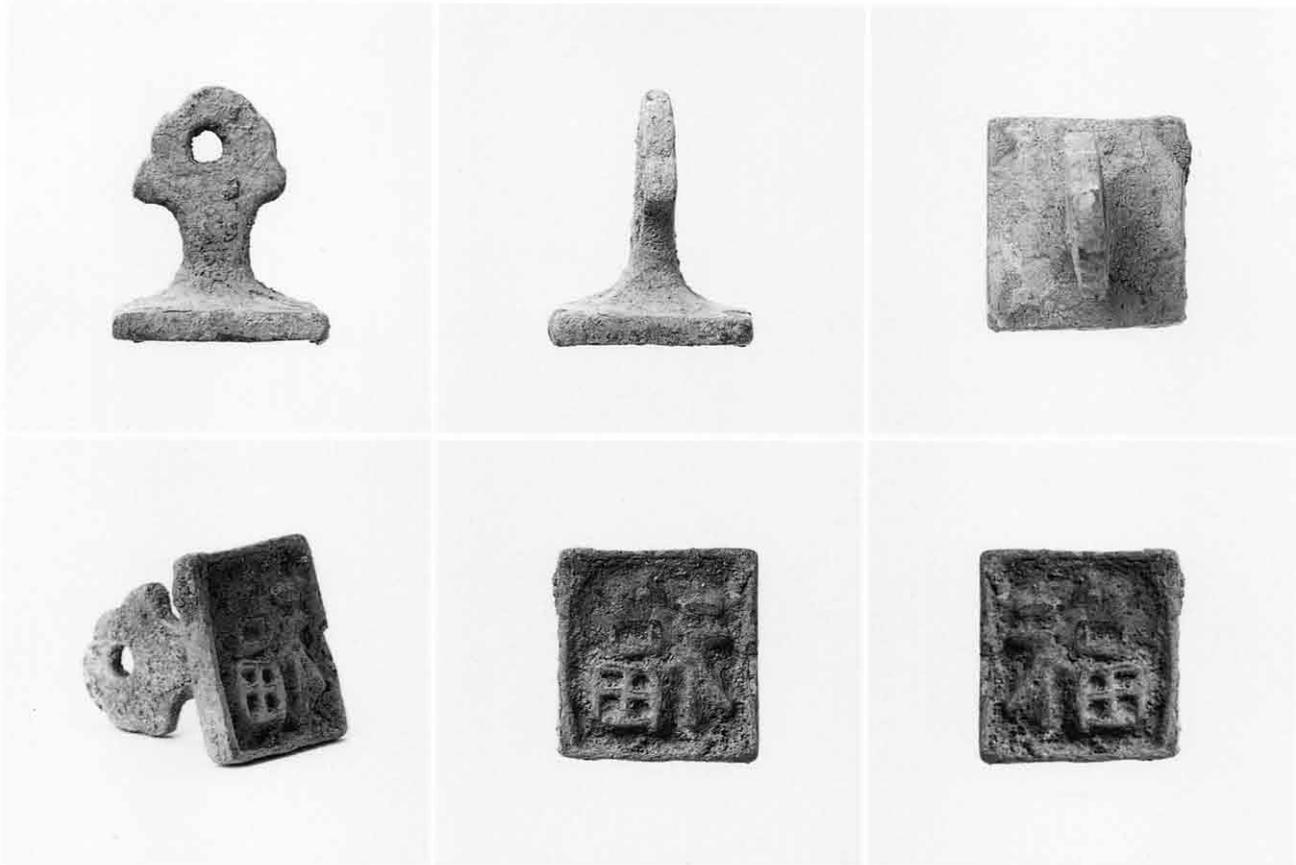


(1) 1号墳完掘状況 (南から)



(2) 銅鏡

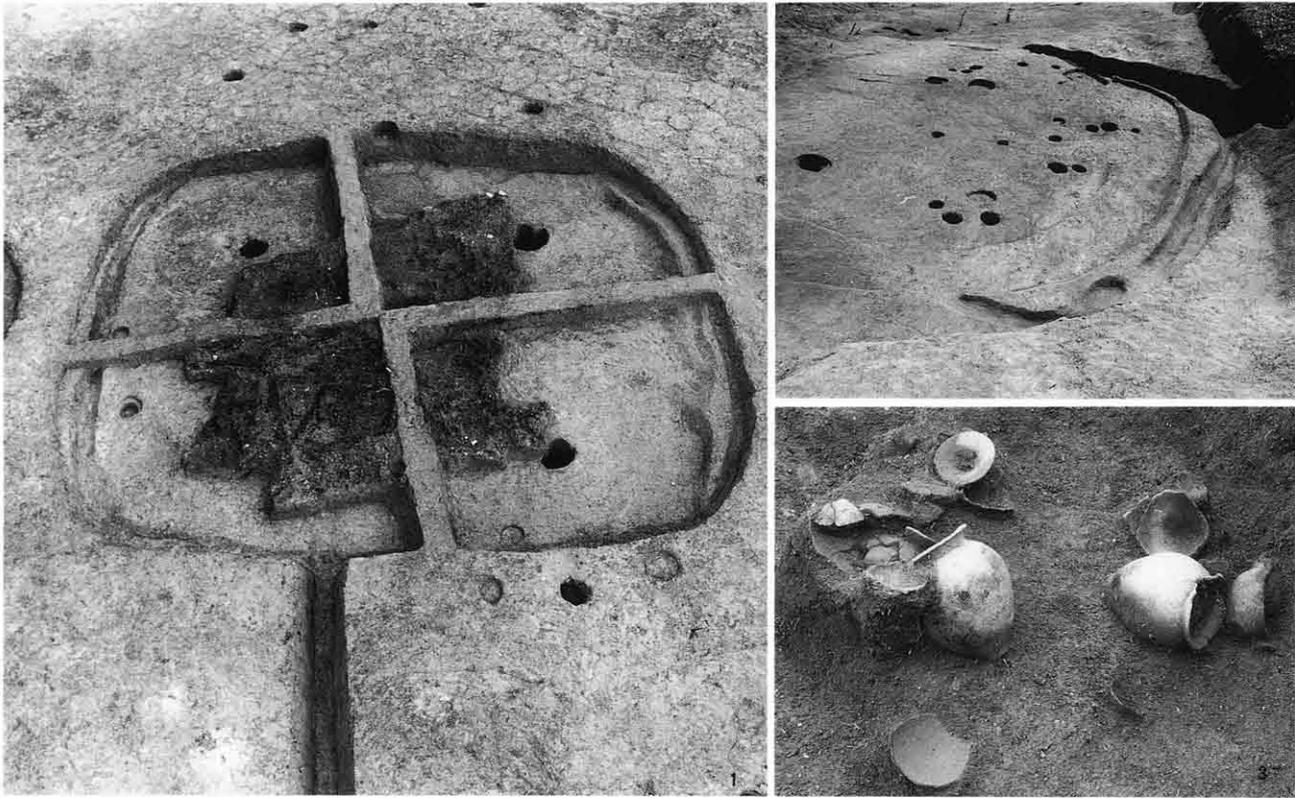
巻頭図版 2 長岡京跡左京第399次の発掘調査



(1)左京第399次調査出土印章（右下は裏焼き）

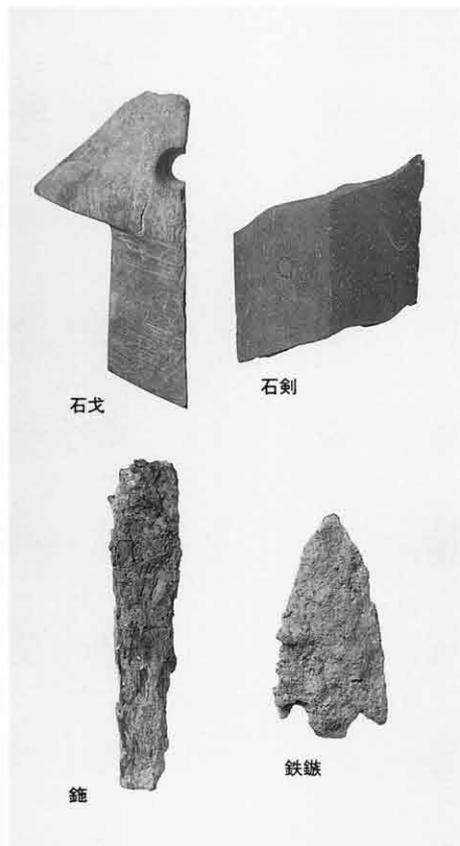


(2)調査地全景（北から）



宮ノ背・備前遺跡の主要な遺構

- 1 : 宮ノ背遺跡1号住居（焼却された住居） 2 : 備前遺跡1・2号住居（テラス状）
3 : 備前遺跡環濠内土器出土状況



宮ノ背・備前遺跡の主な出土遺物（左：土器 右：石製品及び鉄製品）

須恵器・直口甕の系譜について

小池 寛

1. はじめに

大阪府大庭寺遺跡では、TK73型式以前に比定される須恵器窯址の発掘調査が実施され、朝鮮半島の陶質土器が須恵器の器形に及ぼした影響について、より具体的に把握されるに到った。^(注1) 他方、TK209・217型式の土器群を細分化し、窯の一括資料を中心に新しい型式を提唱する見解も近年になって提示され始めている。^(注2) これらの研究成果を概観した場合、基本的な編年は、共通の認識として成立しているといえるが、各器形毎の系譜については十分検討できておらず、東アジアの陶磁器を視野に入れて、検討する必要がある。

著者は、直口甕の集成を行い、生産が開始される時期などについて私見を提出したことがある。^(注3) しかし、系譜については、具体的には検討し得なかった経過がある。

本稿は、以上の経過を踏まえ、その系譜について私見を述べることを目的としている。

2. 拙稿「須恵器・直口甕の基礎的検討」の要略

拙稿「須恵器・直口甕の基礎的検討」^(注4)では、大阪府陶邑古窯址群出土の直口甕を集成し、口頸部の高さが3cm以上の個体をa類、3cm以下の個体をb類とし、口頸部の形態からa類・b類をさらに細分化した。その結果、直口甕が初期須恵器には既に見られることが確認できた。また、肩部の耳を板状・突起状の基部を穿孔する耳、環状の耳、角状の耳、瘤状の耳の4類に分類し、環状から角状、そして、瘤状に到る型式変化が正当であるか否かについて、提瓶を加えて再検討を行った。その結果、角状の耳が瘤状の耳に型式変化することは首肯できたが、環状の耳が角状の耳に型式変化することについては、否定されるべき基礎資料を得ることができた。

本稿は、以上の検討成果を前提としており、あわせて参照して頂きたい。

3. 直口甕の系譜について

直口甕の系譜を考える上で古式土師器及び陶質土器が重要なよりどころとなることについては既に述べたが、^(注5)ここでは、a2類の系譜に深く関連する陶質土器を中心にして、形態的特徴を抽出し、各個体毎の系譜から全体像を検討していきたい。

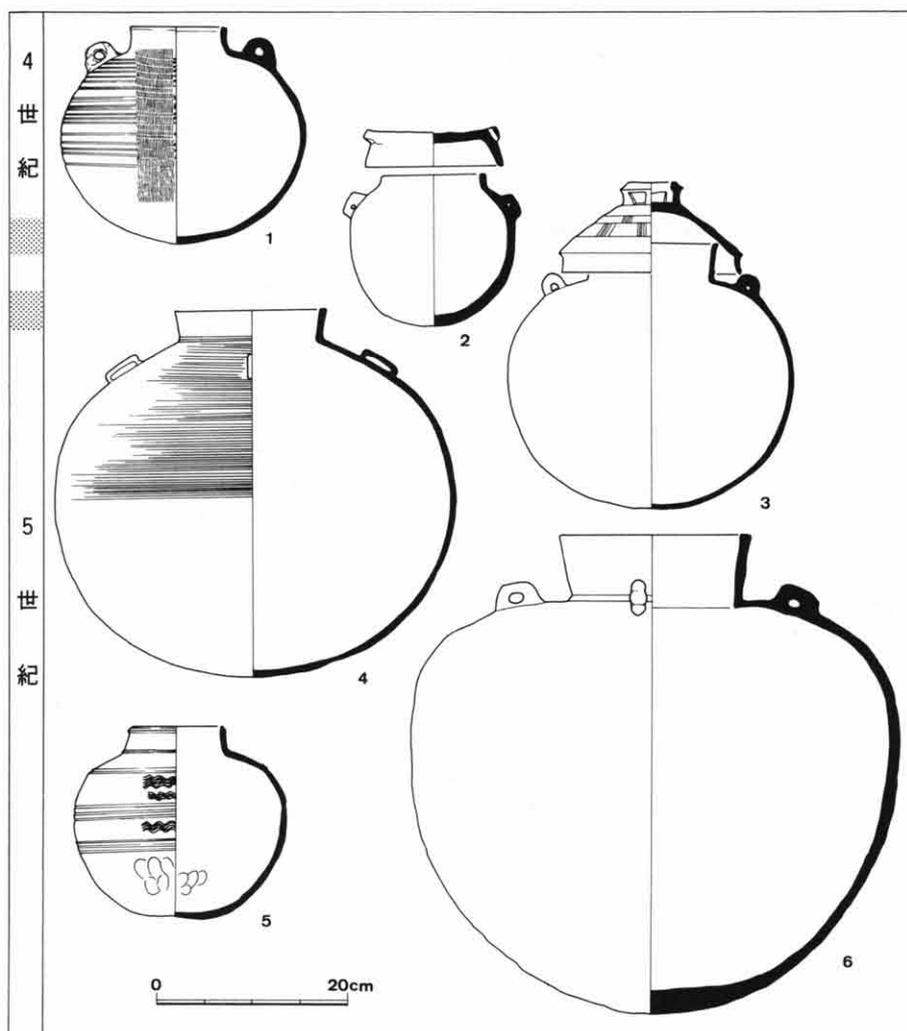
a1類 集成の結果、TK208型式を下限とする直口甕である。口頸部の形態的特徴から陶質土器には類似資料が見られず、布留式甕との関連が想定される。須恵器と土師器の器形には、双方の影響が見られるが、これは、初期須恵器のみならず、5・6世紀にも確認されており、既に多

くの研究者によって指摘されているところでもある。^(注6)

a2類 直立する口頸部をもつ個体をa2類とした。TK73型式には既に見られ、MT21型式にも類似資料が確認されている。ここでは、第1図の陶質土器を中心にして、a2類の系譜について検討を加えたい。なお、次に取り上げる個体については、本稿では、直口甕と呼称しているが、各々の報告書ないし論文では、独自の器形名称を使用している。そのため、便宜的に各執筆者の器形の名称を使用しておきたい。今後、器形名称の統一がまたれる。

1は、出土地不明であるが、李養璿氏蒐集文化財として収蔵されている短頸壺である。肩部には、鉛筆状の工具で穿孔した半円形の耳を貼り付けており、丁寧に整形している。体部は、ほぼ球体を呈しており、外面には縦方向の平行叩き痕と肩部から胴部最大径部にかけて約20条の凹線が見られる。採集品であるために明確な時期設定はできないが、慶尚南道義昌郡大坪里からの類似資料により、4世紀の古式陶質土器に比定されている。^(注7)

2は、全羅南道靈岩郡始終面萬樹里第2号墳から出土した有蓋の両耳壺で、肩部には、鉛筆状の工具により穿孔した隅丸長方形の耳が付く。^(注8)蓋の天井部と口頸部の屈曲部外面に粘土を貼り付け、鉛筆状の工具で穿孔している。本例は、馬韓地域からの出土であり、長崎県対馬の大將軍山



第1図 朝鮮半島の陶質土器・直口甕集成

古墳からも類似資料が出土している。地理的な関係から勘案すると、両地域の地域間交流は、頻繁に行なわれたと推測でき、その交渉を裏付ける考古資料としても重要である。なお、報告書では、4世紀後半から5世紀前半に比定されている。

本例のように蓋を伴う直口甕は、朝鮮半島及び日本列島では数例知られているが、穿孔部をもつ事例は僅少である。また、肩部の耳には、蓋を固定する目的が想定できるが、蓋に2ヶ所の穿孔部をもつ直口甕は、自ずと双耳の直口甕になる。出現期の耳付直口甕に双耳が多く見られる傾向は、このように蓋の穿孔箇所に起因していると考えられる。しかし、蓋の穿孔部が形骸化に伴って消失し、双耳のように2方向からの締め付けだけでは、蓋を十分固定できなくなった段階で、三耳や四耳が増加するものと考えておきたい。

3は、釜山東萊区福泉洞第1号墳から出土した有蓋三耳付壺^(注9)である。外反する口頸部と精緻な球体をなす体部からなる。本例には、生産段階のセット関係ではないが、有蓋高杯の蓋が共伴している。元来、本例の直口甕には、全羅南道靈岩郡始終面萬樹里第2号墳出土のような蓋がセットとなって生産されたと推測できる。このように埋葬時には、生産者が意図していたセット関係は崩れ、高杯などの蓋とセットとなり、副葬されることもしばしば見られる。本例は、共伴する遺物から、5世紀前半に比定できる。

4は、3と同じく福泉洞第1号墳から出土した丸底四耳付壺^(注10)である。やや外方にのびる口頸部と精緻な球体の体部からなる。肩部には、縦方向に細長い耳が付くが、朝鮮半島及び日本列島出土の直口甕の中であって、縦方向に細長い耳は、極めて稀な形態であり、その出自は、陶質土器の直口甕の系譜を考える上で重要な資料である。

5は、蔚山市中山里遺跡1-A37号から出土した直口短頸壺である。肩部がやや張り、内側に直線的にのびる口頸部をもつ。肩の最大径部に2条の凹線が入り、3帯の凹線間に波状文が施される。本例には耳が付かないが、直口する口頸部から第1図に掲載した。本例に見られる形態は、瓦質土器及び古式陶質土器に既に見られることから、器形として成立する時期は、一連の直口甕と比較すれば、先行する可能性がある。先述した李養璿氏の收藏品である短頸壺1とは共通要素も多く、同一の系譜として認識できる。なお、本例については李盛周氏の詳細な編年的研究^(注11)があり、5世紀第2四半世紀に比定されている。

6は、慶尚北道慶州市に所在する皇南洞110号墳から出土した四耳短頸壺^(注12)である。やや肩部が張り、肩部上面に環状の耳が付けられている。本例は、5世紀前半に比定される。

以上が、朝鮮半島における直口甕の概観であるが、次に、系譜を考察する上で必要な日本列島出土の直口甕を概観しておきたい(第2図)。

1は、長崎県上県郡上県町志多留大將軍山古墳から出土した陶質土器の双耳壺^(注13)である。やや外反する口頸部をもち、頸部と肩部の屈曲部直下に鉛筆状の工具で穿孔した三角形の耳を貼り付けている。報告書によれば、4世紀に比定されている。2も同大將軍山古墳から出土した陶質土器の双耳壺^(注14)である。口頸部は外反し、胴部の最大径部直上に、鉛筆状の工具で穿孔した隅丸方形

の耳を貼り付けている。

1・2とも陶質土器であるが、先ほど概観した古式陶質土器及び陶質土器を中心に考えれば、1は、第1図1に図示した慶尚南道義昌郡大坪里から類似資料が確認されている短頸壺に、2は、第1図2に図示した全羅南道靈岩郡始終面萬樹里第2号墳から出土した有蓋の両耳壺に近似している。これらは、地理的に近接している朝鮮半島南部との地域間交流によって当該地に搬入されたのであろう。

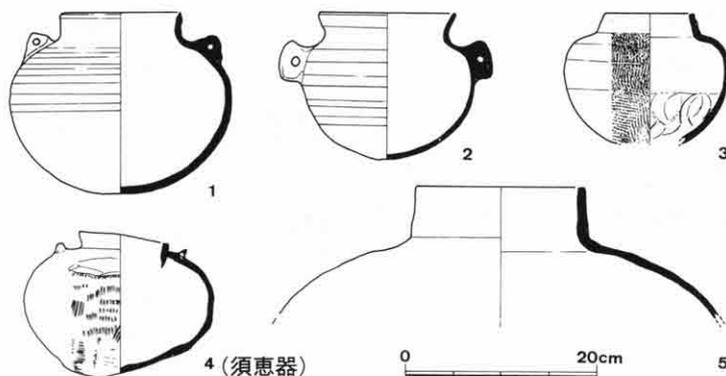
3は、福岡県甘木市池の上6号墳から出土した陶質土器の壺である。^(注15)内側に傾く口頸部をもち、体部外面は平行叩きの後で3条の凹線を施している。本例は、第1図5に図示した蔚山市中山里遺跡1-A37号出土例に近似する形態的特徴を有していることから、慶尚北道一帯から搬入された可能性が高い。時期的には池の上6号墳出土例が4世紀末から5世紀前半に、中山里遺跡1-A37号出土例が5世紀第2四半世紀に比定されている。本例と中山里遺跡1-A37号出土土器は、地域が異なっているものの、同一系譜上にあることが想定できる。仮にそれを前提とするならば、形式的に後出する一要素として認識できるのではないか。

5も同池の上6号墳から出土した壺で、口径が17.6cmを測る。本例のような大型の直口甕は、5世紀前期に比定される慶州市皇南洞110号墳の四耳短頸壺や大阪府陶邑古窯址群及び大庭寺・伏尾遺跡の初期須恵器に見られる。

北部九州における初期須恵器窯の製品には、比較的法量の大きい甕が生産されていることが確認されているが、^(注16)朝鮮半島から搬入されたと考えられる甕は、大將軍山古墳出土例のように器高が20cm前後の小型の個体が多い傾向にある。報告書では、本例を陶質土器としているが、^(注17)法量から勘案して、5は北部九州の初期須恵器窯で生産された可能性もある。

4は、大阪府小阪遺跡から出土した初期須恵器の直口壺である。^(注18)本例は、突起状・板状の耳の典型例として資料提示した個体である。耳の形態を通して見れば、突起状・板状の耳が先行し、環状の耳が後出する傾向が指摘できるが、これは、突起状・板状の耳から環状の耳に型式変化した可能性を示唆している。

以上が、各直口甕の系譜に対する私見であるが、初期須恵器の直口甕a2類は、陶質土器の影響を受けて成立していることが、以上の検討から明らかになったと思う。



第2図 直口甕集成

1・2.長崎県大將軍山古墳 3・5.福岡県池の上6号墳
4.大阪府小阪遺跡

響を受けて成立していることが、以上の検討から明らかになったと思う。

では、次に陶質土器の直口甕の成立について簡単にふれておきたい。

まず、陶質土器自体の起源については、多くの研究者によって実に様々な見解が提示されている。それらには中国の戦国時

代の土器や越州磁器、西晋・東晋の陶磁器を起源とする見解^(注19)や自体発生説も含まれている。そのような状況にあって陶質土器の直口甕が、中国起源であるか朝鮮半島起源であるかについては、現時点では、明確な土器資料を提示して言及できないのが現状である。瓦質土器との関係も視野に入れる必要があるが、中国起源である可能性を支持する立場から、一つの見通しを以下にふれておきたい。

中野 徹氏は、中国陶磁器の器形名称及び用途について「中国古代陶磁の器形と文様」の中で、概観図を用いて簡潔にまとめられている^(注20)。それによれば、球体の体部を呈し、耳をもつ器形を壺あるいは罐、短く直口する器形を盒・盛としている。特に、盒・盛の用途としては、「できあがった料理一般を盛って祭祀を行ない、また、副葬」するとの記述がある。仮に、直口甕の起源を盒・盛に求めれば、陶質土器として成立する段階において既に固定化した用途が存在し、それが踏襲された可能性がある。このことは、朝鮮半島及び日本列島出土の直口甕の多くが、消費地では墳墓から出土している現象と大いに関連するのかも知れない。今後、直口甕の系譜については、多角的に議論する必要があるが、一つの見通しとして、盒・盛をその起源と考えておきたい。

4. まとめ

本稿では、直口甕を布留式甕の系譜を引く a1類と陶質土器の系譜を引く a2類に分類し、特に a2類を中心に検討を加えてきた。その結果、日本列島から出土している陶質土器の直口甕は、その形態的特徴から朝鮮半島での生産地を特定できる可能性が高くなった。

一方、大阪府大庭寺遺跡及び北部九州に所在する初期須恵器窯の発掘調査が実施されるまでは、大型の甕であっても形態や調整技法が近似すれば、陶質土器と認定してきた個体も少なくない。しかし、TK73型式以前の初期須恵器窯では、大型製品が占める割合は高く、朝鮮半島から搬入された陶質土器は、小型製品が中心であることが徐々に明らかになりつつある。

この傾向から日本列島出土の陶質土器の直口甕を見れば、長崎県大將軍山古墳出土例のように小型の製品が大半であり、その系譜をひく須恵器の直口甕は、徐々に大型化する傾向を見せる。そして、古墳時代全般を通して生産されることとなる。

本稿では、須恵器の直口甕の系譜に焦点をあて、該当する陶質土器を概観し、さらに陶質土器の直口甕の系譜についても僅かではあるがふれることができた。しかし、資料提示による検討個体数は数例であり、特殊例を一般化した部分も少なくない。多くの事実誤認が指摘される場所であるが、その責は全て著者にある。直口甕の名称自体は、既に『陶邑古窯址群』Iにおいて使用されているが、最近、使用されることが少なくなっている。名称の変化には、何らかの根拠が存在すると考えられるが、あえて学史に立脚した名称を本稿では使用した。器形名称の統一が待たれるところである。

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第4係調査員)

注1 富加見泰彦・土井和幸「陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ」(『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第75冊)

大阪府教育委員会・財団法人 大阪府埋蔵文化財協会) 1993

- 注2 白石耕治「六・七世紀の須恵器の編年と製作技法—陶邑古窯址群谷山池地区を例として—」(『考古学研究』第36巻第1号 考古学研究会) 1989.6、及び白石耕治氏のご教示による。
- 注3 拙稿「須恵器・直口甕の基礎的検討」(『京都府埋蔵文化財情報』第65号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997.9
- 注4 小池前掲注3文献
- 注5 小池前掲注3文献
- 注6 原口正三「須恵器と土師器」(『日本の原始美術4 須恵器』 講談社) 1979
- 注7 国立慶州博物館編『菊隠 李養璿 蒐集文化財』 1987
- 注8 徐聲勲・成洛俊「靈岩 萬樹里 古墳群」(『光州博物館學術叢書』第3輯 国立光州博物館・百濟文化開發研究院) 1984
- 注9 金基雄『伽耶の古墳』 學生社 1978 120頁
- 注10 金前掲注7文献 121頁
- 注11 李盛周「洛東江東岸様式土器에 대하여」(『제2회 영남고고학회 학술발표회 발표 및 토론요지』 영남고고학회) 1993.4.24
- 注12 金元龍「新羅土器」(『韓國의 美術』1 悦話堂) 1981
- 注13 駒井和愛ほか「考古学から見た対馬」(『対馬の自然と文化』) 1954
- 注14 駒井・前掲注11文献
- 注15 橋口達也「池の上墳墓群」(『甘木市文化財調査報告』第5集 甘木市教育委員会) 1979
- 注16 小田富士雄「須恵器文化の形成と日韓交渉・総説編—西日本初期須恵器の成立をめぐる—」(『古文化談叢』第24集 九州古文化研究会) 1991.3
- 注17 橋口達也・内田俊和「古寺墳墓群」(『甘木市文化財調査報告』第14集 甘木市教育委員会) 1982
- 注18 赤木克視総編集『小阪遺跡』 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1992
- 注19 拙稿「陶質土器の起源について—盃を中心に—」(『堅田 直先生古希記念論文集』 真陽社) 1997において、盃の成立する背景には、中国西晋・東晋の陶磁器が影響したことを論じた。
- 注20 中野 徹「中国古代陶磁の器形と文様」(『世界陶磁全集10 中国古代』 小学館) 1982

追記 当調査研究センター松井忠春主任調査員には、極めて多くの教示を頂いた。心より御礼申し上げたい(1997.12)。

愛宕神社古墳群の発掘調査

竹井治雄

1. はじめに

今回の調査は、丹後国営農地開発事業に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。調査地は京都府竹野郡弥栄町字堤に所在し、丹後半島中央を南北に流れる竹野川右岸の丘陵上に位置する。愛宕神社古墳群は、中世の堤城館跡に比定されていたが、昨年、弥栄町教育委員会が試掘した結果、古墳群であると確認された。愛宕神社古墳群は現在のところ3基(1～3号墳)の古墳から成り立っている。

愛宕神社1号墳は、その名のとおり社殿が建てられていた境内にあたり、2・3号墳は北側に隣接する。この古墳群は、標高約78mの丘陵上にあり、眼下には堤の集落・水田が、さらに竹野川を挟んだ対岸の丘陵には「青龍三年」銘鏡が出土した大田南古墳群が眺望できる。

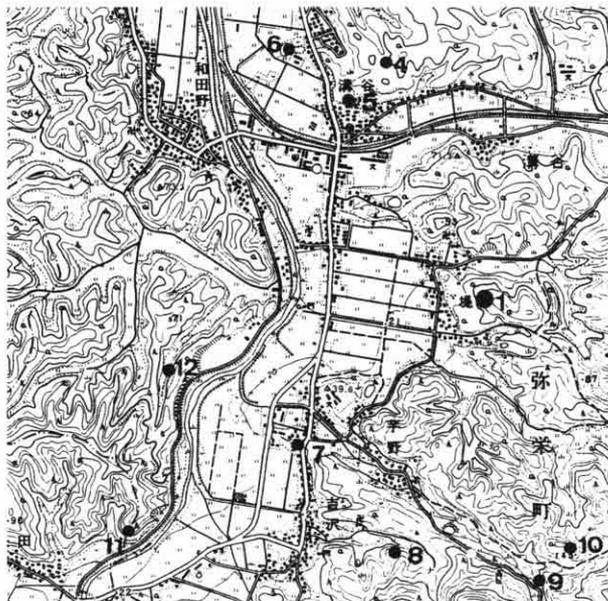
調査は、弥栄町教育委員会の成果を受けて1号墳・3号墳を実施した。2号墳については弥栄町教育委員会により終了している。

2. 調査概要

調査対象地は、1号墳・3号墳のほか南側に古墳状の隆起が見られたことから、対象面積を広げ、1,800㎡とした。しかし、この隆起には古墳の主体部に関するものは無かったが、中世の墓、時期不明の小形炭窯などが検出できた。本号では、愛宕神社1号墳・3号墳について概略を記したい。

(1) 1号墳

墳丘 神社の社殿が建てられた時期(近世)に墳丘は削平され、さらに盛土が行われているが、墳丘基底部の四周については、さほど改変されていない。また、墳丘は盛土で高くなっているが、尾根筋の両端は古墳築造時に削られたものと思われる。墳形は一辺約20mの方墳と推察する。埴輪・葺石などの外表施設は

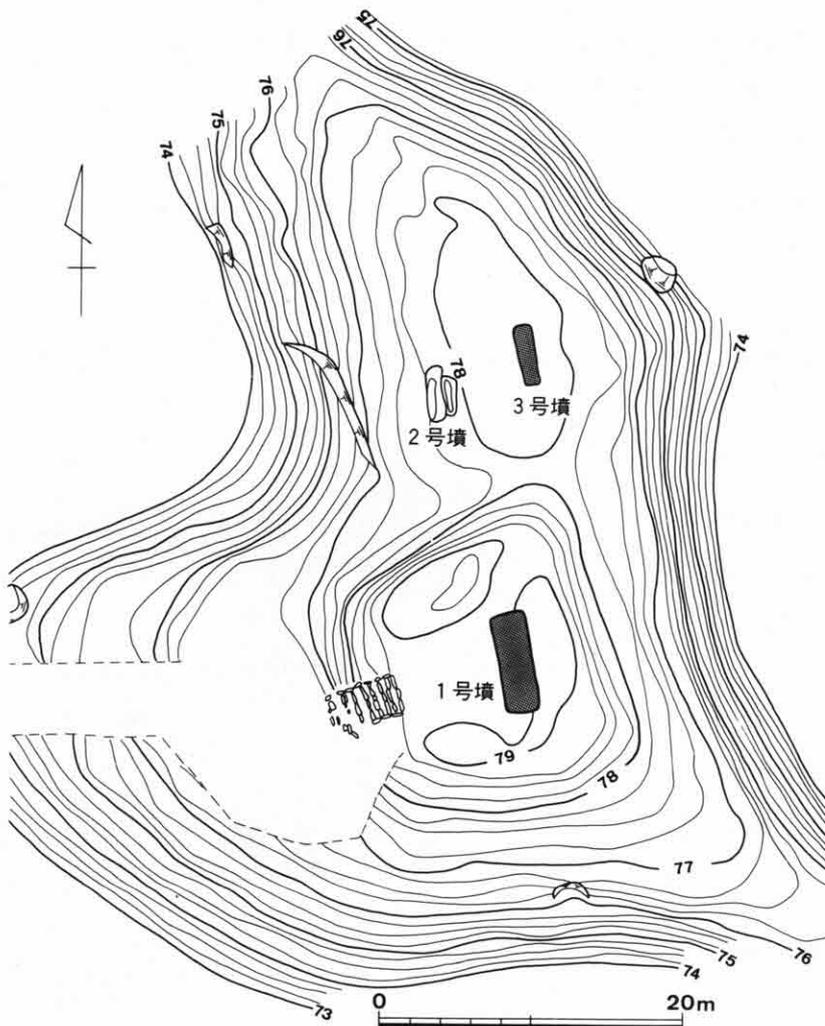


第1図 調査地位置図
1. 愛宕神社古墳群

認められない。盛土下の旧表土は西半部に厚く堆積しているが、遺物は全くなかった。

主体部墳丘の中央部からやや東側に南北方向の主体部を1基検出した。墓壙は二段墓壙を成し、その規模は長辺約7m・短辺約2.6m・深さ約1mを測る。木棺(組合式木棺)は長さ約6m・幅約0.65m・残存高約4.5cmを測り、棺底には木棺の痕跡が認められ、棺の厚みは5~6cmと推定できる。木棺内には2枚の仕切り板の痕跡(幅8cm)があり、3室に分かれる。木棺の南北の両端には白色シルト質の粘土が置かれている。この3室のうち中央の室は、被葬者を埋葬する主室にあたり、長さ1.9mである。南北の2室は副葬品を納める副室と考えられるが、南副室は主室と同じ大きさである事からも一つの主室に相当する可能性がある。墓壙の底は北側が少し高いため、南副室の棺底には地山の赤褐色土を充填して、主室の棺底と高さを揃えている。棺底には板材、石材などは用いられていない。

遺物の出土状況 主室からは銅鏡2枚、鉄刀1口、勾玉4点、管玉18点、ガラス玉168点、壺9点、水銀朱などが出土した。



第2図 調査地地形図

銅鏡の1枚は棺の南東隅、仕切り板に立て掛けられていた。鏡は8片に割られ重なっており、鏡面は外側を向いている。直径は14cmで、鏡式は斜縁二神二獣鏡か斜縁四獣鏡と見られ、外区に「U」字形の透かし彫りの文様がある。銘文帯には「自」、「作」、「有」の文字が見られる。このほか一片だけ外区に鋸歯文を持つ鏡式の違ったものがあった。2面とも舶載鏡と判断される。

鉄刀は棺の東側板に沿い、刃部は外側、切先は南に向け、ほぼ水平に置かれている。全長は87cmを測る。柄に

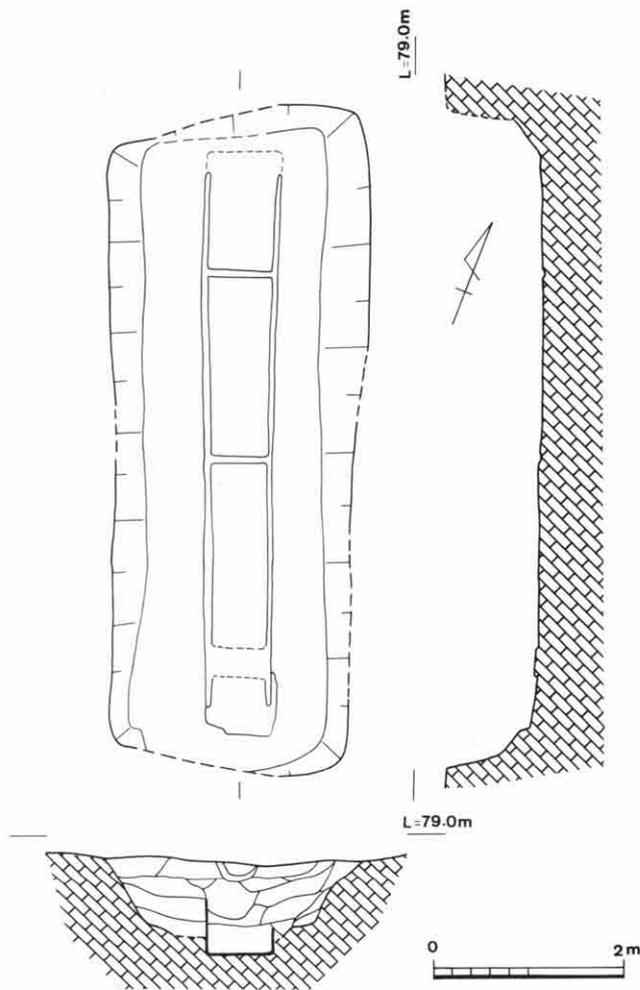
は極細の糸がきめ細かく巻かれている。鞘部の木質には黒漆が残存する。

玉類は棺の北部に集中し、大きく東西に分かれる。東側は勾玉2点を中心にして管玉18点が並び、西側は勾玉1点とガラス小玉が組み合わせてある。ガラス小玉は広く分布し、北の仕切り板、一部は北副室にまで及ぶ。

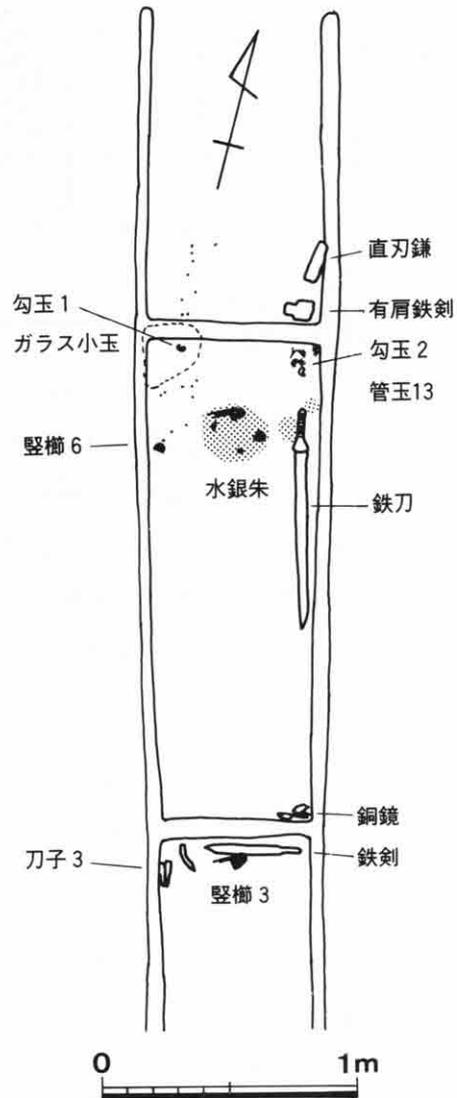
豎櫛は棺内の北側中央部と西側板付近にある。黒漆塗りの豎櫛は大型と小型のものをセットとし、二対が色鮮やかな朱と共に残存している。これは、鉄刀の位置とを考え合わせると被葬者が北頭位であったと推察される。

北副室からは直刃鎌・有肩鉄斧・ガラス小玉が出土した。鎌・鉄斧は南東隅の仕切り板、側板に隣接している。ガラス小玉は主室から連続して分布しており、ばら撒かれたものか、あるいは棺上から落下したものと思われる。

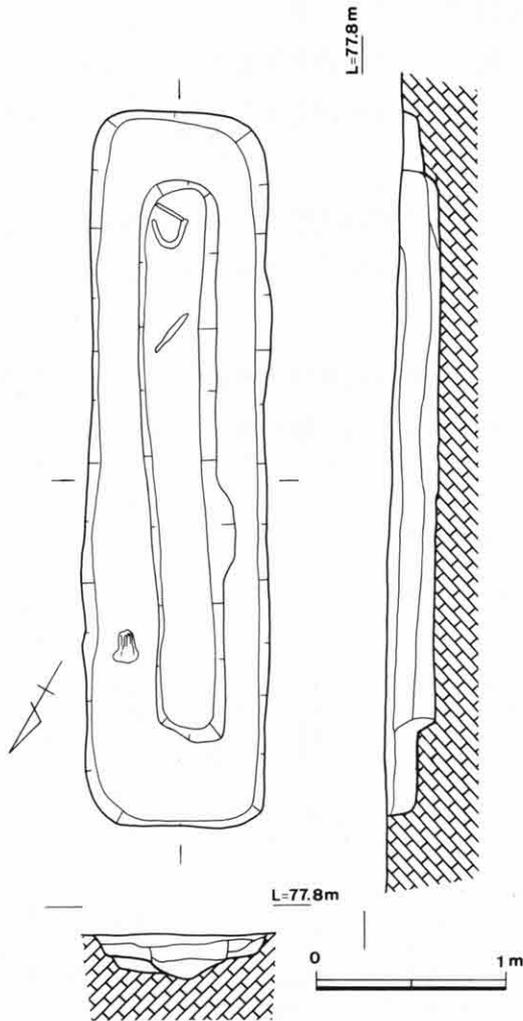
南副室からは鉄剣、刀子3点、櫛3枚が出土した。鉄剣は長さ37cmを測り、仕切り板に沿い、切先は西に向く。刀子は長さ10cmを測り、北東隅でまとまっている。このうち1点は蕨手刀子である。櫛は漆塗りで、3枚が重なり合い、刃部は刀子の方を向く。これは、出土状況から辟邪に用いられたものであろう。



第3図 1号墳主体部実測図



第4図 1号墳主体部詳細図



第5図 3号墳主体部実測図

そのうち2室(主室と南副室)は同じ大きさである。

銅鏡の出土状況は「破鏡」の風習の名残であろうか。あるいは、破鏡を重ねあわせ、あたかも鏡の多さを誇示しているようにも思われる。今のところ鏡式は不明であるが、豊富な遺物と出土状況から、被葬者は地域の有力者と見てよいと思われる。

(たけい・はるお=当センター調査第2課調査第1係主査調査員)

(2) 3号墳

墳丘 1号墳の北側約10mにある木棺直葬墳である。後世の削平のためか墳丘は認められず、墳形及び規模は不明である。

主体部 墓壙は、南北方向の長方形を呈し、その規模は長辺3.8m・短辺0.9m・深さ0.3mを測る。木棺は、舟形木棺で、長さ3.3m・幅0.4mを測る。

遺物出土状況 棺内には鉄剣、鉄製鋤先、鉈、棺側部分からは鉄鏃11点が出土した。鉄製鋤先と鉈は重なり合って棺の南端から出土した。鉄鏃は鋒を揃えて束ねられていた。

3. まとめ

愛宕神社古墳群は、昨年と本年の調査によって1～3号墳の3基からなる古墳群であることが判明した。いずれも木棺直葬墓で、出土遺物から1号墳は4世紀後半、3号墳はそれよりやや新しい時期に造られたと考えられる。

1号墳の特色は木棺の形態、遺物の種類の豊富さが挙げられる。木棺は3室に分かれるが、

長岡京跡左京第399次の発掘調査

(7ANVKN-11、7ANVST-7)

八木厚之

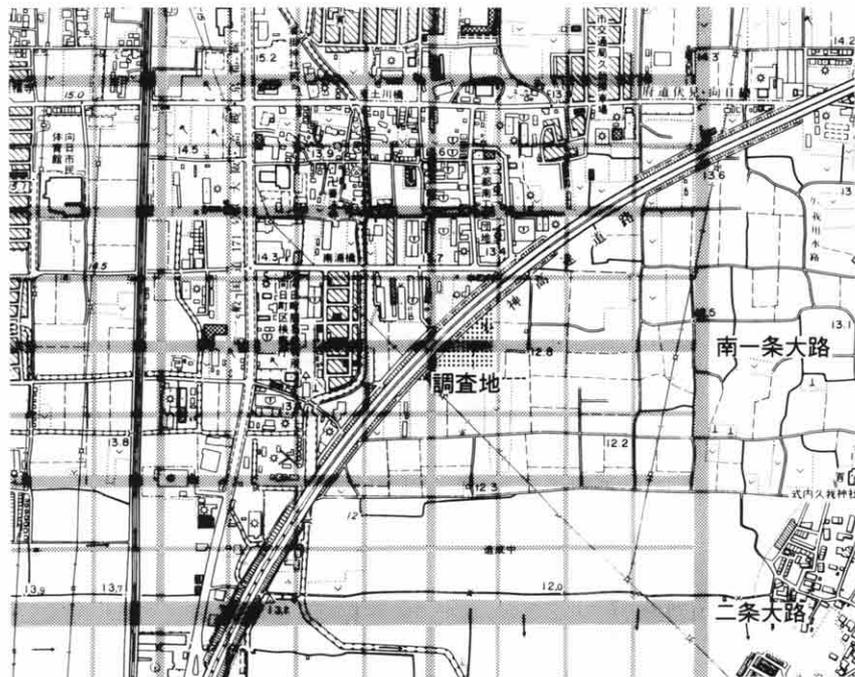
1. はじめに

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて、中央自動車道西宮線(名神高速道路)の拡幅に伴う発掘調査を昭和63年度から実施してきた。今回の調査地は、京都市南区久世東土川町金井田・正登地内に新設される桂川パーキングエリア(P.A.)の予定地内にあり、名神高速道路の下り車線のパーキングエリアの西半分の地域にあたる。平成6年度には、下り車線側のパーキングエリアの周辺の調査(長岡京跡左京第333次・334次・337次調査)、平成8年度には、このパーキングエリアの東半分の調査(長岡京跡左京第384次・385次調査)を行い、本年度に、この西半分の調査を実施することになった。

この調査地は、長岡京の条坊復元によれば、長岡宮内裏の東約1.1kmにあつて、南一条大路(新呼称：二条条間大路)が東西方向に横断し、その北側の左京南一条四坊四町(新呼称：左京二条四坊二町)と南側の左京二条四坊一町(新呼称：左京二条四坊三町)の宅地にあたる。以下では、平安時代・長岡京期を中心とした中層遺構と、下層の奈良・古墳・弥生時代の遺構について概観したい。

2. 調査の概要

平安時代の掘立柱建物跡、井戸、土坑を検出し、その土坑内より青銅製の印章が出土した。長岡京の条坊関連遺構では、南一条大路の南北側溝と東三坊大路の東側溝を検出した。町内遺構としては北側の左京南一条四坊四町では、顕著な遺構は認められなかったが、南側の左京二条四



第1図 調査地位置図(1/15,000)

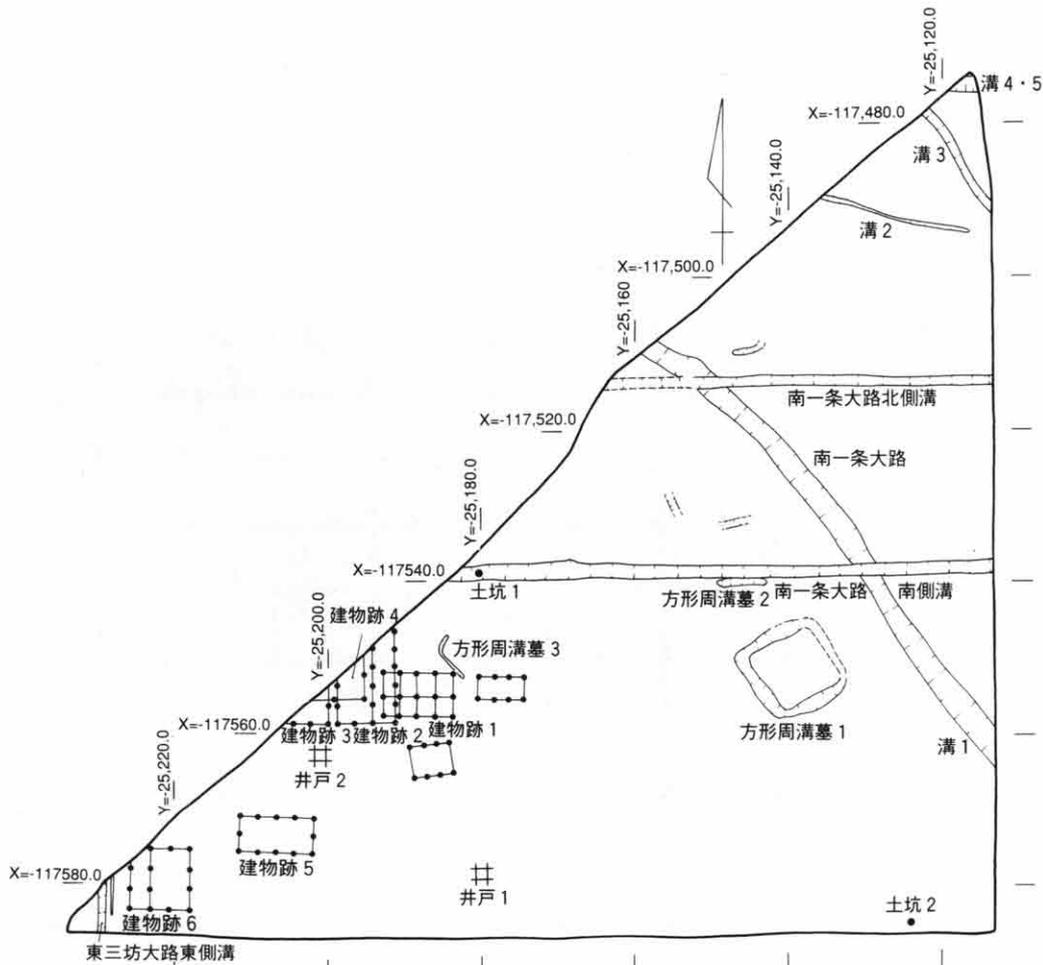
坊一町では、掘立柱建物跡、土坑を検出した。また、下層では奈良・古墳時代の溝、弥生時代の方形周溝墓、土坑を検出した。

(1)平安時代の遺構

この時期の主な検出遺構としては、掘立柱建物跡1棟(建物跡1)、土坑1基(土坑1)、井戸2基(井戸1・2)などがある。

建物跡1は、2間×4間の東西棟の総柱建物である。土坑1は、長岡京廃都後掘削されたと考えられ、直径20cm、深さは検出面から3cmで、ここから青銅製の印章が出土した。この印章は、形態から10世紀～11世紀頃のものと考えられ、高さ34mm・印側高3mmで、蒼鈕有孔である。印面は、縦27mm・横26mmの方形で輪郭があり「福」という文字が陽刻されている(巻頭図版)。私印と考えられるが、どのように使用されたか、はっきりしたことは不明である。しかし、現在の「認印」的な性格を持つものではなく、念のために印を押してその内容を保証するというかたちで使用された、あるいは「福」という文字が彫られているので、おめでたいものとして実際には印としては使用されなかった、などが考えられる。「福」の1文字のみが彫られた印章の出土例は、次の通りである。

茨城県鹿島郡鹿島町 神野向遺跡 8世紀～12世紀



第2図 調査地内遺構(弥生時代～平安時代)

石川県松任市北安田町 北安田北遺跡 9世紀末～10世紀

兵庫県出石郡出石町 袴狭遺跡内田地区 9世紀

その他にも、伝世品として「福」、「今福私印」、「福印」と鋳出された印章もある。また、京都府内では、長岡京跡左京第118次調査で、長岡京期の遺構から出土した木製の印章があるが、これは印面が円形でやや破損しており、1文字か2文字が陽刻で彫られているが、どの様な文字が彫られていたか不明である。

井戸1は、一町内で検出した直径4m・深さ1.1mの円形の掘形で、井戸側は抜き取られ、井戸の底面は、旧桂川の堆積と考えられる礫層に達していた。井戸内より土師器、須恵器、緑釉陶器、黒漆を塗った曲物の底板、桃核などが出土した。また、同じく一町内で検出した井戸2は、東西2.8m・南北3.6m・深さ1.1mの方形の掘形で、縦板組隅柱横棧留めの井戸側を持ち、その内側底面に蓋を取り去り、底板を抜いた、脚も横棧もない櫃を据え、その上面の中央部以外に板材を置き、中央部に曲物を乗せた構造を確認した。これにより、この井戸は一度廃絶された後、再び掘られ、その時に以上の様な状態で櫃と曲物が据えられたと考えられる。

(2)長岡京期の遺構

条坊関連の主な遺構としては、南一条大路北側溝、南一条大路南側溝、東三坊大路東側溝を、左京二条四坊一町内の遺構として、掘立柱建物跡5棟(建物跡2～6)、土坑1基(土坑2)を検出した。

南一条大路北側溝は、幅1.2～1.3m・深さ0.4～0.6mを測り、36mにわたって検出した。溝の掘形は、断面が逆台形になり、側面には直径10cm程度の杭跡が、列になって認められた。底面には、礫敷きの部分もあり、かなり丁寧な造られていたことが窺える。この溝の上層からは、須恵器、土師器、瓦などがまとまって出土した。溝の断面観察から、底面より30cmほど埋土が堆積した段階でも、長岡京期の遺物が出土しており、2時期にわたって投棄されたことがわかる。南一条大路南側溝は、幅1.3～1.6m・深さ0.5～0.7mを測り、70mにわたって検出した。調査地の東側で掘り直した痕跡を溝の断面観察より確認した。この溝内から須恵器、土師器、「京」「是」の習書木簡が出土した。残存長7cm・幅3cm・厚さ0.5cmである。残存長10cm・幅2cm・厚さ0.3cmの大型人形の顔の一部、残存長7cm・顔の幅3cm・厚さ0.3cmの人形の顔部分、瓦、下顎の骨が二つに割れ、それぞれ反対に向いた状態で馬の下顎骨、大腿骨等が出土した。これは、何らかの宗教的行為が行なわれたことを示している。東三坊大路東側溝は、幅1m・深さ0.1～0.15mを測り、3mにわたって検出し、溝内から、須恵器や土師器の小片が出土した。

左京二条四坊一町内の左京第314次調査地から続く建物跡2は、身舎が2間×5間の南北棟の掘立柱建物跡で東側に廂が付いており、建物跡3は2間×5間の南北棟の掘立柱建物跡で、建物跡4は身舎が2間×3間の3面廂の掘立柱建物跡である。それらの建物跡群の南に位置する建物跡5は、身舎が2間×5間の東西棟の掘立柱建物跡で南側に廂が付いている。建物跡6は、建物跡5の西側に位置し東三坊大路に面しており、2間×3間の身舎に西側廂の付く掘立柱建物跡である。

土坑2から土師器の皿が、約30枚重なった状態で出土したが、何らかの宗教的行為が行なわれたと考えられる。

(3) 奈良時代・古墳時代の遺構

奈良時代の主な検出遺構は、調査地の南東隅から南西方向に伸びる溝1で、幅2.6～2.7m・深さ0.5mを測り、73mにわたって検出した。底面から偶蹄類の足跡を検出した。

古墳時代の主な検出遺構は、溝2～5である。溝2は、調査地の北部を東から西に蛇行して伸びる溝で、幅0.5m・深さ0.1mを測り、11mにわたって検出した。溝3は、調査地の北部を東から北西方向に伸びる溝で、幅1.1～1.2m・深さ0.4mを測り、15mにわたって検出した。溝4は、調査地の北東隅を流れる溝で、幅1m・深さ0.2mを測り、2.5mにわたって検出した。溝5は、溝4が埋まった後に掘られた溝で、幅1m・深さ0.15mを測り、2.5mにわたって検出した。

(4) 弥生時代の遺構

弥生時代の主な検出遺構は、方形周溝墓3基(方形周溝墓1～3)である。

方形周溝墓1は、東西11m・南北11mの規模で、周溝は、幅1～2m・深さ0.2～0.4mを測る。近世の攪乱に所々切られているが、周溝北辺部より弥生時代中期の土器が出土した。方形周溝墓2は、東西6m以上・南北7.5mの規模で、周溝は幅1m・深さ0.4mを測る。方形周溝墓3は、東西3.2m以上・南北6m以上の規模で、周溝は幅0.5m・深さ0.2mを測り、周溝西辺部で弥生時代中期の土器が出土した。

3. まとめ

今回の調査地では、南一条大路をはさんだ北側の南一条四坊四町、南側の二条四坊一町の宅地について調査した。周辺の調査も含め、南一条四坊四町域では、宅地の約半分の調査ができた。また、南の二条四坊一町域でも、宅地の北半部の調査をした。周辺での調査も含め、現在までに明らかになったことは次の通りである。

南一条四坊四町の宅地は、南北2分の1町の地割りにのっとった塀を検出しているため、2分の1町以下の班給が行なわれた事が考えられる。また、二条四坊一町の宅地は、南一条三坊十三町のように一町規模で使用された可能性は、低いと考えられる。古墳時代の遺構としては、過去の調査地(長岡京跡左京第385次調査)から続く溝を検出した。農耕に関する灌漑用の溝であると考えられる。

弥生時代の遺構としては、方形周溝墓を3基検出した。今回の調査地では、これ以外に方形周溝墓は検出できなかったが、昨年度以前の調査で複数の方形周溝墓が確認されていることから、この地域も墓域であった可能性が指摘できる。また、平成8年度調査(長岡京跡左京第385次調査)では、集落を取り囲む環濠が見つかった。これらのことから、弥生時代中期の集落と墓域の関係を復原する上での、基礎資料を得ることができた。

(やぎ・あつゆき=当センター調査第2課調査第4係調査員)

南山城地域の高地性集落

—一般地方道富野荘八幡線関係遺跡(宮ノ背・西ノ口・備前遺跡)の発掘調査から—

河野 一 隆

1. はじめに

八幡市の西南、男山丘陵から南に伸びる低平な美濃山丘陵は、ベッドタウンとしての宅地造成が著しく、鬱蒼たる竹林が広がる往時の景観は失われている。この地区には、拠点的な集落である金右衛門垣内(井の元)遺跡・南山遺跡や、美濃山王塚古墳・ヒル塚古墳などの弥生～古墳時代の多くの遺跡が知られている。また、丘陵西側は大阪府枚方市に接し、現在は国道1号線が、かつては旧山陽道や洞ヶ峠を越える東高野街道が通じ、北河内や淀川流域の交通の要衝である(第1図)。

今回の発掘調査は、一般地方道富野荘八幡線(山手幹線)の道路建設に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。宮ノ背遺跡は平成3年度に大阪工業大学の造成に先立って八幡市教育委員会による試掘調査が実施された。平成8年度には、道路建設に先立つ宮ノ背・西ノ口遺跡の発掘調査によって、弥生時代後期の竪穴住居が確認された。今年度調査は、宮ノ背遺跡は昨年度の隣接地、西ノ口遺跡は道路予定地に残る丘陵部分、備前遺跡は洞ヶ峠に臨む丘陵斜面を対象とした。その結果、各遺跡で遺構・遺物を検出し、本格調査を行う運びとなった。調査面積は約1,450m²で、宮ノ背遺跡は約500m²、西ノ口遺跡は約500m²、備前遺跡は約450m²である。調査期間は平成9年6月22日から10月9日である。

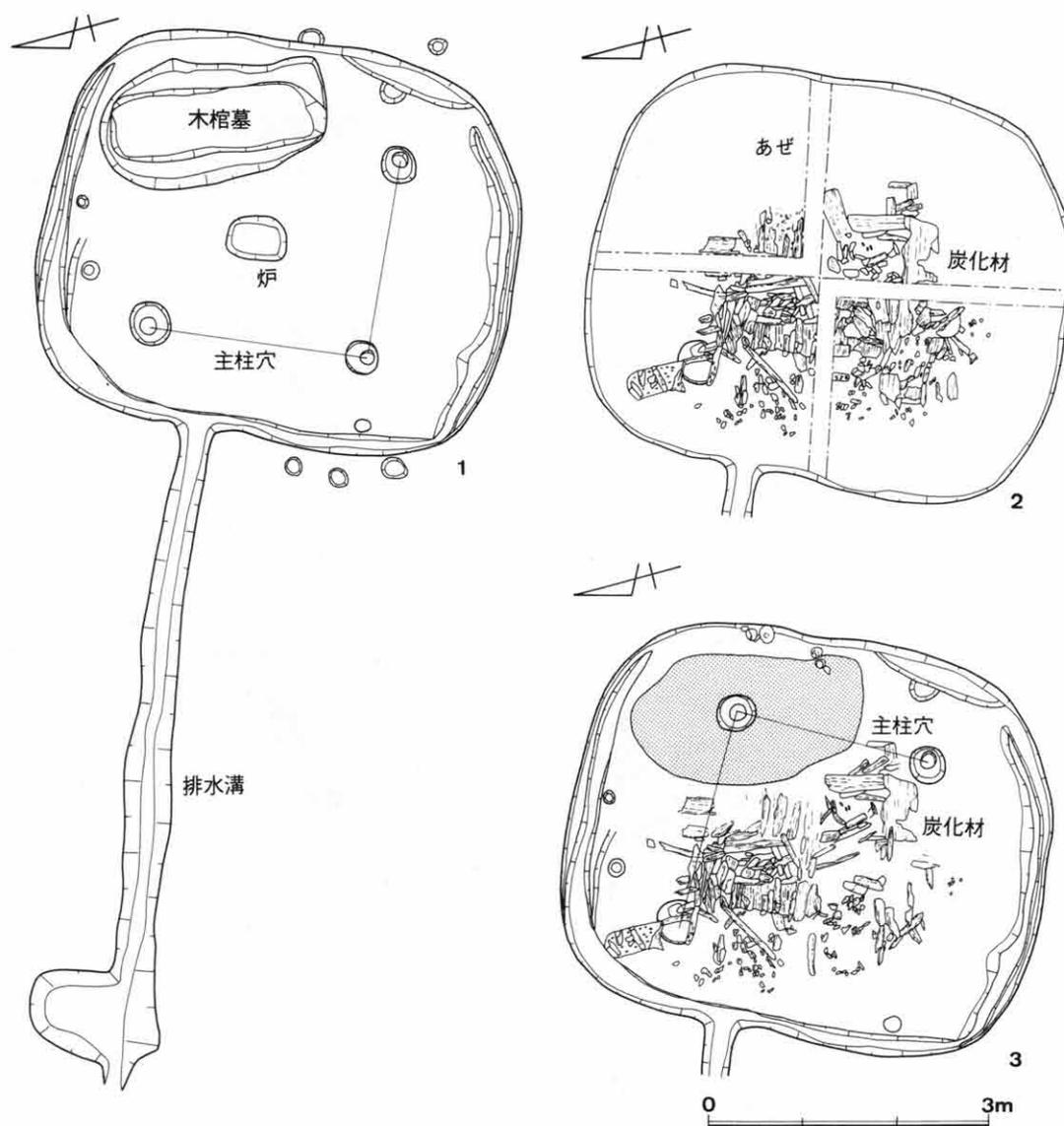
なお、本稿で使用する時期名称は、ことわりのない限り、弥生時代のものである。



第1図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

2. 調査の概要

宮ノ背遺跡 昨年度の調査地に隣接する丘陵頂部の平坦地を調査し、竪穴住居3基、木棺墓1基を検出した(第3図右)。その内の1基は焼却処分された住居で、その下層に木棺墓が営まれていた(第2図)。この住居は、長辺5.0m、短辺4.3mを測る長方形の竪穴住居で、尾根先端部に向かって長さ7.3mの排水溝を持つ。4本の支柱穴を穿ち、四周には溝が巡るが、住居は1度建て替えられたようである。また、住居南側に近江型鉢を中心とする完形の土器が残されていた。この住居の特徴は、炭化材が住居掘形上面で検出されたことである。これは、炭化材が中央部に集積されており、廃屋に火を放ったものと推定される。この住居の炭化材に混じって、緑色凝灰岩製の管玉1点が出土し、住居廃絶時の祭祀行為がうかがわれる。また、別の住居からは鉄鏃(三角鏃)が出土している。宮ノ背遺跡では、中期末の土器も出土しているが、主体となる時期は後期後半である。



第2図 宮ノ背遺跡(平成9年度)1号住居実測図(1/80)

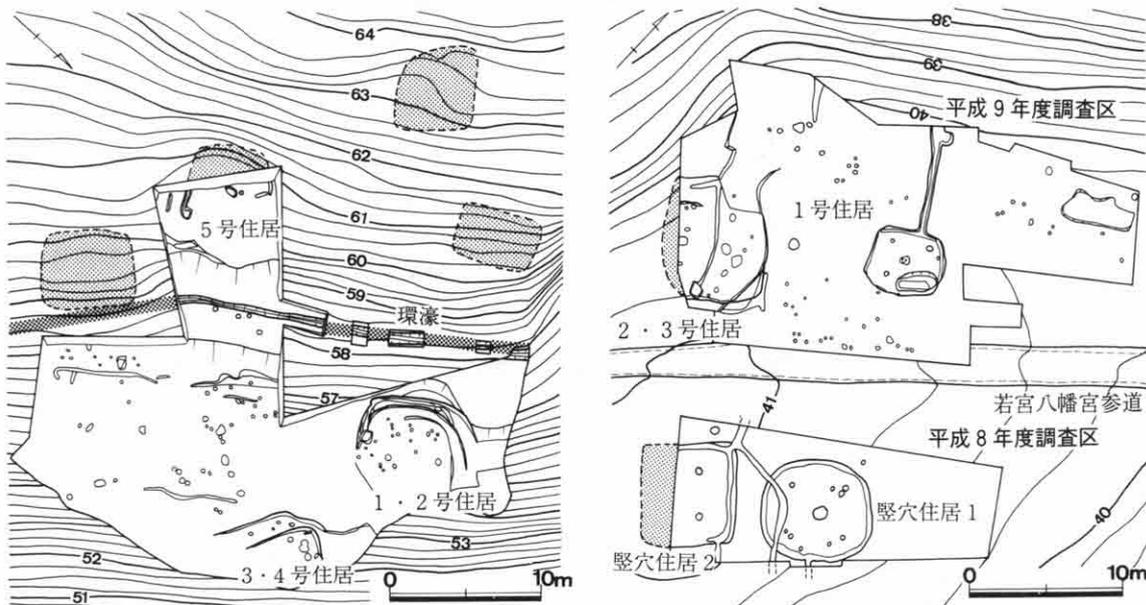
西ノ口遺跡 昨年度の調査地から長尾街道を挟んで対面する丘陵頂部の平坦地が対象となった。ここでは、一辺15mの削平された方墳1基とそれに先行する4基の住居跡を検出した(写真1)。住居はいずれも古墳の墳丘範囲内で検出され、竹林造成による削平が及ばなかったものと推測される。住居は中央炉と壁溝を持つ長方形プランのも



写真1 西ノ口遺跡(平成9年度)全景

ので、床面の遺物は少なかったが、庄内式期に築かれたものである。古墳の周溝内からは須恵器壺と土師器高杯が出土した。古墳時代後期のものである。

備前遺跡 今まで遺物散布地として周知されていたが、今回の調査で遺構が分布していることが分かった。調査地は、洞ヶ峠に臨む丘陵であり、標高60mを測る急な斜面地に立地する(第3図左)。これを断面L字形に削り、テラス状住居5基を造っている。また、丘陵中腹には、削り出しによって急峻な斜面を造り、その前面に丘陵を囲郭する環濠と犬走り状の平坦地を持つ。これは、丘陵頂部付近に立地する住居群を防御するための施設であると想定される。この溝中から



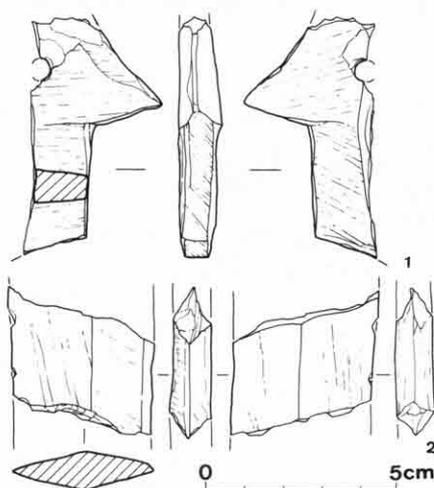
第3図 八幡市備前遺跡(左)・宮ノ背遺跡(右)測量図(1/500)
濃い梨地は環濠、淡い梨地は住居推定地

は完形率の高い多量の土器群が廃棄されており、調査地内では2個所の土器溜りを検出した。これは、後期初頭の土器もあるが、主体は後期中頃で、その内の1個所では桃核3点が出土したので、意図的に一括投棄された可能性も指摘できる。住居は全てテラス状住居で、方形のものと楕円形のものがあり、いずれも後期初頭に建てられ、後期中頃に建て替えられている。主な出土遺物として、住居内から鉈・石戈、溝から石剣破片が出土した。

3. 石剣および石戈について

今回の調査で出土した遺物の内、特筆されるものに石剣と石戈がある(第4図)。石戈(1)は、内から胡にかけての半身が遺存したもので、胡に円孔を穿っている。遺存長6.2cm・遺存幅3.4cm・内の厚さ0.9cmを測る。両面は丁寧に研磨され、穿孔も両面からである。石剣は剣身中央部の小片で、断面菱形に丁寧に研磨されたものである。剣身幅3.6cm・遺存長3.0cm・厚さ1.1cmを測る。また、片面の刃部は鏑が研ぎ出されている。石材はいずれも同一で、灰褐色で節理の明瞭な粘版岩である。これらは、破片であるが、高地性集落では出土例が少ないものである。近傍の弥生集落では、京都市の東土川遺跡(名神高速道路P.A.工区)、木津町大畠遺跡などで石剣と石戈の共伴が知られるが、その内容には若干の違いがある。それは、石戈の形態の差異から生じている。

そもそも、石戈とは銅戈を模倣した弥生時代の武器形石製品で、着柄されない儀器的用途に供されたと考えられている。また、全国的な分布をみると、100例程度知られており、北部九州を中心とするが近畿地方にも出土例がある。下條信行氏は、九州型石戈と近畿型石戈を分け、前者は胡に接する援に孔1対を持ち、後者は援に樋を掘っているという差が認められると^(注1)いう。ただし、それ以外にも、胡が上下の段差を生じ、内の端部には1孔を穿つ石戈が知られている。実は、近畿地方で類例の多い石戈はこの型式で、京都府八幡市金右衛門垣内遺跡、大阪府枚方市田口山遺跡などの枚方丘陵北部から男山丘陵にかけての高地性集落で出土したものが該当する。その原



第4図 備前遺跡出土の石戈(1) 及び石剣(2) 1/2

型は、大阪府東大阪市西ノ辻遺跡出土例に求められよう。ところが、備前遺跡検出の石戈は樋を持たない九州型石戈に他ならず、これは兵庫県神戸市青谷遺跡、福井県小和田遺跡など畿内周辺部でみられる程度で、中央部では今まで出土例がなかった。仮に本例が九州地方からの搬入品であれば、弥生後期初頭の文化的な交流を物語る資料である。それでは、畿内中央部でも九州型石戈が流通していたのだろうか。古墳時代の事例であるが、八幡市域の男山から美濃山にかけての丘陵には八幡茶白山古墳や狐谷横穴、荒坂横穴などの九州の文化要素を持つ遺跡が散見されるという地域的特性がある。しかし、本例と石材が共通する石剣は、桂

川を挟んで対岸の長岡京市神足遺跡などでの製作が知られており、石戈のみが九州からの搬入品と見るには躊躇される。また、その一方で、近畿型石戈と九州型石戈の形態差は、前者が細型・中細型銅戈、後者が大阪湾型銅戈を模倣対象とした点から生じたと考えられている。備前遺跡の九州型石戈が畿内で製作されたとすれば、それは、模倣対象とされた銅戈が畿内中央部地域でも、一程度存在していたことを裏付けるものだろう。なお、吉田 広氏は唐古・鍵遺跡第13次調査で出土した銅矛形石矛を詳細に検討した中で、畿内中央部でも中細形銅矛の普及を示唆している^(注2)。この石矛も破片であるが、出土した層位である中期後半の所産であるとすれば、備前遺跡の九州型石戈と併せて、この時期に顕在化する青銅器の東方流入とも無関係ではないと考えられる。

4. 南山城地域の高地性集落

宮ノ背遺跡と備前遺跡の調査成果に基づいて、今まで知られている南山城地域の高地性集落を典型的に整理しておきたい。高地性集落研究の現状は、単に恒常的な軍事的緊張関係を背景に、可耕不能な高所に立地した集落のみではなく、物流ルートの日常的管掌にあずかったものと捉えられている。森岡秀人氏は、成熟した(第二段階の)農耕社会の崩壊・再編期に登場するもの(Ⅳ期末～Ⅴ期初頭)と、「倭国大乱」に伴う連絡機能型の集落で、Ⅵ期にかけての北陸道への高地性集落の普及と連動するもの(Ⅴ期中頃)の分別を主張している^(注3)。また、都出比呂志氏は、立地から沖積地の集落との比高差が大きい高地性集落と、沖積地との隔絶性がさほど大きくはない準高地性集落を分けた^(注4)。これらの視点を参考に南山城の高地性集落を次の2類型に整理してみたい(第5図)。

備前類型 八幡市備前遺跡を標式とする。眺望の優れた丘陵斜面部に占地する高地性集落で、丘陵を囲郭する環濠を有する。建物は、斜面をL字形にカットした方形テラス状住居が主体である。築造時期は中期末～後期初頭であるが、後期後半にも集落の再居住が認められるものもある。

	主な土器	近江	施設		住居		生産具		祭祀具		南山城地域での該当例
			環濠	木棺	テラス	竪穴円	竪穴方	石器	鉄器	武器	
備前類型											八幡市備前遺跡 八幡市幣原遺跡 宇治市羽戸山遺跡 京田辺市飯岡遺跡
天神山類型				?							京田辺市田辺天神山遺跡 八幡市宮ノ背遺跡 八幡市南山遺跡 城陽市森山遺跡 木津町燈籠寺遺跡 木津町白口遺跡

第5図 南山城地域における高地性集落の二者(土器の縮尺1/8)

遺物は全般に少なく、鉄器の普及も顕著でないが、祭祀関連遺物が見られることが特徴である。また、居住域に近接して墓域が設けられるものもある。この類型に該当するものに、八幡市幣原遺跡、宇治市羽戸山遺跡がある。また、今年度に当センターによって試掘調査が実施された木津町城山遺跡(仮称)もこの類型に属する。

(田辺)天神山類型 京田辺市田辺天神山遺跡を標式とする。広い平坦面を持つ丘陵頂部に占地する高地性集落で、環濠は有さない。建物は、円形あるいは方形の竪穴住居で排水溝を持つものもある。初現は中期末～後期初頭であるが、盛行期は後期中頃～後半である。遺物は多く、鉄器の出土も珍しいものではない。八幡市宮ノ背遺跡は、この類型に該当するものであろう。

この2類型は中期末～後期初頭の高地性集落でほぼ同時期に顕現するが、備前類型は後期中頃に登場する高地性集落では見られない。備前類型は環濠を持ち、墓域が居住域と近接することからも、中期の拠点集落の構成要素が指摘でき、後期になって拠点性を喪失した中期までの弥生集落が丘陵上に築かれたあり方を示している。南山城地域では、全体をうかがう資料は無いが、この典型例は大阪府高槻市古曾部・芝谷遺跡である。もっとも、北近畿に目を転じると、京都府峰山町扇谷遺跡・弥栄町奈具岡遺跡など、前期以来、環濠やテラス状住居を丘陵上に築く弥生集落が知られており、備前類型は南山城地域で検出された北近畿型の弥生集落とみなすこともできよう。ただし、残念なことに、南山城地域では中期の拠点的な集落の実態が明確ではなく、中期から後期への動態の解明には、現在の資料からでは限界がある。

一方、天神山類型は中期的要素が払拭された高地性集落で、後期になっての地域社会の再編成に伴って出現するものである。この類型では鉄器出土例が多く、実用利器としての鉄器が小規模集団にまで浸透したことを裏付ける。さらに注意される点は、天神山類型が盛行する後期中頃～後半は、南山城地域の弥生社会においての一つの画期とみなされることである。この時期に、土器様式においては二重口縁壺・手焙形土器が加わり、細頸壺が器種として明確化し、近江系土器の影響が色濃くなって来る。また、住居プランも円形から方形へと変遷し、生産用具では鉄器の比重が高くなって来る。さらに、備前類型の高地性集落においても、後期後半に再居住がみられ、その後、集落が一時に廃絶したような状況を呈する遺跡も多い。焼失住居あるいは焼却処分住居が増加するのもこの時期以後のことである。これらの証拠は、後期中頃～後半が「倭国大乱」という単なる戦闘行為のみの結果ではなく、より深層からの社会的変容が進行中であったことを物語っている。その契機が何かは想像の域を出ないが、南山城地域の高地性集落においては、中期末～後期初頭よりも後期中頃～後半をより大きな画期として重視すべきだと言えよう。

(かわの・かずたか=当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 下條信行「石戈論」『史淵』第113号 九州大学文学部 1975

注2 吉田 広「銅矛形石矛について」『みずほ』第22号 大和弥生文化の会 1997

注3 森岡秀人「弥生時代抗争の東方波及—高地性集落の動態を中心に—」『考古学研究』第43巻第3号 1996

注4 都出比呂志「第5節 倭国の乱と乙訓」『向日市史』上巻 99～100頁

対馬の遺跡をたずねて

小池 寛

1. はじめに

平成9年度に実施した共同研究「京都府内における銅剣形石剣の出土とその背景」では、関連遺物の資料調査を対馬において実施した。本稿は、資料調査時の全般的な所見を簡単にまとめた覚え書きであり、正式な成果報告は、次年度以降に発表する予定である。なお、今回の資料調査は、本共同研究の主担当である中川和哉調査員と共同で実施したものであり、平成9年7月14日から17日までの期間で行った。

2. 共同研究に至る経過

対馬を具体的に認識したのは、松前 健先生の朝鮮半島の民俗に関する講義を受講した時点と記憶している。講義では付随的に対馬の民俗例が紹介されたにすぎないが、地理的に近接する朝鮮半島との人的交流が頻繁に行われたことを学習した。一方、金関 恕先生の考古学及び東西文化交渉史の講義では、朝鮮半島、対馬、北部九州における文化交流の歴史の一端を学習した。講義中に水野清一・樋口隆康・岡崎 敬諸先生が執筆編集された『対馬』^(注1)の存在を知り、研究室の書架を探した記憶がある。

1986年に刊行された『えとのす』^(注2)は、「朝鮮・対馬海峡の道」と題した特集号であった。巻頭の精緻にして豊富なカラー写真図版とともに考古学・民俗学・民族学・神話学・生物学・植物学からアプローチした論攷が多数掲載されており、興味深く熟読した。実は、その時期、帝塚山大学考古学研究所の東アジア研究部会で対馬に行く計画が予定され、予備学習を行っていたが、何らかの事情で参加できず、それ以来、対馬の学習については滞っていた。

1990年、京都府与謝郡加悦町に所在する蔵ヶ崎遺跡から弥生時代前期に比定できる鑿形石製品が出土し、^(注3)改めて朝鮮半島、対馬、北部九州、山陰との関連を視野に入れる必要を痛感した。その後、中川調査員に、銅剣形石剣が成立する歴史的背景について教示を頂き、数回の討議を重ね、共同研究として申請する運びとなった。

3. 対馬探訪

対馬を訪れる以前は、『比田勝』^{ひたかつ}『巖原』^{いずはら}『豆酸』^{まめづつ}『雞知』^{けち}などの地名を正確に読むことすらおぼつかなかった。また、上県郡と下県郡に所在する町の位置関係さえ、白地図に落とせない状況であった。一方、到着するまでの対馬については「海」のイメージを描いていたが、島内を縦貫す

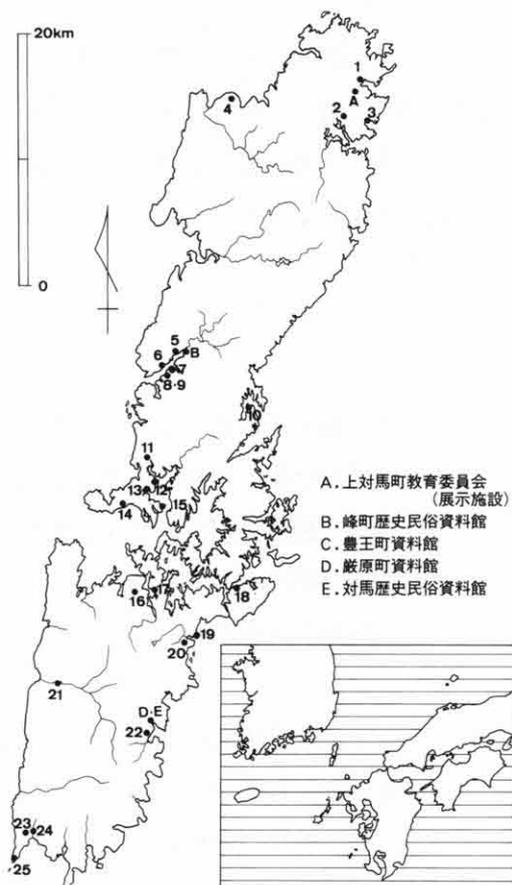
る国道382号線は、海岸部をほとんど通過せず、鬱蒼とした森林を縫うように走っている。全島の約88%が山林である環境は、まさに、魏志倭人伝の「土地山嶮多深林道路如禽鹿徑」の一文そのものであった。^(注4)

対馬は南北82km・東西18kmと細長く、総面積は約710km²である。九州北部から約132km、韓国までは約50kmの位置関係にあり、その昔は、病人が出ると釜山に船で連れて行ったと言う話を対馬荘の内山和夫氏から聞いた。現在も不定期ながら釜山港と比田勝港間を1時間30分で小型高速船が運航されている。実際、上対馬町鰐浦に所在する朝鮮国訳官使殉難之碑が建つ丘からは、釜山周辺を見ることができ、夜景などは特に趣があると聞いた。当日は、気象条件が不良で見えなかったが、かつて赴いた韓国に想いを馳せた。

対馬の人口は約45,000人で、約70%にあたる30,000人が下県郡に住んでいる。現在の行政区画は、北半の上県郡と南半の下県郡に分けられており、上県郡を北から上対馬町・上県町・峰町、下県郡を豊玉町・美津島町・巖原町に区分している。

上対馬町では、ご多忙の中、上対馬町教育委員会の比田勝隼機課長に塔の首遺跡・朝日山遺跡・コフノ採遺跡を案内して頂いた。塔の首遺跡で確認された5基の石棺内からは広幅銅矛・青銅製釧・方格規矩文鏡・ガラス小玉8,000個などが出土しており、対馬を代表する弥生時代後期の遺跡である。一方、朝日山遺跡は、南北に分断される舟志湾の北湾に位置しており、北湾に突出する岬の先端部分に所在している。岬の先端部分の最高所には^{へきれき}霹靂神社が所在しており、4基の石棺は、この裏山に所在している。また、コフノ採遺跡は、津和川の河口部に位置しており、遺跡からは津和浦を一望できる条件下にある。1983年に発掘調査が実施され、13基の石棺及び石室が確認されるとともに加耶系の陶質土器が出土している。これらの遺跡は、海からのランドマークとしての意義が想定されており、海を意識した選地が窺われる。

初日の夜は、上対馬町泉に所在する対馬荘の内山和夫氏から実に様々な話を拝聴した。話は、丘陵の緩斜面に咲くオニユリのことや今では資料館



資料調査地位置図

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 塔の首遺跡 | 2. 朝日山古墳 |
| 3. コフノ採遺跡 | 4. 千俣蒔山 |
| 5. 下ガヤノキ遺跡 | 6. 佐賀貝塚 |
| 7. 恵比須山遺跡 | 8. 吉田蒙古塚遺跡 |
| 9. 太田原丘遺跡 | 10. 曾の観音鼻遺跡 |
| 11. 唐崎箱式石棺 | 12. 赤崎遺跡 |
| 13. スス崎遺跡 | 14. 加志々遺跡 |
| 15. 鐘掛崎遺跡 | 16. 金田城 |
| 17. 大吉戸神社 | 18. かがり松鼻遺跡 |
| 19. 根曾古墳群 | 20. 出居塚古墳 |
| 21. 矢立山古墳群 | 22. 久田遺跡 |
| 23. 雷神社 | 24. 赤米神田 |
| 25. 豆酸崎 | |

の民具となったナガテボ(背負い籠)、田畑での石おこしに使うホグシ、イルカ漁、ツシマヤマネコなど多岐に及んだが、何よりも韓国に対する親近感が感じられる話は、韓国に最も近い地理的条件にあることを改めて認識できた。

峰町立歴史民俗資料館では、ご多忙の中、阿比留伴次氏にお世話になり、下ガヤノキ遺跡・佐賀貝塚・恵比須山遺跡・吉田蒙古塚遺跡・太田原丘遺跡などの遺物を実見・実測させて頂いた。峰町佐賀貝塚からは、鹿角の叉状部を丁寧に加工した縄文後期に比定できる鹿笛が出土している。事前に写真を見てその存在については知っていたが、想像していたより小さい印象を受けた。また、恵比須山遺跡出土の青銅製の粟粒文方柱十字形剣把頭や下ガヤノキ遺跡出土の青銅製剣柄、



上対馬町塔の首遺跡

太田原丘遺跡出土の磨製石剣などについても十分観察でき、出土状況についてもご説明頂いた。阿比留氏には資料の丁寧な説明とともに対馬に関する考古学や民俗などについてもお教え頂いた。なお、かつて陶質土器の盃を集成したことがあり、恵比須山遺跡出土の盃をいつか実見したいと思っていた。今回、阿比留氏のご配慮により詳細な観察ができたことは望外の喜びであった。

豊玉町においては、まず、町立郷土館を訪ねた。地元の人に館までの道を尋ねるとすぐに見つけられるとのこと。早速、車を走らせると仁位の高台に白を基調としたモダンな建物群を発見した。今までの博物館・資料館に対するイメージとは全く異なる外観に多少驚きながら、社会教育課の松井雅美氏に郷土館を開けて頂いた。館内には、仁位川河口の張り出した岬に所在するハロウ遺跡の石棺模型と磨製石剣・弥生後期の土器群・小型仿製内行花文鏡・広型銅矛・ガラス玉などが展示されており、佐保シゲノダン遺跡出土の双獣付十字形把頭金具・銅矛・銅剣の複製、佐保唐崎遺跡出土の有孔笠頭銅器の複製、曾の観音鼻遺跡・スス崎遺跡・鐘掛崎遺跡出土の陶質土器なども実見できた。

天気予報では翌日は雨との情報を得、16時近くではあったが標高275mの^{かねだのき}金田城の登城を強行した。夕刻ではあるが太陽は容赦なく照りつけ、湿度も高く、急な坂道を登ること1時間、無事、登頂した。途中、高さ2～5mの城壁や木戸跡を確認し、667年に築城された歴史を身体で感じることができた。頂上からは浅茅湾が一望でき、最良の立地条件下に築城されたことを知った。しかし、頂上には、第二次世界大戦時の軍関連施設が良好な状態を保っていた。時代は異なるが常に戦いの最前線にあったことを思い起こさせてくれた。近年、戦争遺跡の保存についての論議が盛んであるが、机上の空論とならぬように遺跡の現状確認が重要であることを改めて痛感した。なお、築城に関しては『日本書紀』巻第27、天智天皇6年の「是月、築倭國高安城・讚吉國山田郡屋嶋城・對馬國金田城。」の記事によって^(注6)おり、考古学的調査成果との比較検討がまたれる。その夜、美津島町高浜の国民宿舎に宿泊した。資料整理を行い、イカ釣り船の漁り火を眺めながら、翌日の備えをした。



厳原町豆酛赤米神田

美津島町の根曾古墳群は、三日目の早朝に訪れた。6基からなる古墳群であるが、1・2号墳は残存状態の良い前方後円墳である。全長は30m程であり、出土遺物から古墳時代中期末から後期に築造されたと考えられている。正林 護は、前方後円墳であることに着目し、積極的に畿内政権との関連を示唆しているが、北部九州との関連において築造された歴史的背景も視野に入れる必要があるのではないだろうか。近年、韓国の全羅道において確実な前方後円墳が確認されているが、その築造の歴史的背景を北部九州との関係で考える研究者も少なくない。^(注8) 今後、畿内から遠距離にある地域の前方後円墳の解釈を再検討する必要がある。

根曾古墳群の現地検証を終え、美津島町教育委員会の田中 淳也氏を訪ねた。小雨の中、前方後方形の墳丘をもつ出居塚古墳と美津島町文化会館及び資料室を丁寧にご案内頂いた。特に、足下の悪い中、スーツの汚れも気にされず、先頭に立って古墳を案内していただいたご高配に感謝するばかりである。また、京都を発つ前から楽しみにしていたかがり松鼻遺跡^(注9)の銅剣・把頭飾・ガラス玉などの実見を許可して頂いたことは、望外の喜びであった。その出居塚古墳は、全長40mを測り、主体部からは有茎柳葉式銅鏃が出土しており、古墳時代前期から中期に比定されている。先述した根曾古墳群を眼下に見おろす条件にあり、当該地における首長墓の系譜を考える上で興味深い地域である。^(注10)

厳原町資料館では上対馬町朝日山古墳、美津島町出居塚古墳などの出土遺物を実見させて頂き、佐賀県伊万里市腰岳産の黒耀石製の石鏃や島主宗氏の伝世品などを拝見させて頂いた。特に、賀谷洞窟から出土している土師器に山陰系の甕らしき資料を実見したが、仮にその認定が正しければ、北部九州のみならず、日本海沿岸地域との地域間交流を示唆する考古資料として重要である。

その後、島南端に位置する豆酛^{マツ}を訪れた。まず、神事を含めて昭和54年12月6日に町民俗文化財に指定された赤米神田に立ち寄り、続いて国指定無形文化財に指定されており、旧暦1月3日に亀卜によってサンゾーロー祭^{マツ}が執り行われる雷神社と「鶴王御前」の悲話を伝える美女塚を訪れた。特に、赤米神田で執り行われる神事については、永留久恵が「豆酛では(十月)十七日に赤米の新穀をもって天道霊を生成(鎮呪)し、翌十八日に天道の祭りが行なわれる。これを「初穂米」と称して神人共食を振舞うが、この本意が新嘗の儀礼であることは論ずるまでもない。」と簡潔に記述しておられる。^(注11) 赤米神田を訪れたのは、真夏であり、赤い稲穂を見ることはできなかったが、厳格に執行された古代の儀礼に想いを馳せた。

雷神社から美女塚を経由し豆酛岬^{マツ}に至り、椎根に残存する対馬固有の構造物である石屋根と佐須川の上流500mに位置する矢立山古墳を実見した。矢立山古墳は、古墳終末期に築造された石室墳であり、T字形の平面プランが確認されている。平面プランだけの比較では、正確に築造の歴史的背景を理解できないが、朝鮮半島や日本海などの他地域との関係を考慮する必要がある。

4. 対馬を訪れて

今回の対馬探訪は、共同研究の一環として実施したが、研究テーマのみに終始せず、積極的に動き廻った。短期間でそれが実現できたのは、文中で芳名を記した方々のご援助のお陰である。改めて感謝の意を表したい。また、同行した中川和哉調査員には、基礎学習から対馬踏査が終わるまで終始、ご指導を頂いたし、長岡京跡の名神P.A.現場を共に担当されている調査員諸氏には多大なご迷惑をおかけした。現在、今回の資料調査を概観している最中であるが、極めて有意義であったことを附記しておきたい(97/10/19)。

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第4係調査員)

- 注1 水野清一・樋口隆康・岡崎 敬『対馬』東方考古学叢刊乙種六 東亜考古学会 1953
- 注2 国分直一主幹『えとのす』第30号 新日本教育図書株式会社 1986
- 注3 森 正「国道176号関係遺跡発掘調査概要 (1)蔵ヶ崎遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第54冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注4 三国志魏書東夷伝倭人条 対馬全文「其大官曰卑狗、副曰卑奴母離、所居絶島、方可四百餘里、土地山嶮多深林、道路如禽鹿徑、有千餘戸、無良田、食海物自活、乗船南北市糶」
- 注5 藤田和裕編「コフノ採遺跡」(『上対馬町文化財調査報告書』1 上対馬町教育委員会) 1984
- 注6 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋校注『日本書紀』下 日本古典文学大系68 岩波書店 1965
- 注7 正林 護『対馬』ながさき古代紀行Vol. 1 (株)タウンニュース社 1995
- 注8 土生田純之「朝鮮半島の前方後円墳」(『専修大学人文科学年報』第26号 専修大学) 1996
- 注9 高野晋司・本田秀樹「かがり松鼻遺跡」(『美津島町文化財調査報告書』第5集 美津島町教育委員会) 1988
- 注10 正林・前掲注7文献 178~185頁。
- 注11 永留久恵「年中行事の供物と山島(対馬)の基層文化」 国分・前掲注2文献所収 54~62頁。

平成9年度発掘調査略報

5. ^{てんのうざん}天王山古墳群B支群1・2号墳

所在地 熊野郡久美浜町字鹿野886番地ほか
 調査期間 平成9年4月14日～7月11日
 調査面積 約1,000m²

はじめに この調査は、丹後国営農地(西部地区)開発事業の鹿野団地造成に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。天王山古墳群は、佐濃谷川下流域左岸の丘陵に広がる遺跡で、丘陵東側は字平田、西側は字鹿野という。このあたりには、果樹園が広がり、梨・桃などの産地として有名なところで、今回の造成もこのような果樹園を造るために計画された。

古墳群は、丘陵尾根筋上に構築され、尾根筋によってA・B支群に分けられている。A支群には28基、B支群に10基の、合計38基からなる。この古墳群が位置する丘陵地には、鬼の釜1・2号墳、別荘1・2号墳、ドウブン古墳群が隣接して存在することから、これら一連の古墳群は、本来は一つの古墳群であったと思われる。

天王山古墳群は、平成8年度にA支群の3・4・22号墳を久美浜町教育委員会、5号墳を京都府教育委員会、13・17～21号墳を当調査研究センターが分担して調査を実施した。埋葬施設としては、木棺直葬や箱式石棺を主体部とすることが認められたほか、後世の経塚2基も検出されて

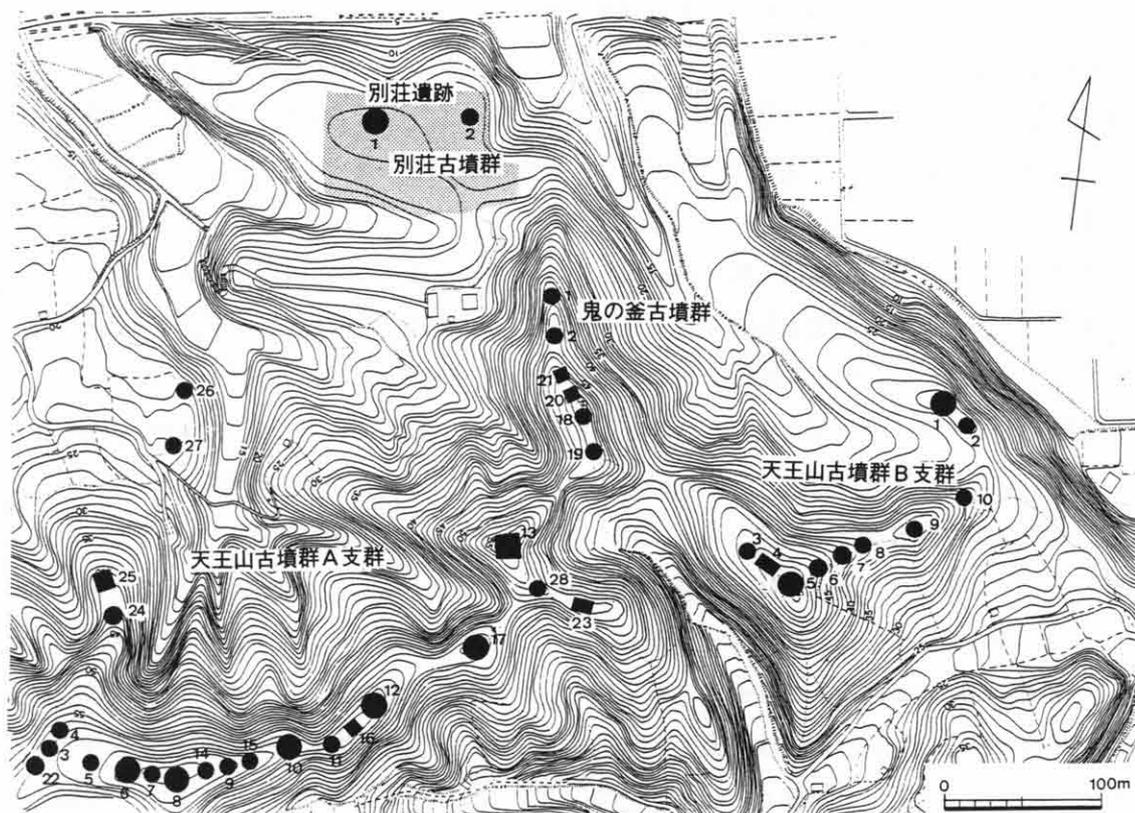
いる。箱式石棺は古墳時代中期を中心とし、木棺直葬は古墳時代後期(6世紀前半・中頃)、経塚は平安時代末～鎌倉時代初頭(12世紀後半)のものであることが判明している。

天王山古墳群B支群1・2号墳は、古墳群の北東端の標高30m前後とあまり高くなくところに立地している。また、古墳の位置する丘陵に沿って東方には佐濃谷川が大きく蛇行して北流し、B支群1・2号墳の北方前面には国指定史跡函石浜遺跡を経て日本海を望むことができる。

調査概要 調査の結果、1号墳からは主体部2基、2号墳からは主体部1基を確認した。



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 鹿野団地造成予定地内遺跡分布図

① 1号墳

墳丘 径約18m・高さ約1.8mを測る円墳である。大半が盛り土で築かれた古墳で、主体部検出面の約1m下から旧表土を確認した。主体部は、墳頂部の中央で2基確認した。2号墳との境には、幅約3m・長さ約8mを測る区画溝が設けられていた。

第1主体部 墳頂部はほぼ中央に位置する主体部で、木棺直葬である。墓壙は二段墓壙で、その規模は幅約1.9m・長さ約5.4m、木棺の規模は幅約0.7m・長さ約3.5mを測る箱形木棺と考えられる。棺上からは須恵器の杯身8・杯蓋8・高杯1・甕4・甕1、土師器長頸壺1などの遺物が破砕された状態で出土した。木棺の検出面からは、長側板外側で馬具・鉄鎌などの鉄製品が出土した。また、裏込め内からも甕1が出土している。

棺内からは、勾玉1・ガラス玉14・管玉8・須恵器(杯蓋5・杯身2)・馬具(轡1・辻金具・革金具)・鉄鎌・刀1・刀子が出土した。杯身・杯蓋は、転用枕として使用され、周辺に朱が認められた。勾玉は、この転用枕付近から出土した。刀は腰付近で、また玉類は棺内にまきちらした状態で出土している。これらのことから、頭位は、西向きであったと思われる。出土した土器の形態には、6世紀前半の特徴をもつものと中頃のものとの共存しており、6世紀中頃に築造されたと考えられる。

第2主体部 第1主体部西側から並行して検出した主体部で、木棺直葬である。墓壙は二段墓壙で、その規模は幅約1.3m・長さ約6.0mを測る。墓壙検出面の小口部から杯蓋1点出土した。棺内からは刀子1が出土した。土器の形態から、6世紀中頃に埋葬されたと考えられる。第1主

体部より後に、ほとんど時間差をおかずに埋葬されたと思われる。

② 2号墳

墳丘 径約10m・高さ約1mを測る円墳で、大半を盛り土で築いた古墳であった。南側から西側にかけての墳丘斜面と、墳頂部が一部流失していたため、墳頂部の中央で残りの悪い主体部1基を検出した。

主体部 木棺直葬で、墓壙は二段墓壙であった。その規模は、幅約1.7m・長さ約3.5mを測る。墓壙検出面の小口部から須恵器短頸壺1・土師器杯3が、棺底から刀子1・鉄鏃1が出土した。土器は、その形態から6世紀中頃のものであることから、その頃に築造されたと思われる。

③**経塚** 1号墳第1主体部東側から、経塚1基を検出し、板石で囲った室内に経筒が埋納されていた。レントゲン写真の結果、筒内に経典が残っていることがわかり、現在その保存処理中であるため、経典の内容などは不明である。経筒の形から、ほぼ12世紀後半のものと考えている。

まとめ 平成8年度の調査では、丘陵高位の古墳の調査を実施し、木棺直葬や箱式石棺を埋葬施設とする古墳が検出された。今回、調査を行った1・2号墳と合わせて丘陵の利用状況を考えると、丘陵最高所の条件のよい場所から順に利用され(古墳時代中期)、その後、最高所の空白部分に後期(6世紀前半段階)の古墳が築造され、順次丘陵の先端(下方)に向かって築造されていったと考えられる。天王山古墳群は、30基以上の古墳から構成されるものの、6世紀後半段階の古墳や横穴式石室を主体部とする古墳が存在しないことから、6世紀中頃には古墳の築造が終焉を迎えたと考えられる。

1号墳第1主体部のように、多くの須恵器や馬具を保有する同時期の古墳としては、竹野郡弥栄町の太田2・4号墳、中郡峰山町の桃山1号墳などがあげられる。太田2号墳は埴輪列をもつ大型円墳で、桃山1号墳は豊富な武器・馬具を副葬する。太田4号墳は馬具を副葬しないが須恵器武器類が多く副葬されており、同時期の古墳に比べて墳丘・副葬品に格差が認められる。現在、1号墳出土の馬具や鉄鏃などの鉄器類については図化作業を行うための錆落とし中である。しかし、天王山古墳群の中でも、鉄器や土器類などの副葬品は、1号墳が最も多いことから、相当の有力者が葬られた古墳であったと推察する。

今回、調査を実施した古墳2基は、盛り土による古墳で、旧表土からは弥生時代後期の土器片が出土しており、古墳が築かれる以前にもこの付近で人々の営みがあったと思われたが、調査の結果、弥生時代後期の遺構は認められなかった。

経塚については、昨年度に調査したものとタイプが異なり、経筒を納める部分に凝灰岩の板石を利用している。函石浜遺跡の海岸ないし鹿野団地造成予定地内の丘陵低位部分でも凝灰岩が産出することから、これらを利用したのではないかと考えられる。

(岡崎研一)

6. 谷垣^{たにがき}1・2・3号墳

所在地 熊野郡久美浜町字永留小字谷垣10ほか
 調査期間 平成9年7月4日～9月12日
 調査面積 約500m²

はじめに この調査は、丹後国営農地(西部地区)開発事業の永留団地造成に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。この古墳群は、久美浜町東部を北流する佐濃谷川中流域左岸に所在し、東西方向にのびる丘陵尾根筋上に円墳13基・方墳4基が存在する。造成範囲にかかる古墳は、丘陵先端に位置する1号墳と2号墳の大半で、3号墳については周溝の一部のみであった。

調査概要 調査の結果、古墳1基(1号墳)と周溝の一部(3号墳)を確認した。2号墳は、1・3号墳を築いた際の残丘であることがわかった。

① 1号墳

墳丘 径約14m・高さ約1.8mを測る円墳で、木棺直葬墳である。墳丘南西部分が一部流失していた。墳頂部で主体部1基を検出した。

主体部 ほぼ南北方向の二段墓壇で、長さ約3.2m・幅約1.1m・深さ約0.34mを測る。墓壇北側床面からは、勾玉・ガラス玉・紡錘車が出土している。墓壇周辺部でも須恵器杯身・壺・土師器杯などが出土しており、その土器の形態から6世紀中頃と思われる。

その他の遺構 墳頂部から主体部と重複する形で、経塚1基を検出した。径約0.6m・深さ約0.25mの掘形の中に、外容器が埋まっていた。外容器の上部には、蓋が割れた状態でのっており、蓋の上には偏平な石が2石あった。

② 3号墳 古墳の大半が調査地外となるため、今回検出した遺構は周溝の一部であった。周溝内からは土師器片が出土している。周溝の一部からではあるが、3号墳は径16m前後の古墳と思われる。

まとめ 佐濃谷川中流域の6世紀中頃の一資料を提示できた。17基(その内1基は、今回の調査で古墳ではなかったことが判明した。)からなる谷垣古墳群の北側丘陵裾部には、平坦な微高地が広がることから、この付近に当時の集落跡が存在すると推測される。

(岡崎研一)



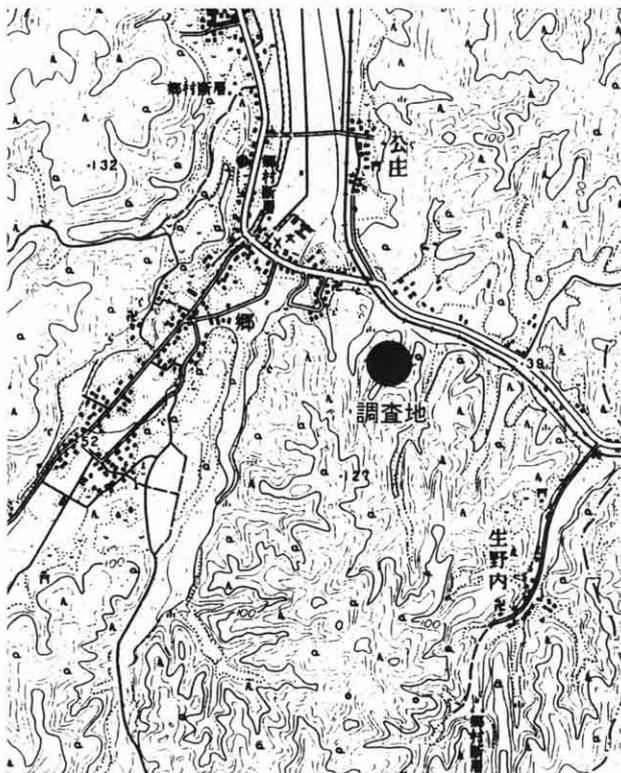
調査地位置図(1/50,000)

7. スガ町^{まち}古墳群

所在地 竹野郡網野町大字生野内小字岸ヶ谷1ほか
 調査期間 平成9年5月12日～10月3日
 調査面積 約2,600m²

はじめに 今回の発掘調査は、丹後東部地区国営農地開発事業郷4団地造成に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。調査対象地は、竹野郡網野町生野内地内の網野町と峰山町を結ぶ地方道網野峰山線より南側の丘陵上に位置している。調査地周辺は昭和2(1927)年にマグニチュード7.4の大地震が起こった活断層が走っており、天然記念物に指定されている郷村断層が存在している(第1図)。

調査概要 今回の発掘調査は、スガ町古墳群のうちB支群とC支群について実施した。調査対象地には、当初10基の古墳状隆起があると指摘されており、B支群で5地区、C支群で1地区に調査区を設定し発掘調査を行った。その結果、4基の古墳を確認し、B支群では1・3・4号墳、C支群では4号墳と名付け、調査を行った。B支群1号墳は、小規模な円墳で、2基の埋葬施設を検出した。B支群3号墳では、3基の埋葬施設と土坑や炭窯を検出した。さらに、墳頂部で北丹後大震災の際に生じたと思われる地割れの地震痕跡を4条検出した。また、第2主体部とした



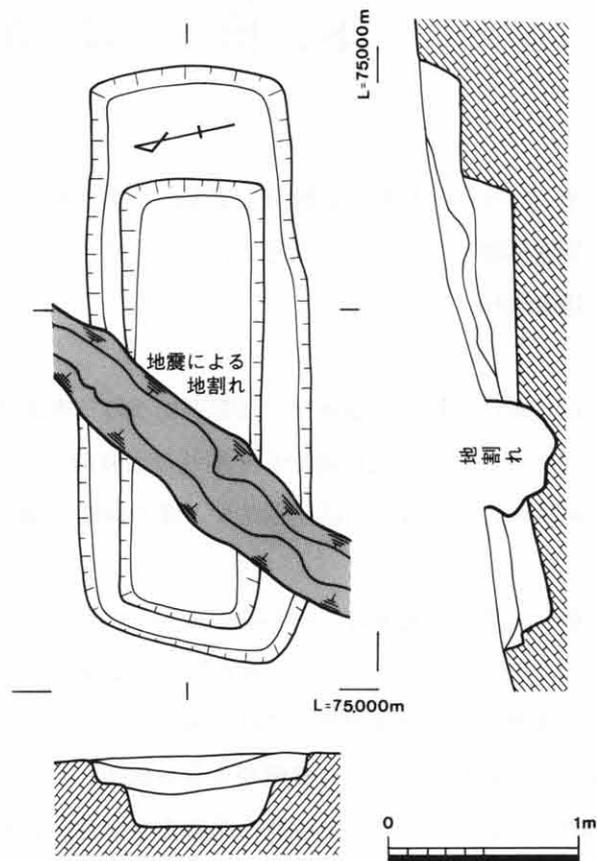
第1図 調査地位置図(1/25,000)

埋葬施設が地震の地割れによって破壊された状態で検出された。第2主体部は、二段に掘られた墓壙で、西側半分が地震の地割れによって地崩れを起こし、墓壙が傾斜している(第2図)。B支群4号墳では、3基の埋葬施設と土坑、そして地割れ・地崩れの地震痕跡を検出した。3基の埋葬施設は、B支群3号墳と同様に地震によって破壊されていた。C支群4号墳では、東西方向に長い方墳で、墳頂部で3基の埋葬施設と炭窯を検出した。

まとめ 今回の発掘調査では、6地区を設定しB支群で3基、C支群で1基の古墳を調査した。今回の発掘調査での成果として、B支群では自然地形を利用した不定形な墳形に小規模な埋葬施設とい

う特徴をもち、C支群4号墳は自然地形を削り出して方墳を造り、大規模な埋葬施設をもっており、尾根ごとに分けた支群で古墳の墳形や埋葬施設の様相が異なることが判明した。また、今回調査したすべての古墳は、一つの古墳に複数の埋葬施設が設けられていた。しかし、どの埋葬施設からも遺物が出土せず、支群の時期やそれぞれの古墳の時期を決めることが困難であり、今後周辺の遺跡や丹後地域の古墳の特徴などと照らし合わせて検討していかなければならない。

もう一つの成果として、北丹後大震災の活断層の隣接地で発掘調査を行い、古墳の墳頂部(丘陵頂部)で地割れなどの地震痕跡を検出できたことである。このように、地震の影響による地割れや、地すべりなどによって埋葬施設などの遺構が破壊された状況で検出されたものとしては、丹後地域では、大宮町の通り古墳群で確認されている。通り古墳群で検出されたのは、3号墳の第1・2主体部で、いずれも地すべりによって分断されている。また、1号墳と3号墳の墳丘でも地震痕跡が確認されている。今回のスガ町古墳群の調査でも同様の状況であり、丹後地域では二例目の発掘調査による確認となった。今回の調査地は、活断層に近いこともあって、直接的な揺れによって生じた地割れと思われる。今後、今回のこの地域での遺跡と地震痕跡の存在について、検討が必要と思われる。



第2図 B支群3号墳第2主体部実測図

(村田和弘)

8. 松ヶ崎遺跡第5次

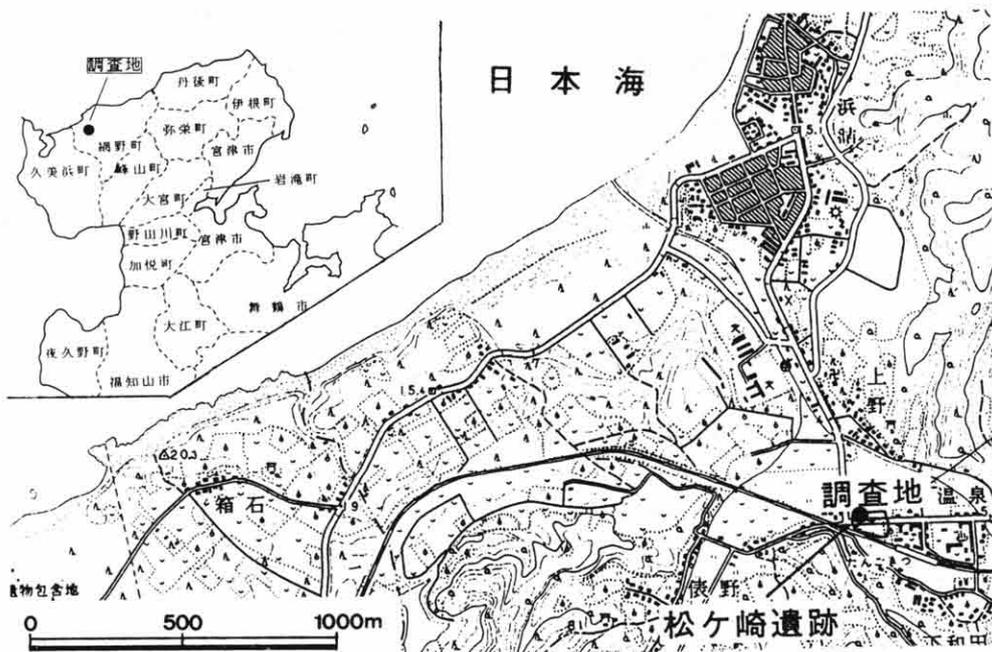
所在地 竹野郡網野町大字木津小字松ヶ崎
 調査期間 平成9年7月7日～9月10日
 調査面積 約460m²

はじめに 松ヶ崎遺跡は、京都府北部の日本海側に位置し、丹後半島の西側の付け根の網野町にあたり、弥生時代前期から中期及び奈良時代の集落と推定されている。周辺には、北約1.1kmに縄文時代中・後期の浜詰遺跡が、また西約3kmには久美浜町に所在する史跡函石浜遺跡が知られている。

松ヶ崎遺跡の範囲は、昭和35から39年にかけて行われた3次にわたる試掘調査によって明らかになっている。さらに、昨年度の第4次調査では、奈良時代後期の遺物を含む地層や弥生時代前期の遺物を含む地層が確認され、弥生時代前期の水路遺構などが見つかっている。これによって、集落の立地や遺物の分布範囲がより具体的にわかってきた。今回の調査では、近世の水路跡、古墳時代前期の井戸、弥生時代の遺物を含む地層を検出し、さらに下層で縄文時代前期初頭の石囲い炉と同時代の遺物が出土する地層を発見した。

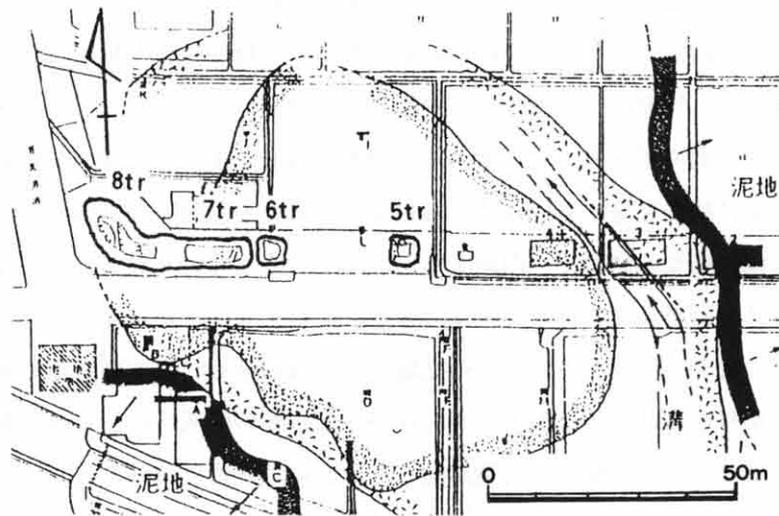
調査概要 調査地の地区名は、昨年度の調査トレンチに合わせて続き番号とし、東から第5～8トレンチとした。

第5トレンチ 古墳時代前期の土器溜まりや、井戸を検出した。調査地の北側で検出した井戸



第1図 調査地位置図(1/25,000)

は、直径約1.5m・深さ約0.45mの掘形の中に桶を転用し、井戸枠に使用していた。調査地の西側で検出した古墳時代前期の土器溜まりは、厚さ10cm未満で、層内からは弥生時代前期～中期の土器片とともに、古墳時代の土師器や濃紺色のガラス小玉が1点出土した。



第2図 調査トレンチ位置図

第6トレンチ 地層と遺構の有無を確認した後、土

置き場としたトレンチである。雨によって壁面が崩落して、トレンチの西側断面に弥生時代・古墳時代の遺物が包含する黒色粘質土砂混層を一部で確認したが、遺構面は確認できなかった。

第7トレンチ 海拔約1.4mで縄文時代前期初頭の遺物が出土する黒色砂層を検出した。トレンチ西よりの南側で、縄文時代前期初頭の遺物が出土する落ち込みを検出した。

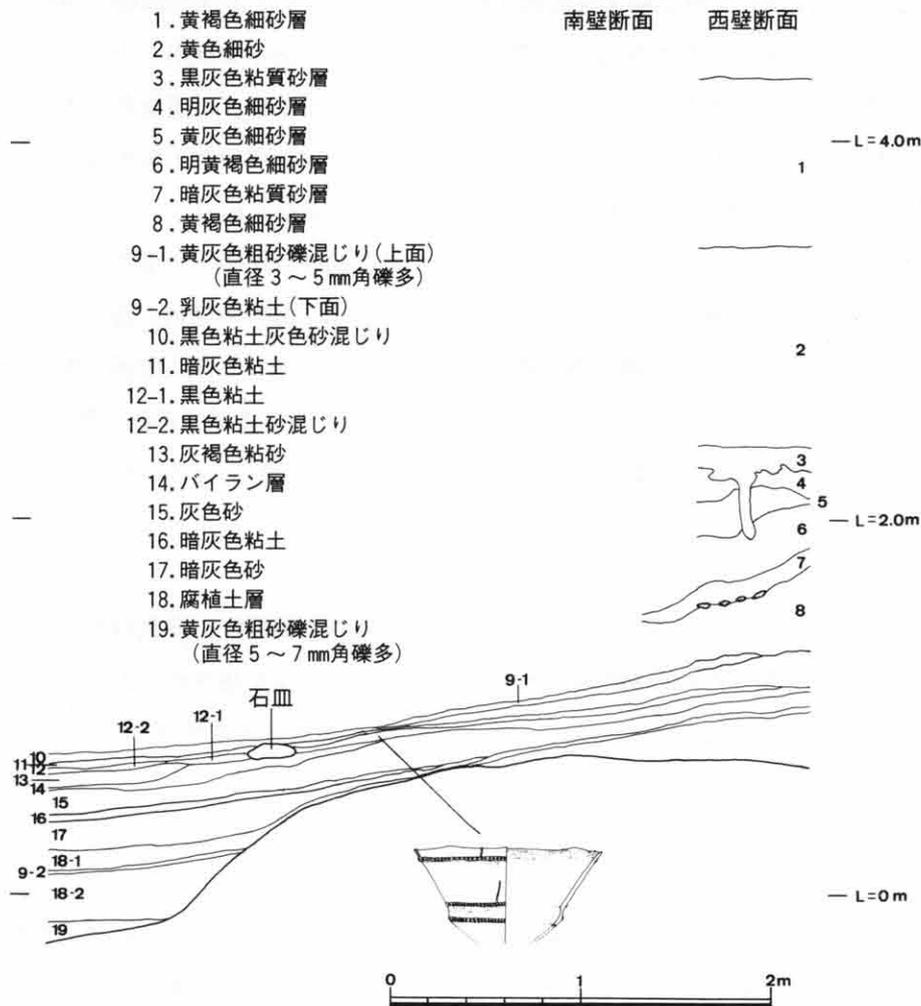
第8トレンチ 層位は、現在の道路面(海拔4.4m)から1.6m下までは黄褐色系の細砂層で、その層の下に堆積する黒灰色粘質砂層を掘り込み、松の丸太と杭を用いた近世の護岸工事の跡を検出した。黒灰色粘質砂層の上面で土師器片が出土している。海拔1.8～1.5mでは、黄褐色から青灰色の細砂層が堆積しており、両層の間には暗灰色粘質の細砂層が斜めに堆積している。この層からは拳大の円礫と弥生土器片が出土している。海拔1.5～0.8mの黒色粘土層からは縄文土器が出土している。この黒色粘土層は調査地の西に向かって高くなっており、南西にある山の方向に地形が上がると考えられる。黒色粘土層以下では、トレンチの中央部で東西に断ち割りを行い、地層の確認及び遺物の出土状況を確認する調査を海拔-0.8mまで行い、第19層で無遺物層になることを確認した。

出土遺物

古墳時代 前期の井戸に使用された桶は、大木を削り抜いた製品で、底板は桶の下からはめ込む構造で、板を留める楔のための柄が掘られている。内側には漆が施されており、仕上げが大変でない造りになっている。この桶は、井戸に転用される前のある段階でひび割れたようで、1か所に補修のための穴が1対開けられていた。

縄文時代 第12層の黒色粘土層以下第18層の腐植土層までの間で、前期初頭と考えられる遺物が出土した。第10層の黒色粘土灰色砂混層と第11層の暗灰色粘土層からは、中期と考えられる土器片が少量出土している。第12層では、石皿や石錘などの石製品とともに、轟式の影響を受けた鉢が出土している(第4図1)。器形はキャリパー形の丸底もしくは尖り底で、山形口縁の裾部から外面にかけては粘土紐貼り付けによる隆帯を垂下させ、口縁下で外周する隆帯に接続する。隆

帯の上には、刻み目を施している。胴部の屈曲部には同様の隆帯を施すが、縦の隆帯は上方のびる。胴部から底部にかけての屈曲部でも同様の隆帯を施している。内面には強い条痕文を残しており、外面はナデ消されている。このほかに、キャリパー形の深鉢と考えられる器形で、口縁端部に刻み目を施し、内面ナデ、外面縄文の器種などがある(第4図2)。全体的に各器種とも、内面に縄文を施すものは認められない。第13・14層からの出土土器はない。第15層の灰色砂層からは、山型の口縁で、内面工具によるナデもしくは条痕、外面には右下がりの縄文地にヘラ状の工具で斜格子文とその下部に口縁部に平行する沈線を施す小片や(第4図3)、胴部片で内面横方向の条痕、外面右下がりの縄文地や、内面縦条痕、外面横条痕を施すものなどが出土した。次の第16層からは土器は出土していない。第17層の暗灰色砂からは、最下面の第18層直上から、糞石、瓢箪の外皮、堅菓類、石製品とともに、ほぼ完形の砲弾形の深鉢が出土した。内面ナデ、外面右下がりの縄文地の粗製品である。精製土器ではキャリパー形の深鉢と考えられる器形で、口縁は山形、端部に爪形の刺突を施し、内面はナデ、外面には右下がりの縄文地に口縁部に沿って五段の細い爪形刺突、その下に太めの爪形で連続刺突による2条の押し引き沈線、胴部の屈曲部に太めの爪形で三段の爪形刺突を施しているものや(第4図4)、小形品の胴部に二連一対の刺突を押



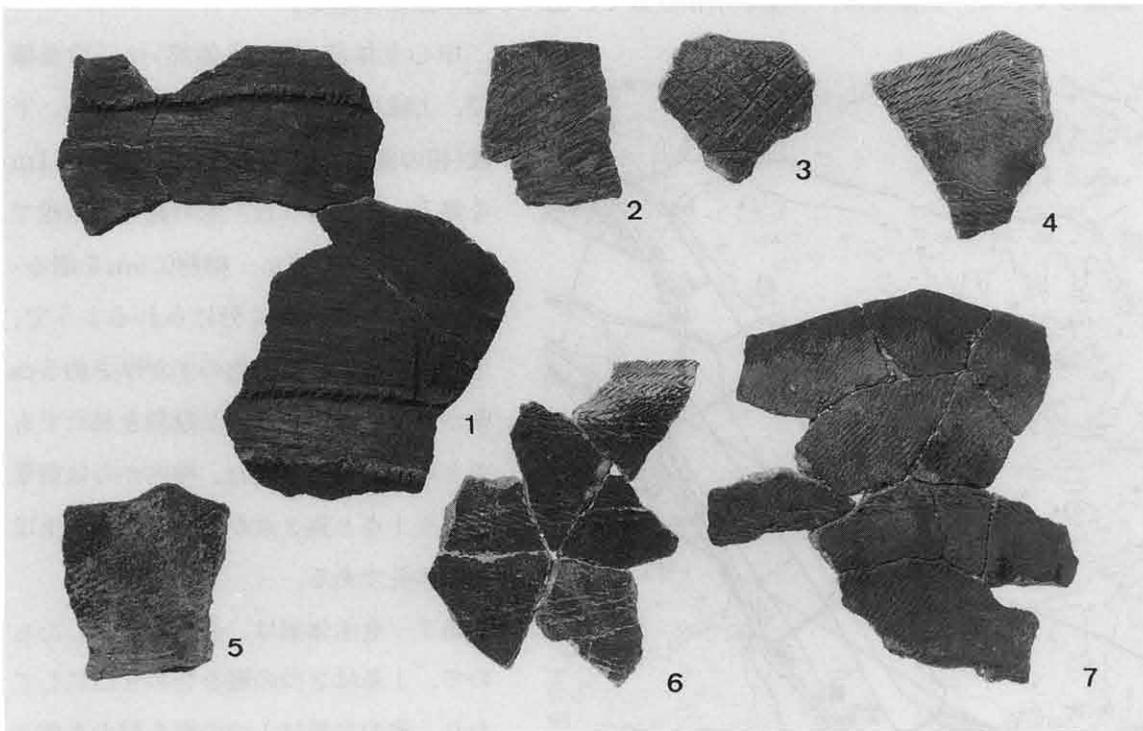
第3図 第8トレンチ断面図

し引き状に縦・横に施すものなどが出土している。第18層の腐植土層中からは、多量の堅菓類、獣・魚骨とともに、口縁部に山形口縁状の小突起を持ち、内面ナデ、外面条痕の土器が出土している(第4図5)。最下面の第19層直上からは、キャリパー形の深鉢と考えられる器形で、口縁は山形、端部に爪形の刺突を施し、内面はナデ、外面には右下がりの縄文地に口縁部に沿って5段の細い爪形刺突、その下に太めの爪形で連続刺突による2条の平行線、胴部の屈曲部に太めの爪形で3段の爪形刺突を上下に2帯施すもの(第4図6)や、同じくキャリパー形の深鉢で口縁は山形、端部に爪形の刺突、内面はナデもしくは条痕、外面は左下がりの縄文地に胴部の屈曲部に二連の爪形刺突を施すもの(第4図7)が出土している。調整では、内外面条痕地の外面に三連の貝殻刺突を連続して施すもの(第4図7)や、内面横条痕、外面縦条痕の小片、内面ナデ、外面横縄文などがある。出土土器の内、爪形状の刺突を施すものは皆同一方向の施文になっている。

まとめ 今回行った発掘調査の成果としては、昨年度までの調査では確認されていなかった古墳時代前期の遺構と、縄文時代前期の遺構とをあらたに検出したことがあげられる。

今回、検出できなかった弥生時代の遺構については、古墳時代前期の井戸の検出状況から、この時代の遺構も含めて後世に削平されたと判断した。

新たに発見した縄文時代前期初頭の土器群及びその他の遺物は、京都府北部の編年資料の空白部分の一部を埋めるものとして、また当時の環境や生活を復原する上で重要である。出土した各層の土器には北白川下層Ⅰ式につながる器形が多く、文様の特徴では羽島下層式の特徴を持ったものが含まれる。多量の堅菓類や石皿・敲石からは縄文時代前期初頭の食用植物の状況が、獣・魚骨や石錘からは狩猟・漁労の実態が明らかにできると思われる。(戸原和人)



第4図 出土遺物

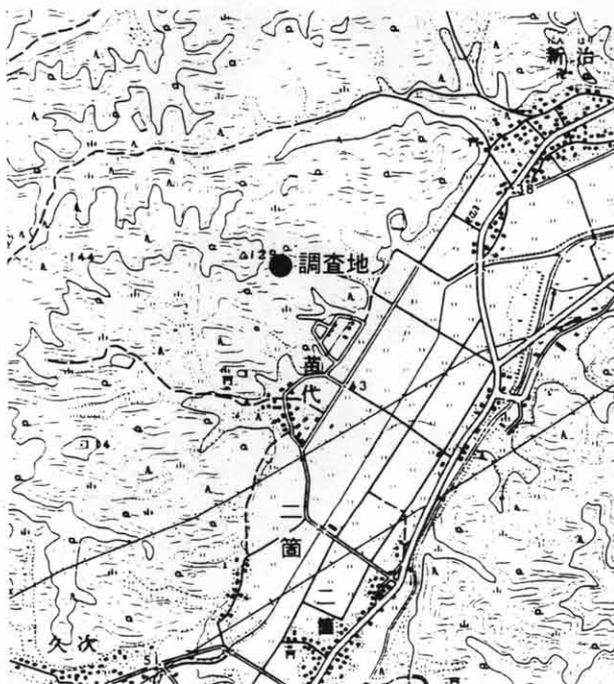
1・2. 第12層 3. 第15層 4. 第17層(第18層直上) 5. 第18層 6・7. 第18層(第19層直上)

9. 苗代古墳群

所在地 中郡峰山町字二箇小字相之目
 調査期間 平成9年5月8日～8月27日
 調査面積 約750m²

はじめに 今回の調査は、丹後国営農地開発事業(二箇団地)に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。調査地は、丘陵頂部から派生する尾根上にあり、標高80～90mを測る。調査地から見下ろせる谷を取り囲む丘陵には、中世の城跡が多く分布しており、当初、城跡の一部と推定されていた。周辺古墳時代の遺跡には、相之目古墳や笹ヶ谷古墳(平成8年度峰山町教育委員会調査)などがある。また、北東方向には弥生時代の環濠集落である途中ヶ丘遺跡を望むことができる。

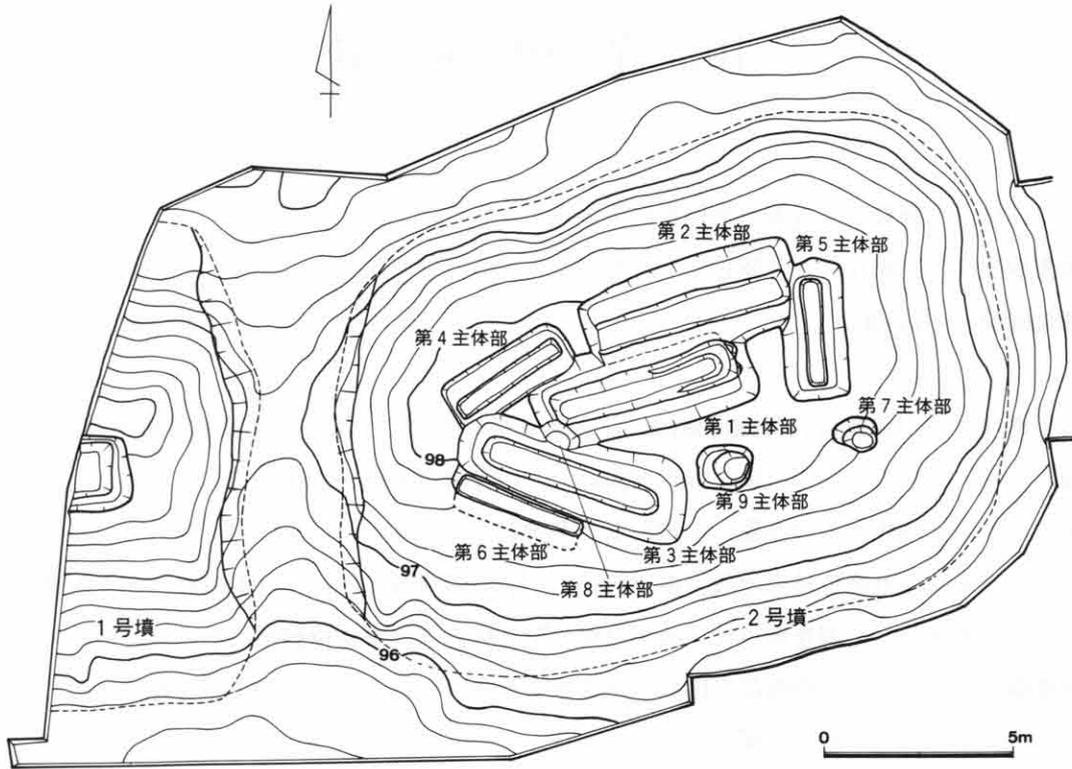
調査概要 開発予定地である2つの尾根にトレンチを設定した。調査の結果、6基の古墳群であることがわかった。1～5号墳は、西から東に降りる尾根筋に階段状に並び、6号墳は2号墳に取り付く尾根の基部に立地する。いずれも墳丘は地山を削って造り出している。1・2・6号墳は、区画溝を設けている。6基の古墳のうち、墳丘規模が最大である2号墳は多埋葬墳で、その他の古墳は単独埋葬墳である。2号墳は一辺19m×14mの方墳で、墳丘平坦面に9基の主体部が重複している。主体部は、6基が木棺直葬で、他の3基は壺棺である。



第1図 調査地位置図(1/25,000)

中心主体部(第1主体部)は二段墓壇で、上段は長さ約5.7m・幅約2.6m、下段(棺の掘形)は長さ約4.8m・幅約1.1mを測る。木棺は「H」形の組合式木棺で、内法で長さ約3.7m・幅約0.5mを測る。棺内は3つの区画に分けられるようで、中心区画の底には赤色の土が厚さ約5cm敷かれていた。朱と同じ役割を果たすものと考えられる。また、棺内からは翡翠の勾玉1点と鉈2点が出土した。勾玉は両面穿孔である。

第7～9主体部は、壺棺を埋葬したもので、1基は2つの壺を合わせ口にしており、他の2基は1つの壺を棺の本体とし、他の壺の破片を蓋として使用してい



第2図 2号墳遺構配置図

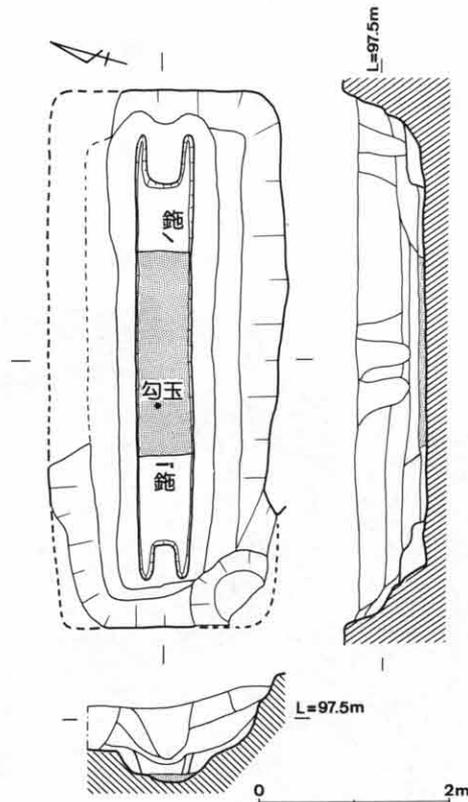
る。大きさから小児用と考えられる。使用されている壺はいずれも二重口縁壺である。

他の古墳の埋葬施設は木棺直葬で、墓壙は地山を二段に掘り下げた二段墓壙が主体である。

出土遺物には副葬品として勾玉2点(2号墳第1・5主体部)、ガラス製管玉(2号墳第5主体部)、鉈4点(2号墳第1・4・5主体部)がある。その他4号墳及び5号墳の墳丘裾でそれぞれ土師器高杯、須恵器甕が出土した。

まとめ 調査の結果、苗代古墳群は古墳時代前期から中期にかけての古墳群であることが判明した。出土遺物から1～5号墳へと順次築造されていったと考えられる。2号墳のような多埋葬墳は、弥生時代の家族墓の伝統を強く残している墓制であり、類似の例に丹後町大山墳墓群・大宮町帯城墳墓群・峰山町金谷古墳群・久美浜町権現山遺跡・加悦町内和田古墳群などがある。苗代古墳群は、これらの中で

最も新しい時期に位置づけられ、弥生時代的な墓制から古墳時代的な墓制へ変化していく様相がうかがえるといえる。丹後地域の墓制を考える上で重要な成果が得られた。(松尾史子)



第3図 2号墳第1主体部実測図

10. 竹中遺跡

所在地 舞鶴市字堂奥小字稲谷口・鍋森
 調査期間 平成9年8月18日～9月25日
 調査面積 約500m²

はじめに 竹中遺跡は、舞鶴湾東港に注ぎ込む祖母谷川の上流、堂奥集落の南東約800mの谷間段丘上に位置する。周辺には、矢野山城跡など中世の山城跡が点在しており、また山を隔てて北東には、平安時代からの寺院、金剛院などが所在している。

今回の調査は、近畿自動車道敦賀線(舞鶴東～大飯)の建設に伴い、日本道路公団大阪建設局の依頼により実施した。調査地点は、高架道路の第3橋脚部と第4橋脚部にあたるところである。

調査概要 西側の第3橋脚部に関わる調査地を第1トレンチ、東側の第4橋脚部に関わる部分を第2トレンチとして調査を開始した。

第1トレンチ 黒褐色の表土(第1層)を除去すると、大半が黄褐色の土層(第3層)となる。この土層以下は無遺物層であったが、トレンチ東側中央部で、表土直下に灰褐色の土層(第2層)を検出し、この第2層からは、鎌倉時代の土師器の小片が出土した。

第2トレンチ 第1トレンチと同様に、表土直下に黄褐色の土層(第3層)が広がる。しかし、このトレンチでは、第3層に掘り込まれたピットを検出し、このうちのいくつかからは、瓦器の小片や土師器片が出土した。また、トレンチの西端部で、土師器、瓦器のほか青磁片などを包含する暗茶褐色の土層(第2層)をわずかに検出した。さらに、トレンチの南側中央部では、拳

大から人頭大の石が集積された部分(SX04)を検出した。この集石部は、一辺が約1.5mのほぼ正方形を呈すると推定される。石の間からは、瓦器、須恵器、陶器などのほか、銅製鍋の口縁部と考えられる小片が出土した。

まとめ 今回の調査地は、これまでに大部分が開墾、削平されてきたようであるが、今回の調査でわずかながらも中世の遺構・遺物を検出したことから、竹中遺跡の概要を知りうる一端が得られたと考える。今後の調査成果の蓄積に期待したい。(竹下士郎)



調査地位置図(1/50,000)

11. ^{あまる} ^べ 余部遺跡第3次

所在地 亀岡市余部町和久成
 調査期間 平成9年7月1日～8月12日
 調査面積 約400m²

はじめに 今回の調査は、京都府農業総合研究所の倉庫棟建設に伴うもので、京都府農林水産部の依頼を受けて実施した。

余部遺跡は、大堰川西岸の河岸段丘上に東西約900m・南北約1kmにわたって広がる遺跡である。弥生時代から中世にかけての複合遺跡と考えられている。

調査内容 今回の調査では、弥生時代と中世の遺構を検出した。弥生時代の遺構は、調査地東半部で検出した。主要なものは、方形周溝墓S X 301である。調査地北東隅で検出した。周溝は、幅0.9～1m・深さ0.3～0.6mである。隅部は掘り残す。今回は方形周溝墓の南西隅部を検出したのみで、その他の部分は調査地外となるため、全体の規模などは不明である。周溝内から、弥生時代畿内第Ⅱ様式併行期の壺や土器片、石鏃などが出土した。このほか、ピットなどを検出したが、その性格は不明である。

中世の遺構は、断片的ではあるが、調査地ほぼ全面にわたって検出した。主に素掘り溝で、畑などの耕作に伴うものとみられる。

まとめ 今回の調査では、畿内第Ⅱ様式併行期の方形周溝墓を検出した。これは、弥生時代中期初頭頃にあたる。口丹波地域では、弥生時代の方形周溝墓は各遺跡で検出されているが、ほとんどが畿内第Ⅳ様式併行期、弥生時代中期後半頃以降のものである。今回検出した方形周溝墓は、現状では口丹波地域最古のものといえよう。

(引原茂治)



方形周溝墓 S X 301(東から)



調査地位置図(1/25,000)

12. 柏^{かいが}平^{ひら}遺跡

所在地 城陽市富野柏平ほか
 調査期間 平成9年8月25日～9月4日
 調査面積 約180m²

はじめに この調査は、木津川右岸運動公園(仮称)整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。柏平遺跡は、すでに遺物散布地として知られ、森山遺跡の東約500mに位置する標高70m前後の丘陵一帯を範囲とする。丘陵頂部には本来数ヘクタール規模の平坦面があったようであるが、現状は砂利採取により、北端部の城陽市浄水施設付近が残る程度である。昭和61年には、この遺跡地内の砂利採取地から古墳時代後期中葉の古墳が1基発見され、柏平古墳と命名された。その時、付近には群集墳の存在の可能性が言及されているが、不明のままである。今回の調査地は、柏平古墳の北約150mの丘陵頂端部に1か所(Bトレンチ)、同約230mの丘陵裾部に1か所(Aトレンチ)の計2か所にトレンチを設定した。

調査概要 Aトレンチは、丘陵北斜面の裾付近(標高60m前後)に設定した。面積は約140m²である。現況は竹林で、南から北にゆるやかな傾斜の平坦地である。掘削の結果、トレンチ東半と西半で埋没した南北方向の谷地形を確認した。遺物が出土していないため、埋没時期は不明である。

Bトレンチは、丘陵頂部平坦面の北端(標高72m前後)に設定した。面積は、約40m²である。現況は荒撫地で、以前は畑地であったようである。掘削の結果、表土の直下で赤橙色砂質土の地山面となり、地山面は南東から北西方向にゆるやかに傾斜している。遺構、遺物は出土していない。

まとめ 今回の2か所に設置した調査トレンチでは遺構・遺物を確認できなかった。この調査地点は、遺跡範囲の北側縁辺部であり、遺跡の内容に迫る成果は得られなかった。遺跡の中心部分にあたる丘陵頂部は残り少なくなっており、今後の調査の機会が待たれる。(有井広幸)



調査地位置図(1/25,000)

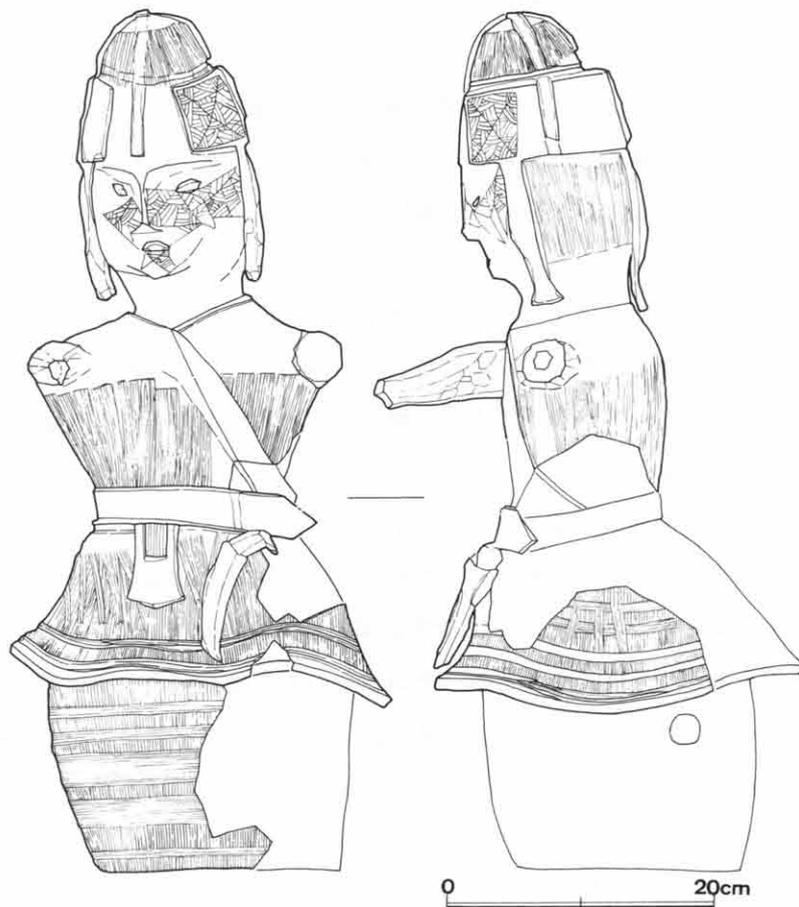
誌上遺物展示

3. 京都府京田辺市堀切7号墳の人物埴輪

概要 15世紀に隼人正の地位にあった中原康富の日記『康富記』には、隼人司領として、江州竜門(滋賀県大津市)、山城国大住郷(京都府田辺町)、山城国宇治田原郷(京都府宇治田原町)、西京隼人町(京都市右京一条二坊)、河内国萱振保(大阪府八尾市)、丹州氷所(京都府亀岡市)の6個所が挙げられている。また、10世紀の『延喜式』、藤原公任の儀式書『北山抄』には畿内各所に隼人が居住し、儀式に参列させることが記されている。また、『新撰姓氏録』には大和国に大隅隼人、山城国に阿多隼人がいる。このように、畿内に南九州に居住する隼人との関連を持つ人々が存在したことは確実である。中でも、正倉院文書の一つとして伝わっている「山背国綴喜郡大住郷計帳」すなわち「隼人計帳」には、86人の隼人の名を列記しており、番をつくって隼人司に奉仕していたようである。では、これらの隼人はいつから畿内地域に移配されたのであろうか。

この、大住郷に所在する大住隼人の居住については、古墳時代にさかのぼるといふ見解があり、ここで紹介する堀切7号墳の人物埴輪もその傍証として取り上げられてきた遺物の一つである。

この人物埴輪は、両手と胴部下半を欠失しているが、全長60cmを測る逸品である。頭部は冑と鍔を装着した表現を持ち、胴部は右前の衣服で腰には帯を巻いている。この帯の端部は剣先状に尖り、蛇尾のような帯金具を表現した可能性がある。帯からは左側に刀、



堀切7号墳出土人物埴輪実測図

右側に袋状のもの(盛矢具か?)を下げている。両手は失っているが、中央で組むか何かを捧げ持っているかと考えられる。顔の表現は杏仁形のつりあがった目と口を開け、みずらを結っている。この埴輪を特徴づけるのは、顔面に施された入墨状の表現である。それは左頬から右頬にかけてと顎部分に直弧文に類した文様をヘラ描きしたものである。

この埴輪が出土した堀切古墳群は、丘陵部に立地する6基からなる古墳群である。昭和53年に、田辺町教育委員会によって発掘調査が実施された。また、斜面には昭和44年に京都府教育委員会によって調査された横穴7基が築かれている。その内、6号横穴では石棺に改葬骨が納められていた。これは竜山石製の四注式の組合式家形石棺で、乙訓地域に分布する四注式陶棺との関連が想起される。これらの横穴は残存長2~2.5m・幅1.5~1.6m規模のもので、徳利形のもが多く、墓道が玄室に向かって傾斜する特徴がある。

意義 この人物埴輪が隼人の居住の傍証とされている根拠は、顔面に入墨である。一般に畿内の人物埴輪は入墨の表現が無い。東日本には入墨表現の埴輪が若干あるが、それらは赤彩によるもので、本例のように刻線で表現する例は少ない。また、この埴輪では文様が直弧文である点も異例である。また、冑状の頭部、帯金具の着装など、細部の表現に畿内に通有の人物埴輪とは相違する点が多い。だからと言って、この人物埴輪が隼人であるとは断定できないが、なぜ、今まで隼人との関連が議論されてきたのだろうか。それは、この堀切古墳群が所在する一帯が冒頭で述べた大住隼人の居住地に推定され、それを考古学的に例証する試みが古くからなされていたからに、他ならない。

従来の研究で、隼人を示す考古資料として挙げられていたものは、遺構では、地下式横穴墓、遺物では、鉄鏃の二段逆刺型式・圭頭広根斧箭型式、蛇行剣などが挙げられている。これらは分布が現在の鹿児島県・宮崎県に集中しており、あたかも隼人に特有の文化要素であるように見える。だが、これらの見かけの分布は、特に墓に副葬されたものであるだけに、一概に証拠と見るのは危険である。例えば、二段逆刺型式の鉄鏃や蛇行剣は畿内からもたらされたと考えた方がよく、圭頭広根斧箭型式の鉄鏃は隼人にのみ限定される遺物ではない。その中で、地下式横穴墓は九州以外にも分布が顕著であり、畿内における隼人の居住を推定する重要な証拠として、かなり以前から議論されてきたものなのである。

南山城は後期群集墳が全般的に未発達であるが、横穴が稠密に分布するのが八幡市南部から京田辺市北部にかけての地域、すなわちこの大住郷の地域なのである。南山城の横穴は、奥村清一郎氏によると、6世紀後半に造営が開始し、6世紀末から7世紀初頭にかけて爆発的に増加し、終焉するという消長をたどる。その初期のものは石室の平面形のように有袖形のものから無袖の逆台形に変遷する。また、森 浩一氏は、南大和の宇智郡阿陀郷、紀伊と並んで大住郷への隼人の居住が古墳時代に溯るとし、その根拠にこの地域の横穴が、羨道と玄室とが水平ではなく、斜めに掘り込まれていたことから地下式横穴墓との類似性を指摘されている^(注2)。だが、果たして南山城の横穴は地下式横穴と構造的に近いものだろうか。

地下式横穴の初現は、宮崎県えびの市小木原遺跡群で検出された横口式土壙墓である。これは

4世紀にさかのぼるが、地下式横穴墓の盛行時期は5世紀中葉である。形態は妻入りの屋根形玄室を持つものが主流であって、横口式家形石棺から発生したと考えられている。その特徴は単体埋葬を原則とし、甲冑武器などの副葬品が目立っている。その構造的特徴は玄室に向かって羨道が垂直に掘り込まれるものである。翻って、南山城の横穴墓を見ると、構造的に共通したものはなく、追葬を持つもので、地下式横穴墓とは異なる点が少なくない。玄室に向かって傾斜する羨道も、茨木市青松寮古墳などの横穴式石室でも指摘できる特徴であって、強いて地下式横穴墓と結びつける証拠とはいえないのである。したがって、大住郷と大住隼人を結び付ける考古資料はきわめて少ないのが現状である。

そもそも隼人とは、(1)諸儀式への参加(狗吠、風俗歌舞)、(2)行幸への随行(狗吠)、(3)竹製品の製作(竹籠・竹笠)を職務とする。8世紀、隼人は夷人雑類とみなされており、正月元旦の儀式あるいは外国使節を迎える儀式などに隼人を参列させ、貢物を持ってこさせることで、天皇・朝廷の権威を広く内外に知らしめるのに重要とされている。また、平時には竹製品製作に従事させ、非常時には軍事力として動員したのである。このように夷人としての隼人は朝廷の支配イデオロギーに不可欠のものとして組み込まれ、仮にそれが考古資料から判別できるとすれば魅力的なことである。だが、考古学的証拠を詳細に検討すると、限定的に隼人に帰属できるものは実際にはほとんど無く、この大住隼人のように文献や地名に引きずられた結果が大半である。これはわが国だけでなく、今世紀前半にドイツの考古学者、G. コッシナが住地考古学としてゲルマン民族の故地を求めるのに用いた研究法であり、方法論的にも問題点が少なくない。大住郷の領域で認められる考古資料を大住隼人と結び付けるのはもっと慎重に検討すべきではなかろうか。



堀切7号墳出土人物埴輪

(河野一隆)

注1 奥村清一郎「南山城の横穴」『京都考古』第27号 1982

注2 森 浩一「近畿地方の隼人」『日本古代文化の探求 隼人』 1975

府内遺跡紹介

80. 寺戸大塚古墳

寺戸大塚古墳は、向日市寺戸町芝山に位置する前方後円墳である。向日丘陵上にあつて、北北東から南南東方向に中心の主軸を持っている。前方部は、後世に一部が削平されて原形をとどめないが、後円部はほぼ完存している。

この古墳は、1923年の発掘調査にはじまり、1942年には前方部の調査が行われ、1966年には後円部の調査が行われた。特に、1966年の後円部の調査では、後円部の外面の状況がわかっただけでなく、主体部が見つかり、貴重な調査成果をあげている。それで、過去の調査成果をも含めて、現在までに以下のことが明らかになっている。

古墳の全長は98m、後円部の直径は54m、高さは9.8mを測る。また、前方部の幅は45mあつて、その高さは現状では3mであるが、後世に削平を受けていることからすれば、4m程度であつたろうと推定されている。墳丘は、後円部が三段築成で、前方部が二段築成となっている。後円部の段築は、斜面の長さが同じではなく、2：3：4の比率で造られており、三段目の段築が最も高く、8mになっている。三段目を高くするのは、前期古墳や中期古墳に比較的多く認められる。

各段築の斜面には葺石が葺かれ、テラス状の平坦面には円筒埴輪が並べられている。埴輪は、段築のテラス部分だけではなく、墳頂部にも並べられている。後円部の墳頂部中央には、方形の壇が河原石を用いて設けられ、その外側に沿って円筒埴輪と朝顔形埴輪が合わさって並べられている。その中でも、方形壇の北辺の外側には家形埴輪などの形象埴輪があつた。また、方形壇の上にも円筒埴輪の残欠が残っており、主体部の真上にも円筒埴輪が葺かれていたことがわかって



第1図 遺跡所在地 (1/25,000)

いる。

この方形壇の西側に接して、多くの土師器片が散乱している場所があり、土師器の供献区画と見られている。主として、布留式期の小型丸底壺や小型複合口縁壺などが出土しており、何らかの葬送儀礼が行われたところと推定されている。

内部主体は、前方部と後円部にあつて、ともに墳丘の主軸に平行する形で竪穴式石室が設けられていた。前方部の竪穴式石室は、墳丘の主軸と平行して、長さ約5.2m・幅0.9～1.0m・

高さ約1.3mを測る規模を持つ。天井石は、9枚で構成されている。石室の中からは、「宜子孫」銘獣帯鏡1、仿製三角縁三神三獣帯鏡1、仿製方格乳文鏡1、碧玉製管玉8のほか、紡錘車形石製品や琴柱形石製品も見つかっている。また、武器類や農工具類も出土しており、副葬品の内容は後述する後円部石室とよく似ている。

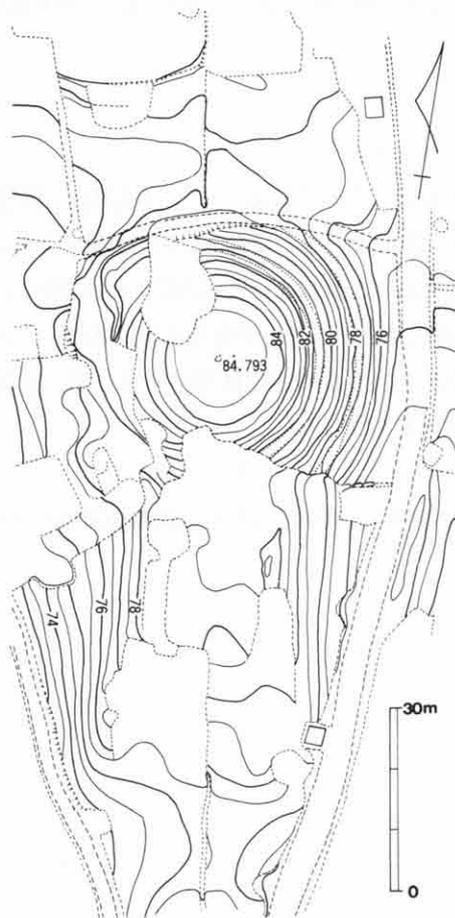
この古墳の中心主体が後円部の竪穴式石室であることは、出土した副葬品から、前方部出土のものよりも古い型式であったことから明らかとなった。後円部の竪穴式石室は、二段墓壙を掘った後、下段の墓壙の下に築かれていた。墓壙の底には、一枚の板石の上に木棺をのせる粘土の台、いわゆる粘土床が設けられていた。もちろん、木棺はすでに腐朽してしまっていて、原形をとどめてはいなかったが、粘土の台に木棺の圧痕が残っていたことから、その木棺は長さ6.25mもある割竹形木棺であったことがわかっている。石室の規模は、南北長約6.45m・幅0.76~0.85mで、高さは粘土の台から測ると約1.6mとなる。また、天井石は、大きな板石11枚からなり、大部分は砂岩とチャートであるが、一部だけに花こう岩が用いられていた。この点からすると、前方部の石室よりも若干規模は大きい。

後円部の石室から出土した副葬品は、基本的には前方部石室から出土したものと組み合わせは変わらない。銅鏡では、舶載三角縁四神四獣鏡片1、舶載三角縁仏獣鏡1がある。玉類では、硬玉製勾玉1、碧玉製管玉19、碧玉製石釧8などが見つかっている。

鉄器では、武器として用いる刀10前後、剣4、農工具として用いる鎌5~6、鉄斧4~5、刀子5がある。このなかで、舶載三角縁四神四獣鏡片は兵庫県求女塚古墳出土銅鏡と同範であり、舶載三角縁仏獣鏡は京都市西京区百々池古墳や園部町垣内古墳出土銅鏡と同範であることがわかっている。

その他、埴製合子と呼ばれる土製の容器が3点見つかっている。

このように、寺戸大塚古墳の埋葬については、前方部と後円部ともに施設や副葬品に大きな差がなく、時期的に前方部の方がやや新しいこと、といった程度が差としてあげられよう。この点からすれば、寺戸大塚古墳に葬られた被葬者は、後円部被葬者と前方部被葬者の地位が比較的近く、かつ近い関係の人物どうしという推定ができよう。これらの被葬者が首長であったかはわからないが、かなり近い関係にあったことだけは認めてよかろう。



第2図 寺戸大塚古墳墳丘測量図
(『向日市史』上巻から再トレース)

なお、第2図の再トレースは、当調査研究センターの小池 寛調査員による。

(土橋 誠)

<参考文献>

- 梅原末治「寺戸ノ大塚古墳」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第四冊 京都府) 1923
森本六爾「二・三の埴輪と一古墳に関する新資料に就て」(『考古學雜誌』15-2 考古學會) 1925.2
梅原末治「乙訓郡寺戸大塚古墳」(『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会) 1955
『京都大学文学部考古学資料目録』第2部 京都大学文学部 1968
京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」(『史林』54-6 史学研究会) 1971
『向日市史』上巻 向日市 1983
近澤豊明「乙訓地域における埴輪の変遷とその特色」(『長岡京古文化論叢』 同朋舎) 1986

長岡京跡調査だより・63

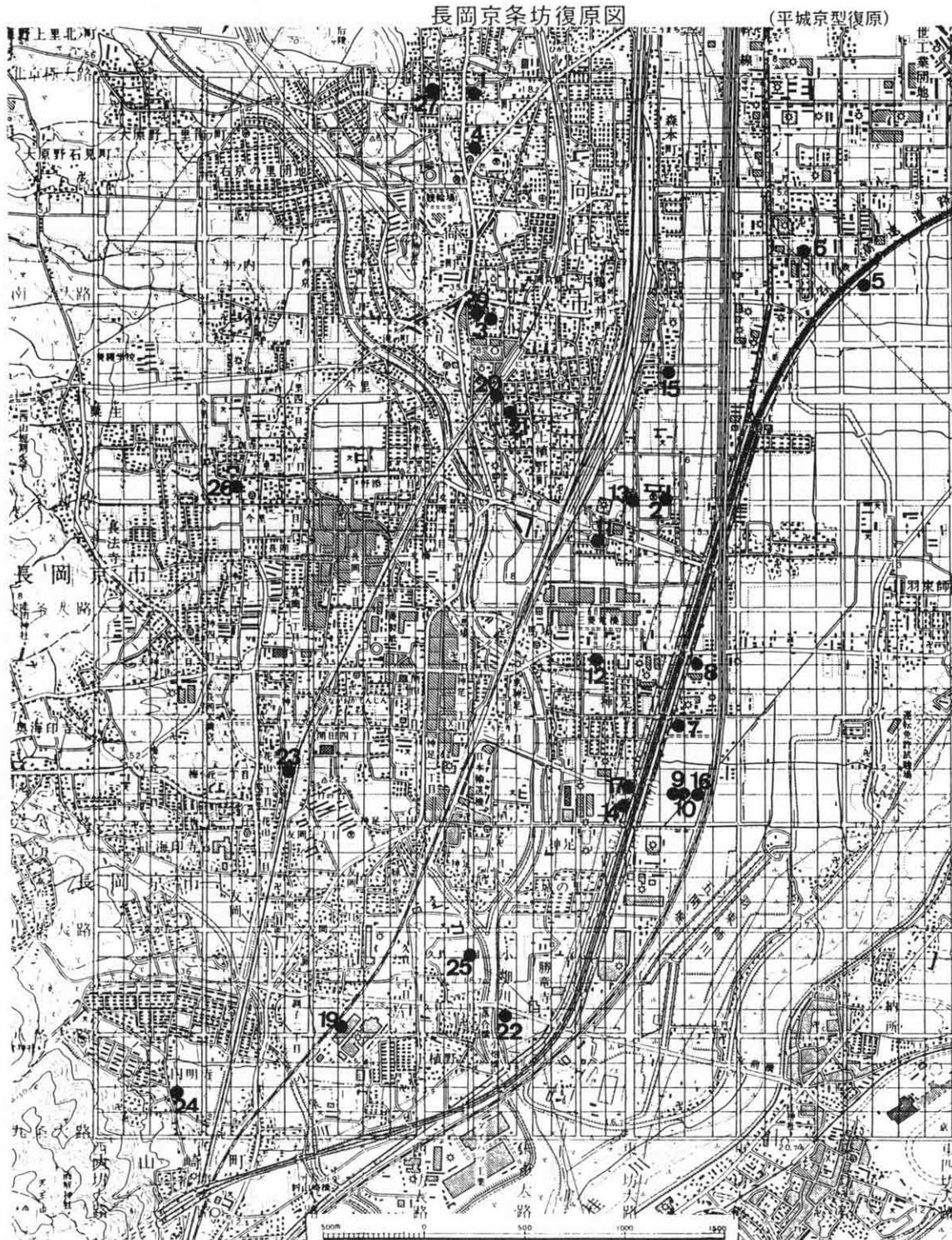
前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成9年8月27日、9月24日、10月22日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内4件、左京域13件、右京域10件であった。京外の6件を併せると33件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。このうち、右京第575次の調査結果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1997年10月末現在)

番号	調査回数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第350次	7ANBNC-4	向日市寺戸町中垣内19-1	(財)向日市埋文	7/3~7/31
2	宮内第351次	7ANDST-4	向日市森本町森本30	(財)向日市埋文	7/22~8/4
3	宮内第352次	7ANEYT-4	向日市鶏冠井町山畑	(財)向日市埋文	7/30~9/10
4	宮内第353次	7ANBMC-5	向日市寺戸町南垣内25-2・2	(財)向日市埋文	10/2~10/17
5	左京第399次(B-6・B-7)	7ANVKN-11 7ANVST-7	京都市南区久世東土川町金井田・正登	(財)京都府埋文	4/7~10/16
6	左京第401次	7ANVNR	京都市南区久世東土川町	(財)京都市埋文	4/23~9/9
7	左京第402次	7ANMMO-6	長岡京市神足寺田1	(財)長岡京市埋文	5/12~7/30
8	左京第404次	7ANLMD-2	長岡京市馬場餅田6	(財)長岡京市埋文	5/26~8/8
9	左京第406次	7ANMNB-2	長岡京市神足七ノ坪19・20	(財)長岡京市埋文	6/26~9/17
10	左京第407次	7ANMTD-4	長岡京市神足寺田1	(財)古代学協会・古代学研究所	7/1~
11	左京第409次	7ANFBD-5	向日市上植野町伴田12-1	(財)向日市埋文	7/10~8/7
12	左京第410次	7ANLMR-2	長岡京市馬場見場走り15-1、15-5	(財)長岡京市埋文	8/11~10/13
13	左京第411次	7ANFHM-6	向日市上植野町橋爪6-14	(財)向日市埋文	8/18~9/5
14	左京第412次	7ANMSB-3	長岡京市神足下八ノ坪43-4	(財)長岡京市埋文	9/1~9/19
15	左京第413次	7ANEKS-2	向日市鶏冠井町草田33、34-2	(財)向日市埋文	9/5~9/26
16	左京第414次	7ANMTD-5	長岡京市神足典薬1-5、1-7、1-12、寺田1-9、1-10他	(財)長岡京市埋文	10/1~
17	左京第415次	7ANMMO-7	長岡京市神足麦生4-6他	(財)長岡京市埋文	10/13~
18	右京第568次		長岡京市井ノ内小西40	大阪大学文学部	
19	右京第570次	7ANRHM-3	長岡京市調子三丁目1-1	(財)長岡京市埋文	7/7~10/23
20	右京第574次	7ANFNM-6	向日市上植野町野上山16-31他	(財)向日市埋文	7/7~7/25
21	右京第575次	7ANFNZ-6	向日市上植野町西小路38-1	(財)向日市埋文	7/7~10/7
22	右京第576次	7ANQNT-3	長岡京市勝竜寺二ノ坪9	(財)長岡京市埋文	7/22~8/7
23	右京第577次	7ANKJS-2	長岡京市天神一丁目221他1	(財)長岡京市埋文	8/25~9/11
24	右京第578次	7ANSSZ-5	大山崎町円明寺西法寺41	大山崎町教委	8/25~9/16
25	右京第579次	7ANQKA-2	長岡京市久貝二丁目609-1	(財)長岡京市埋文	9/8~10/3
26	右京第580次	7ANINC-8	長岡京市今里五丁目310-2他	(財)長岡京市埋文	9/24~
27	右京第581次	7ANBNO-5	向日市寺戸町西野19	(財)向日市埋文	9/25~10/12
28	長野丙古墳群第3次	4PHANN-3	向日市物集女町長野2-34	(財)向日市埋文	8/20~8/25
29	長岡宮跡立会第97088次	7ANEYT	向日市鶏冠井町山畑	(財)向日市埋文	8/13~8/26
30	弁天芝遺跡第4次	8LBJYT	長岡京市長法寺谷田地内	(財)長岡京市埋文	9/1~10/3

31	北ノ口遺跡第3次	ZK3、 42KAC-3	向日市物集女町北ノ口16-3 他3筆	(財) 向日市埋文	8/19~9/24
32	物集女城跡第4次 中海道遺跡第47次	9ZMANY-4 3NNANK-46	向日市物集女町中条10	(財) 向日市埋文	10/2~10/31
33	向日市立会第97113 次	3NNANK	向日市物集女町中海道59-21 他	(財) 向日市埋文	9/26



番号は一覧表・本文 () 内と対応

調査地位置図

右京第575次 (21)

(財) 向日市埋蔵文化財センター

本調査は日蓮宗、妙本願寺の末寺である法華寺の本堂、客殿、庫裏などの新設に伴うものである。調査地は標高24～28mを測る段丘中位面に位置する。長岡京の条坊復原では、朱雀大路西側溝を含む右京三条一坊三・四町(新条坊)東端に推定される。この寺は、天正19(1591)年の創建と伝えられ、寺内の諸施設は明治8(1875)年に当地に移建された。また、鐘楼は昭和43(1968)年に再建され、梵鐘は宝永8(1711)年に鑄造されたものである。

これまでの周辺部の発掘調査では朱雀大路西側溝、西面築地雨落ち溝などが検出されている。今回もこれらの成果をうけて敷地内の東西に2か所のトレンチを設けて発掘調査が実施された。

調査では、土師器、須恵器、瓦類、軒瓦、陶磁器、伏見人形など、古墳時代から近代にわたる各時代の遺物が数多く出土したが、遺構発見の面でも次の2点が明らかになった。その一つ目は朱雀大路西側溝及び雨落ち溝を検出し、その位置、規模を特定することができた点である。二つ目は、これまで知られていなかった7世紀の古墳群を新たに確認した点である。

古墳は石室石材の大半が失われており、直上まで長岡京期の造成土で覆われていた。かつて長岡京の造営工事は、稲荷塚古墳、走田古墳(長岡京市)の例に見られるように、古墳石材の再利用という目的で古墳を破壊して進められ、石室石材や石棺材が都の造営のために持ち出されている。法華寺古墳の場合も、その石材は都城建設の資材として転用された可能性もあると思われる。

法華寺古墳群が築かれた7世紀前半は、鞆岡廃寺(長岡京市)を除いて、まだ寺院が成立しておらず、7世紀の末になってようやく宝菩提院廃寺が造営された。したがって今回の発見は、未だ考古学的証拠は不十分ながら、当時、この地方に有力な豪族が住み、古墳にかわるシンボルとして寺院を建立したのかもしれない。

今回の発見は、乙訓地方の寺院成立前夜の社会状況を検討する重要な資料の一つとなるだろう。

(米本光徳)

センターの動向(9.8~10)

1. できごと

- | | |
|--|--|
| <p>8. 1 鶏冠井清水遺跡(向日市)発掘調査終了(5.1~)</p> <p>6 愛宕神社古墳群(弥栄町)発掘調査終了(4.16~)</p> <p>西ノ口遺跡・備前遺跡(八幡市)発掘調査開始</p> <p>7 片山1号墳(木津町)発掘調査開始</p> <p>11 木村英男常務理事・事務局長、宮ノ背遺跡現地視察</p> <p>12 余部遺跡(亀岡市・農総研)発掘調査終了(7.1~)</p> <p>16 第15回小さな展覧会開催(~8.30)</p> <p>20 平成9年度理事協議会(於：当センター)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、川上貢、上田正昭、藤井学、足利健亮、都出比呂志、井上満郎、堤圭三郎、西山隆史、中谷雅治の各理事出席</p> <p>竹中遺跡(舞鶴市)発掘調査開始</p> <p>22 苗代古墳群(峰山町)現地説明会</p> <p>23 第80回埋蔵文化財セミナー開催(別掲)</p> <p>25 柏平遺跡(城陽市)発掘調査開始</p> <p>26 谷垣古墳群(久美浜町)発掘調査終了(7.4~)</p> <p>27 木村英男常務理事・事務局長、安藤信策事務局次長、安田正人課長補佐、京都府からの兵庫県派遣職員担当現場視察</p> <p>松ヶ崎遺跡(網野町)関係者説明会</p> <p>長岡京連絡協議会</p> | <p>28 苗代古墳群発掘調査終了(5.8~)</p> <p>30~31 埋蔵文化財研究会(於：奈良県香芝市)引原茂治主任調査員出席</p> <p>9. 3 上田正昭理事、木村英男常務理事・事務局長、余部遺跡現地視察</p> <p>5 柏平遺跡(城陽市)発掘調査終了</p> <p>堤圭三郎理事、長岡京跡左京第399次調査・東土川遺跡(京都市)現地視察</p> <p>10 井上満郎理事、内里八丁遺跡(八幡市)現地視察</p> <p>松ヶ崎遺跡発掘調査終了(7.7~)</p> <p>11 足利健亮理事、内里八丁遺跡現地視察</p> <p>12 谷垣古墳群関係者説明会</p> <p>16 職員研修(於：当センター)講師：小池寛調査員「奈文研研修報告—信仰関連遺跡調査課程—」、松井忠春主任調査員、岩松保・田代弘調査員、今村正寿主事「中国山東省海外研修報告」</p> <p>18 茶カス古墳群(弥栄町)発掘調査開始</p> <p>堤圭三郎理事、備前遺跡他現地視察</p> <p>加悦町木曜歴史教室(於：加悦町)講師：河野一隆調査員「世界の巨大古墳」</p> <p>22 木村英男常務理事・事務局長、内里八丁遺跡・木津城跡(木津町)他現地視察</p> <p>24 西ノ口遺跡他現地説明会</p> <p>長岡京連絡協議会</p> <p>25 竹中遺跡発掘調査終了</p> <p>26 スガ町古墳群(網野町)関係者説明会</p> <p>30 交通安全講習会(於：乙訓総合庁舎)福嶋利範事務局次長、米本光徳主査調査員出席</p> |
|--|--|

10. 2 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：京都市)安藤信策事務局次長、土橋 誠主任調査員出席
浅後谷南城跡・浅後谷南遺跡(網野町)発掘調査開始
- 3 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋文研修会(於：大阪府)辻本和美係長、土橋 誠主任調査員、森下衛・有井広幸・松尾史子調査員出席、森下 衛調査員発表「京都府内出土の墨書土器—千代川遺跡・内里八丁遺跡を中心に—」
天王山古墳群(久美浜町)発掘調査終了(4.14~)
スガ町古墳群発掘調査終了(5.12~)
宮ノ背・西ノ口・備前遺跡発掘調査終了(6.23~)
- 6 長岡京跡左京第399次調査・東土川遺跡(京都市)現地説明会
天神山古墳群(木津町)発掘調査開始
- 7 樋口隆康理事長、長岡京跡左京第399次調査・東土川遺跡、内里八丁遺跡現地視察
横枕遺跡(網野町)発掘調査開始
- 8~9 堤圭三郎理事、別荘古墳群(久美浜町)他現地視察
全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：長野市)石井清司主任調査員、杉江昌乃・西村 晃主事出席
- 10~11 日本考古学協会1997年度大会(於：秋田市)安藤信策事務局次長、石尾政信主査調査員出席
- 12 内里八丁遺跡現地説明会
- 13 菩提城跡(弥栄町)発掘調査開始
- 13~14 中澤圭二副理事長、藤井 学理事、浦入遺跡・別荘古墳群他現地視察
- 13~18 全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修「韓国歴史と文化を訪ねて」、森下 衛調査員参加
- 14~30 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修「環境考古課程」黒坪一樹主査調査員参加
- 16 別荘古墳群現地説明会
長岡京跡左京第399次調査・東土川遺跡発掘調査終了(4.8~)
井町古墳群(丹後町)発掘調査開始
- 17 職員研修(於：当センター)講師：脇田晴子滋賀県立大学教授「中世考古学の成果と中世文献史学」
- 19 棕ノ木遺跡現地説明会
- 20~24 ジョクジャカルタ研修生、当センターにて研修受け入れ
- 22 長岡京連絡協議会
- 23 別荘古墳群発掘調査終了(5.1~)
- 27 吉沢城跡(峰山町)発掘調査開始
- 29 太田遺跡(亀岡市)発掘調査開始
堤圭三郎理事、棕ノ木遺跡・木津城跡現地視察
2. 普及啓発活動
- 8.16~30 第15回小さな展覧会開催
- 23 第80回埋蔵文化財セミナー(於：向日市民会館)—平成8年度京都府内の発掘調査から—有井広幸調査員「五領池東窯跡の発掘調査について」、石尾政信主査調査員「田辺城跡の発掘調査について」、辻 健二郎園部町教育委員会主事「徳雲寺北古墳群の発掘調査について」(安藤信策)

府内報告書等刊行状況一覧 (96.11~97.10)

発掘調査報告書

- 『埋蔵文化財発掘調査概報』 1997 京都府教育委員会 1997.3
- 『京都市内遺跡発掘調査概報』 平成8年度 京都市文化市民局 1997.3
- 『京都市内遺跡立会調査概報』 平成8年度 同上 1997.3
- 『京都市内遺跡試掘調査概報』 平成8年度 同上 1997.3
- 『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996.11
- 『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 同上 1997.3
- 『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』 第14冊 同上 1997.2
- 『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』 第15冊 同上 1997.2
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第42集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1997.3
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第44集 同上 1997.3
- 『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』 第8集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1997.3
- 『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』 第9集 同上 1997.3
- 『京都府弥栄町文化財調査報告』 第10集 弥栄町教育委員会 1997.3
- 『京都府弥栄町文化財調査報告』 第11集 同上 1997.3
- 『京都府大宮町文化財調査報告書』 第9集 大宮町教育委員会 1997.3
- 『京都府大宮町文化財調査報告書』 第10集 同上 1997.3
- 『京都府大宮町文化財調査報告書』 第11集 同上 1997.3
- 『大江町文化財調査報告書』 第2集 大江町教育委員会 1996.3
- 『大江町文化財調査報告書』 第3集 同上 1997.3
- 『福知山市文化財報告書』 第33集 福知山市教育委員会 1997.3
- 『福知山市文化財報告書』 第34集 同上 1997.3
- 『京都府船井郡八木町文化財調査報告』 第3集 八木町教育委員会 1997.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』 第36冊 長岡京市教育委員会 1997.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』 第37冊 同上 1997.3
- 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』 第3集 大山崎町教育委員会 1983.3
- 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』 第14集 同上 1996.12
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第32集 宇治市教育委員会 1995.6
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第36集 同上 1996.3
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第37集 同上 1997.3
- 『八幡市埋蔵文化財調査概報』 第19集 八幡市教育委員会 1996.3
- 『八幡市埋蔵文化財調査概報』 第20集 同上 1996.3
- 『八幡市埋蔵文化財調査概報』 第21集 同上 1996.3
- 『田辺町埋蔵文化財調査報告書』 第22集 田辺町教育委員会 1997.3
- 『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』 第17集 山城町教育委員会 1996.3
- 『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』 第18集 同上 1997.3

- 『京都文化博物館研究報告』 第9集 京都府京都文化博物館 1993.3
 『京都文化博物館研究報告』 第12集 同上 1996.3
 『上京・西大路町遺跡桜の御所隣接地点の発掘』 同志社大学校地学術調査委員会 1997.3

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

- 「平遺跡」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-10) 1996.11.13
 「浦入遺跡・浦入西2号墳」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-11) 1996.11.14
 「奈良岡南古墳群」 (京埋セ現地説明会資料 No.96-12) 1996.11.22
 「内里八丁遺跡第9次」 (京埋セ現地説明会資料 No.97-01) 1997.1.23
 「椋ノ木遺跡第2次」 (京埋セ現地説明会資料 No.97-03) 1997.2.24
 「長岡京跡左京第385次・東土川遺跡」 (京埋セ現地説明会資料 No.97-04) 1997.2.25
 「天王山古墳群B支群」 (京埋セ現地説明会資料 No.97-05) 1997.7.11
 「愛宕神社古墳群」 (京埋セ現地説明会資料 No.97-06) 1997.7.25
 「苗代古墳群」 (京埋セ現地説明会資料 No.97-07) 1997.8.22
 「宮ノ背・西ノ口・備前遺跡」 (京埋セ現地説明会資料 No.97-08) 1997.9.24
 「長岡京跡左京第399次」 (京埋セ現地説明会資料 No.97-09) 1997.10.6
 「内里八丁遺跡第10次」 (京埋セ現地説明会資料 No.97-10) 1997.10.12
 「別荘古墳群・別荘遺跡」 (京埋セ現地説明会資料 No.97-11) 1997.10.16
 「椋ノ木遺跡第3次」 (京埋セ現地説明会資料 No.97-12) 1997.10.19

中間報告資料

- 「椋ノ木遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.96-09) 1996.11.20
 「長岡京跡右京第541次・脇山遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.96-10) 1996.11.26
 「長岡京跡左京第389次・中福知遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.96-11) 1996.12.5
 「柿添遺跡第3次」 (京埋セ中間報告資料 No.96-12) 1996.12.5
 「長岡京跡右京第547次」 (京埋セ中間報告資料 No.97-01) 1997.2.4
 「中海道遺跡第42次」 (京埋セ中間報告資料 No.97-02) 1997.2.20
 「西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.97-03) 1997.2.24
 「平安京左京五条三坊十一町」 (京埋セ中間報告資料 No.97-04) 1997.2.19
 「長岡京跡左京第400次・鶏冠井清水遺跡」 (京埋セ中間報告資料 No.97-05) 1997.7.16
 「余部遺跡第3次」 (京埋セ中間報告資料 No.97-06) 1997.7.29
 「松ヶ崎遺跡第5次」 (京埋セ中間報告資料 No.97-07) 1997.8.27
 「谷垣古墳群」 (京埋セ中間報告資料 No.97-08) 1997.9.12
 「スガ町古墳群」 (京埋セ中間報告資料 No.97-09) 1997.9.26

府内現地説明会資料

- 「白米山古墳」 加悦町教育委員会 1996.11.2
 「庵寺山古墳」 宇治市教育委員会 1996.11.9
 「牧正一古墳」 福知山市教育委員会 1996.11.10

- 「東シ古墳・東シ城跡」 夜久野町教育委員会 1996.11.10
「法金剛院旧境内跡」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996.11.17
「平安京左京七条一坊十一町」 龍谷大学文学部内埋蔵文化財発掘調査団 1996.12.7
「徳雲寺北古墳群」 園部町教育委員会 1996
「椿井大塚山古墳(第5次)」 山城町教育委員会 1997.2.2
「長岡宮宝幢遺構(長岡宮跡第343次)」 (財)向日市埋蔵文化財センター 1997.4.5
「井ノ内稲荷塚古墳第5次調査」 大阪大学文学部考古学研究室・長岡京市教育委員会 1997.8.16
「弥栄町・穴ノ谷古墳群」 京都府教育委員会 1997.9.10
「平安京右京三条一坊三町」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997.8.23
「谷垣古墳群18・19号墳」 久美浜町教育委員会 1997.10.29

その他の雑誌・報告・論文等

- 「京都府埋蔵文化財情報」 第62号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996.12
「京都府埋蔵文化財情報」 第63号 同上 1997.3
「京都府埋蔵文化財情報」 第64号 同上 1997.6
「京都府埋蔵文化財情報」 第65号 同上 1997.9
「京都府遺跡調査概報」 第73冊 同上 1996.12
「京都府遺跡調査概報」 第74冊 同上 1997.3
「京都府遺跡調査概報」 第75冊 同上 1997.3
「京都府遺跡調査概報」 第76冊 同上 1997.3
「京都府遺跡調査概報」 第77冊 同上 1997.3
「京都府遺跡調査報告書」 第21冊 同上 1997.3
「京都府遺跡調査報告書」 第22冊 同上 1997.3
「京都府遺跡調査報告書」 第23冊 同上 1997.3
「15年のあゆみ」 同上 1997.3
「第15回 小さな展覧会」 同上 1997.8
「重要文化財 曼殊院 本堂・書院・庫裏修理工事報告書」 京都府教育委員会 1997.1
「重要文化財 竜谷大学本館並びに附守衛所保存修理工事報告書」 同上 1997.3
「重要文化財 相国寺本堂(法堂)・附玄関廊修理工事報告書」 同上 1997.1
「文化財保護」 No.14 同上
「京都府指定文化財 東福寺常楽庵(開山堂・相の間・昭堂)修理工事報告書」 宗教法人 東福寺 1997.3
「京都の文化財」 第14集 京都府教育委員会 1997.3
「京都市の文化財」 第14集 京都市文化市民局文化部文化財保護課 1997.2
「京都市文化財だより」 第27・28号 同上 1997.5~1997.10
「研究紀要」 第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996.11
「京都発掘20年」 同上 1996.11
「つちの中の京都「リーフレット京都」合冊」 同上・京都市考古資料館 1996.11
「平成7年度 京都国立博物館年報」 京都国立博物館 1997.3
「京都・激動の中世」 京都府京都文化博物館 1997.1
「資料館紀要」 第25号 京都府立総合資料館 1997.3

- 【京都府資料目録追録】 No.13 同上 1997.9
- 【総合資料館だより】 No.110～113 同上 1997.1～1997.10
- 【京都市歴史資料館年報】 No.15 京都市歴史資料館 1997.4
- 【京都市の文化財】 第9回 同上 1997.5
- 【京都の医学】 同上 1997.10
- 【泉屋博古館紀要】 第十三巻 (財)泉屋博古館 1997.3
- 【京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度】 京都大学埋蔵文化財研究センター 1997.3
- 【春季企画展展示図録】 京都大学総合博物館 1997.4
- 【第47トレンチ】 京都大学考古学研究会 1996.11
- 【佛教大学総合研究所紀要】 第4号 佛教大学総合研究所 1997.3
- 【佛教大学総合研究所報】 No.11・12 同上 1996.11～1997.6
- 【京都橘女子大学研究紀要】 第23号 京都橘女子大学研究紀要編集委員会 1996.12
- 【Tachibana Being】 Vol.10 京都橘女子大学 1997.5
- 【花大研究報告】 10 黄金塚2号墳発掘調査団 1997.3
- 【学芸員 NEWS LETTER】 第9号 立命館大学文学部 1997.3
- 【古代文化】 第48巻第11・12号、第49巻第1～10号 (財)古代学協会 1996.11～1997.10
- 【古代学研究所研究紀要】 第6輯 同上 1996.12
- 【土車】 第80～83号 1996.10～1997.7
- 【志くれている】 第59～62号 1997.1～1997.10
- 【文化財報】 No.95～98 (財)京都府文化財保護基金 1996.11～1997.8
- 【会報】 第82・83号 (財)京都古文化保存協会 1997.1～1997.10
- 【史迹と美術】 第669～678号 史迹美術同致会 1996.11～1997.9
- 【海獣葡萄鏡の研究】 (株)臨川書店 1996.4
- 【Museum Works】 Vol.1 (株)京都科学 1997.7
- 【第3回 京阪・歴史アウトティング】 京阪電鉄 1997.3
- 【特別展図録27】 京都府立丹後郷土資料館 1996.10
- 【特別陳列図録38】 同上 1997.7
- 【丹後郷土資料館だより】 第33号 1997.3
- 【市史編さんだより】 第12号 宮津市教育委員会 1997.3
- 【宮津市史 史料編】 第二巻 宮津市役所 1997.3
- 【平成8年度企画展】 第10回 三和町郷土資料館 1996.11
- 【史談福智山】 第539～545号 福知山史談会 1997.2～1997.8
- 【綾部の文化財】 第44号 綾部の文化財を守る会 1997.4
- 【丹波史談 平成8・9年度合併号】 口丹波史談会 1997.8
- 【太邇波考古学論集】 両丹考古学研究会 1997.5
- 【安定社会の研究】 (財)京都ゼミナールハウス 1997.6
- 【新修 亀岡市史 資料編】 第四巻 亀岡市 1996.3
- 【新修亀岡市史編さんだより】 第7号 亀岡市史編さん室 1997.1
- 【第22回企画展】 亀岡市文化資料館 1997.1
- 【第13回特別展】 同上 1997.5

- 【第23回企画展】 同上 1997.7
【平成7年度 向日市埋蔵文化財センター年報 都城8】 (財)向日市埋蔵文化財センター 1997.3
【市制25周年記念特別展】 同上 1997.7
【信長・秀吉と西岡】 向日市文化資料館 1996.9
【向日市古文書調査報告書】 第6集 同上 1997.3
【ふるさと文庫1 むこうまち往来こばなし】 同上 1997.3
【中山修一先生追悼文集】 長岡京跡発掘調査研究所 1997.9
【長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成7年度】 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1997.3
【長岡京市史編さんだより】 No.10 長岡京市 1997.5
【大山崎町文化財年報 平成7年度】 大山崎町教育委員会 1996.12
【大山崎町文化財年報 平成8年度】 同上 1997.9
【第5回企画展】 大山崎町歴史資料館 1997.10
【宇治文庫8 宇治猿楽と離宮祭】 宇治市歴史資料館 1997.3
【王朝人の浄土】 同上 1997.9
【平成8年度 宇治市歴史資料館年報】 同上 1997.9
【文愛協会報】 第44・45号 (財)宇治市文化財愛護協会 1997.2~1997.7
【企画展 古代役人のしごととくらし】 城陽市歴史民俗資料館 1996.11
【展示図録6】 同上 1997.2
【展示図録7】 同上 1997.7
【城陽市歴史民俗資料館館報】 第2号 同上 1997.3
【京都考古】 第83・84号 京都考古刊行会 1996.11~1997.1
【山城郷土資料館報】 第13号 京都府立山城郷土資料館 1996.3
【山城郷土資料館報】 第14号 同上 1997.3
【展示図録16】 同上 1996.10
【展示図録24】 同上 1997.4
【山城郷土資料館だより】 同上 1997.4
【紫陽花】 第25・26号 加茂町町史編さん室 1997.8
【波布理曾能】 第14号 精華町の自然と歴史を学ぶ会 1997.4

受贈図書一覧 (97.8~10)

- | | |
|---|---|
| <p>苫小牧市埋蔵文化財調査
センター</p> <p>青森県埋蔵文化財調査
センター</p> <p>(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター</p> <p>(財)福島県文化センター</p> <p>(財)茨城県教育財団
ひたちなか市埋蔵文化財
調査センター</p> <p>(財)栃木県文化振興事業団
埋蔵文化財センター</p> <p>(財)埼玉県埋蔵文化財調査
事業団</p> <p>埼玉県立埋蔵文化財センター</p> <p>(財)香取郡市文化財センター</p> <p>(財)印旛郡市文化財センター</p> <p>(財)東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター</p> <p>(財)横浜市ふるさと歴史
財団埋蔵文化財センター</p> <p>(財)新潟県埋蔵文化財調査
事業団</p> | <p>美沢10遺跡</p> <p>青森県埋蔵文化財調査報告書第207集 実吉遺跡、同第214集 田名部館跡、同第219集 垂柳遺跡・五輪野遺跡、研究紀要第2号</p> <p>岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第249集 山ノ内Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第250集 山ノ内Ⅲ遺跡発掘調査報告書、同第251集 久保遺跡発掘調査報告書、同第253集 上鷹生遺跡発掘調査報告書、同第255集 山屋館経塚・山屋館跡発掘調査報告書、同第257集 瀬原Ⅰ遺跡第2次・第3次発掘調査報告書、同第260集 間洞Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第261集 目名市Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第264集 平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書Ⅲ、同第265集 小幡遺跡第4次発掘調査報告書、同第266集 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成8年度)、紀要XⅦ(平成8年度)</p> <p>福島県文化財調査報告書第332集 白岩堀ノ内遺跡、同第333集 相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ、同第334集 福島県内遺跡分布調査報告3、同第335集 NTC遺跡発掘調査報告、同第336集 原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅶ、同第337集 摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅲ、同第338集 摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅳ</p> <p>年報16 平成8年度、研究ノート6号 平成8年度
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター年報 第2号</p> <p>栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター年報 第7号</p> <p>研究紀要第13号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報17、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集 今井川越田遺跡Ⅱ、同第179集 原ノ谷畑、同第180集 大山遺跡第9次、同第181集 五関中島ノ堤根、同第182集 石神貝塚、同第183集 滝の宮坂遺跡、同第184集 山王裏ノ上川入ノ西浦ノ野本氏館跡、同第185集 広木上宿遺跡 縄文時代編、同第186集 東町二丁目遺跡、同第187集 戸崎前遺跡、同第188集 築道下遺跡Ⅰ</p> <p>埼玉県立埋蔵文化財センター年報7 平成8年度</p> <p>(財)香取郡市文化財センター調査報告書第41集 津宮毘沙門遺跡、同第43集 反鞞遺跡、同第44集 中ノ台遺跡A地区、同第45集 桜之宮1号墳、同第46集 名号戸遺跡、同第47集 多古台遺跡群No.8地点Ⅱ、事業報告Ⅵ 平成7年度</p> <p>(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第82集 吉高浅間古墳発掘調査報告書、同第112集 南羽鳥遺跡群Ⅰ、同第116集 大室十三塚、同第124集 小菅三ツ塚遺跡、同第127集 太田向原遺跡発掘調査報告書、同第128集 吉見台遺跡B地点</p> <p>東京都埋蔵文化財センター調査報告第42集 多摩ニュータウン遺跡、同第43集 多摩ニュータウン遺跡、研究論集XⅥ、平成9年度 東京都埋蔵文化財センター要覧、東京都埋蔵文化財センター年報17</p> <p>財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター年報7 平成8年度、下飯田林・中ノ宮・草木遺跡発掘調査報告書</p> <p>新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成8年度、新潟県埋蔵文化財調査報告書第77集 七堀道下遺跡、同第85集 大洞原C遺跡</p> |
|---|---|

(社)石川県埋蔵文化財保存協会	加茂遺跡、社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報7 平成7年度、同8平成8年度
(財)岐阜県文化財保護センター	岐阜県文化財保護センター調査報告書第23集 飛瀬・底津遺跡、同第34集北小木古窯跡群・大沢13号古窯跡
(財)愛知県埋蔵文化財センター	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第70集 清洲城下町遺跡Ⅶ、同第71集 田所遺跡、同第72集 大毛池田遺跡、同第73集 西上免遺跡、同第74集大縄遺跡
(財)大阪府文化財調査研究センター	河内平野遺跡群の動態Ⅵ、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第3集 中嶋遺跡他3区・8～13区、同第7集 植田池・長滝・安松遺跡、同第9集 安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査中間報告書
(財)東大阪市文化財協会	郷土史のたのしみ、東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要1995年度調査(1)、同1995年度調査(2)、同1996年度(1)、植附遺跡第3次発掘調査概報、水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告、鬼塚遺跡第8次発掘調査報告書、鬼虎川遺跡第35-1次発掘調査報告、鬼虎川遺跡北部の歴史時代耕作地跡と地震層序、宮ノ下遺跡第2次発掘調査報告書、宮ノ下遺跡東部における歴史時代の層序、神並遺跡第14次発掘調査報告書、神並遺跡西端部の水路跡と埋積谷、鬼虎川遺跡第33次発掘調査報告、西ノ辻遺跡第33次発掘調査報告、北島遺跡の耕作地跡と古環境、東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告1994年度、同1995年度、奈良時代の東大阪、縄手遺跡1、東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報20 瓜生堂上層遺跡・皿池遺跡、東大阪市遺跡保護調査会年報1979年度、東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集1980年度、若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ、鬼虎川の金属器関係遺物第7次発掘調査報告2、高井田遺跡第2・3次調査報告、(財)東大阪市文化財協会年報1983年度、久宝寺遺跡発掘調査報告、若江北遺跡、芝ヶ丘遺跡発掘調査概報
高槻市立埋蔵文化財調査センター	継体天皇と今城塚古墳、安満宮山古墳
桜井市立埋蔵文化財センター	大和の高殿
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第144集 平家ヶ城跡発掘調査報告書、同第145集 金口古墳群、同第146集 田上第1・2号古墳、同第147集 打堀山遺跡群A・B地点、同第148集 千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)、同第149集 槇ヶ原製鉄遺跡発掘調査報告書、同第150集 梶平塚第2号古墳発掘調査報告書、同第151集 田龍遺跡、同第152集 国営広島北部土地改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書、同第153集 上千堂遺跡、同第154集 龍王山2号遺跡、同第155集 出羽遺跡、同第157集 県営ほ場整備事業(川西東部・南部地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室	北九州市埋蔵文化財調査報告書第192集 高槻遺跡、同第195集 片伊田遺跡2、同第197集 小倉城跡3、同第198集 高野遺跡、同第199集 徳力土地区画整理事業関係調査報告10、同第201集 大積前田遺跡、同第202集 潤崎遺跡5、同第203集 森山西遺跡Ⅰ区、同第204集 森山西遺跡2、同第205集 金丸遺跡1、同第206集 永犬丸遺跡群1、同第207集 片伊田遺跡3、同第208集 社ノ木遺跡、同第209集 屏賀坂遺跡、研究紀要第11号、埋蔵文化財調査室年報13 平成7年度
久留米市埋蔵文化財センター	両替町遺跡 久留米市文化財調査報告書第116集
小樽市教育委員会 仙台市教育委員会	手宮洞窟シンポジウム 波濤を越えた交流 仙台市文化財調査報告書第213集 中在家南遺跡他

会津坂下町教育委員会	会津坂下町文化財調査報告書第47集 大村新田遺跡
白井町教育委員会	河原子台Ⅱ
鎌倉市教育委員会	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 平成8年度発掘調査報告、国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査概要報告書 平成8年度
境川村教育委員会	境川村埋蔵文化財発掘調査報告書第13輯 北ノ宮遺跡
長坂町教育委員会	長坂町埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 北村遺跡、同第11集 酒呑場遺跡G区、同第12集 長坂上条遺跡
中道町教育委員会	中道町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 上野原遺跡
水見市教育委員会	水見市埋蔵文化財調査報告第21冊 朝日貝塚Ⅱ、同第24冊 朝日貝塚Ⅲ
福岡町教育委員会	福岡町埋蔵文化財報告書第6冊 石名田木舟遺跡発掘調査報告書、木舟北遺跡
寺井町教育委員会	加賀 能美古墳群
豊田町教育委員会	加茂東原Ⅲ遺跡第1次 豊田町文化財調査報告書第8集
長浜市教育委員会	長浜市埋蔵文化財調査資料第14集 大塚遺跡Ⅱ、同第17集 川崎遺跡Ⅱ発掘調査報告書、同第20集 経田寺遺跡発掘調査報告書
能登川町教育委員会	能登川町埋蔵文化財調査報告書第41集 平成6～8年度町内遺跡発掘調査報告書、同第42集 上山神社遺跡・法堂寺遺跡(9次)・横受遺跡(3次)・斗西遺跡(12次)・伊庭御殿遺跡(2次)、同第43集 斗西遺跡5次調査
信楽町教育委員会	天平の紫香楽—その実像を求めて
阪南市教育委員会	阪南市埋蔵文化財報告XXⅡ 阪南市埋蔵文化財発掘調査概要XⅡ
和泉市教育委員会	和泉市埋蔵文化財調査報告第3集 上町遺跡発掘調査報告書、和泉市埋蔵文化財発掘調査概報7、史跡池上曾根95
富田林市教育委員会	富田林市埋蔵文化財調査報告27 平成7年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書、同28 平成8年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書、喜志西遺跡 富田林市遺跡調査会報告1
能勢町教育委員会	平成8年度能勢町埋蔵文化財調査概要 能勢町文化財調査報告書第8冊、平成8年度木野川流域遺跡群発掘調査事業報告書
三田市教育委員会	おっちゃん・おばちゃんの考古学、三田市文化財調査報告書第10冊 屋敷町遺跡
川西市教育委員会	平成8年度 川西市発掘調査概要報告
姫路市教育委員会	特別史跡姫路城跡石垣修理工事報告書(5) 内京口門
加東郡教育委員会	加東郡埋蔵文化財報告19 河高・上ノ池遺跡
東浦町教育委員会	東浦町埋蔵文化財調査報告書第1集 楠本下林遺跡
安富町教育委員会	安富町文化財調査報告書4 谷山遺跡
和歌山市教育委員会	和歌山市内遺跡発掘調査概報平成7年度、同平成8年度、和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報3 平成4(1992)・平成5(1993)年度、同4 平成6(1994)年度、和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第14集 太田・黒田遺跡、同第15集 府中Ⅳ遺跡、嘉家作り丁民家実測調査報告書
橋本市教育委員会	橋本市埋蔵文化財調査概報第18集 平成2年度山田瓦窯跡発掘調査概報、同第20集 平成3年度市脇遺跡発掘調査概報(第6次調査)、同第21集 平成4年度橋本市遺跡発掘調査概報、同第25集 平成7年度柏原遺跡発掘調査概報、同第27集 平成7・8年度血縄遺跡第7次発掘調査概報
総社市教育委員会	総社市埋蔵文化財調査年報7
下関市教育委員会	下関市埋蔵文化財調査報告書60 柳瀬遺跡
寒川町教育委員会	森広遺跡
太宰府市教育委員会	筑前国分寺跡Ⅰ 太宰府市の文化財第32集、辻遺跡 同第33集、宝満山遺跡群Ⅱ 同第34集、大宰府・佐野地区遺跡群Ⅶ 同第35集、大宰府史跡 同第36集
北野町教育委員会	北野町遺跡等詳細分布調査報告書 北野町文化財調査報告書第6集、赤司城跡 同第7集、陣屋堂出遺跡 同第8集、茶屋屋敷遺跡 同第9集

柏屋町教育委員会	柏屋町文化財調査報告書第11集 内橋登り上り遺跡第2地点、同第12集 内橋登り上り遺跡第3地点、同第13集 花ヶ浦古墳
筑穂町教育委員会	大分廃寺 筑穂町文化財調査報告書第3集、久手遺跡 同第4集
水巻町教育委員会	立屋敷遺跡(第3次) 水巻町文化財調査報告書第5集
佐賀市教育委員会	佐賀市埋蔵文化財調査報告書第14集 柴尾橋下流遺跡、同第15集 東千布遺跡、同第16集 泉遺跡、同第18集 泉三本栗遺跡、同第19集 黒土原遺跡、同第78集 東千布遺跡Ⅲ、同第79集 金立遺跡Ⅰ、同第80集 西千布遺跡Ⅰ、同第81集 下和泉一本椎遺跡、同第82集 妙常寺北遺跡(1・2区)・妙常寺南遺跡(1区)、同第83集 牟田寄遺跡、同第84集 牟田寄遺跡Ⅴ、同第85集 佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書 1992年度、同第86集 徳永遺跡1区、蓮池上天神遺跡、久保泉工場団地内遺跡、増田遺跡、収蔵品目録(第2集)
人吉市教育委員会	人吉市文化財調査報告第17集 史跡 人吉城跡Ⅷ
大分県教育委員会	古城山、九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(3)、同(4)、同(6)、同(7)、大恩寺遺跡 大分県文化財調査報告書第97集、三和教田遺跡C地点 同第98集、下原遺跡、横塚第2遺跡・久原第2遺跡、ガラソ遺跡・植田市遺跡・植田条里遺跡、大分県埋蔵文化財年報5 平成7(1995)年度版
えびの市教育委員会	えびの市埋蔵文化財調査報告書第16集 原田上江遺跡群六部市遺跡・蔵元・中満・法光寺遺跡Ⅰ・Ⅱ、同第17集 妙見原遺跡、同第18集 芋畑第3・山神原遺跡、同第19集 内小野遺跡、同第20集 田代地区遺跡群、同第21集 稲荷下遺跡
秋田県立博物館	秋田県立博物館館報 平成8年度
玉里村立史料館	五万堀遺跡調査報告、玉里村立史料館報 第2号
栃木県立なす風土記の丘資料館	栃木県立なす風土記の丘資料館年報第5号(平成8年度版)、前方後方墳の世界Ⅱ
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告第70集、同第71集、同第73集
君津市立久留里城址資料館	君津市立久留里城址資料館年報(平成8年度)
流山市立博物館	流山市立博物館年報No.19 '97
千葉市立加曾利貝塚博物館	加曾利貝塚
出光美術館	出光美術館 館報第99号
氷見市立博物館	氷見のさかなを描く
石川県立歴史博物館	モダンの調べ 蓄音機、太子信仰と北陸
福井県立博物館	中国浙江省の文物展
敦賀市立博物館	紀要 第12号
岐阜県博物館	岐阜県博物館報 第20号
静岡市立登呂博物館	静岡市立登呂博物館館報 第7号、平成7・8年度 登呂の弥生人5
愛知県陶磁資料館	愛知県陶磁資料館研究紀要13、同14、松山美術館名品展 東洋陶磁の精華、経塚出土陶磁展 中部地方に埋納されたやきもの、同関東・北陸地方に埋納されたやきもの
名古屋市博物館	名古屋市博物館年報No.20 平成8年度、名古屋市博物館研究紀要 第20巻
名古屋市見晴台考古資料館	清水寺遺跡第5次発掘調査報告書、H-22号窯発掘調査概要報告書、伊勢山中学校遺跡、竪三蔵通遺跡、名古屋城三の丸遺跡第8・9次発掘調査概要報告書、名古屋市文化財調査報告31 埋蔵文化財発掘調査報告書24、同32 埋蔵文化財発掘調査報告書25、同34 埋蔵文化財発掘調査報告書26、曾池遺跡発掘調査概要報告書、平成7年度 尾張元興寺跡発掘調査報告書、見晴台教室 '96、名古屋市見晴台考古資料館年報14 1996(平成8)年度事業報告
常滑市民俗資料館	常滑市文化財調査報告書第23集 神水古窯発掘調査報告書
斎宮歴史博物館	中世の斎宮、平成8年度 斎宮歴史博物館年報

滋賀県立安土城考古博物館 秦荘町歴史文化資料館 大阪府立近つ飛鳥博物館 大阪府立弥生文化博物館	大地からのメッセージ-湖南の考古資料展、城下町の黎明-信長の城と町 金剛輪寺梵鐘と河内鑄物師 「あつれき」と「交流」、古墳の科学捜査 行者塚古墳発掘展 卑弥呼誕生 邪馬台国は畿内にあった?、大阪府立弥生文化博物館要覧 平成8年度
柏原市立歴史資料館	柏原市立歴史資料館 館報8、柏原市古文書調査報告書第1集 相元家文書 目録、井戸の中をのぞいてみよう
岸和田市立郷土資料館 太子町立竹内街道歴史資料館 西脇市郷土資料館 神戸市立博物館	岸和田藩ゆかりの甲冑・武具展 二上山のみた2、3世紀 西脇市郷土資料館紀要「童子山」第4号 神戸市立博物館 館蔵品目録地図の部13、同考古・歴史の部13、同美術の部 13 文書V、神戸市立博物館研究紀要第13号、神戸市立博物館研究年報 No.12 平成6年度
加古川流域滝野歴史民俗資 料館 奈良国立文化財研究所飛鳥 資料館 橿原市千塚資料館 鳥取県立博物館 山口県立山口博物館 土井ヶ浜遺跡・人類学 ミュージアム 北九州市立考古博物館	先人の生活記録 加古川流域の埋蔵文化財 遺跡を測る かしはらの歴史をさぐる5 鳥取県立博物館研究報告 第34集 山口県立山口博物館研究報告第23号、館報20 山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第13集 土井ヶ浜遺跡第15次発掘調査報 告書 弥生の鑄物工房とその世界、研究紀要 vol. 4、北九州市立考古博物館年報 平成8年度
佐賀県立名護屋城博物館 沖縄県立博物館	名護屋城博物館年報1996 No. 3、研究紀要 第3集 沖縄県立博物館年報 No. 30、沖縄県立博物館紀要 第23号
東北学院大学東北文化研究所 東京芸術大学 日本大学史学会 國學院大學文学部考古学研 究室 広島大学統合移転地埋蔵文 化財調査委員会 愛媛大学埋蔵文化財調査室	東北学院大学東北文化研究所紀要 第29号 東京芸術大学構内遺跡発掘調査報告書第1集 上野忍岡遺跡群 史叢 第57号 國學院大學文学部考古学実習報告第30集 物見処遺跡1996、同第31集 柳又 遺跡A地点第7次発掘調査報告書、同第32集 物見処遺跡1997 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査の歩み、広島大学統合移転地埋蔵文化 財調査年報XⅢ 愛媛大学構内遺跡調査集報Ⅰ 愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅴ、樽味遺跡Ⅲ 同Ⅵ
山武考古学研究所 東京都網代母子寮遺跡調査会 足立区伊興遺跡調査会事務局 日野新町一丁目住宅遺跡調 査会 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 (財)角川文化振興財団編纂室 (株)新人物往来社 国立国会図書館 玉川文化財研究所	山武考古学研究所年報 No.14 網代門口 伊興遺跡 下水道敷設工事に伴う発掘調査 姥久保遺跡Ⅰ 千駄ヶ谷五丁目遺跡 縄紋から弥生への新歴史像 天守再現 名城のシンボルを読む 別冊歴史読本26 日本全国書誌 第38号(通号2147号) 桜橋付近遺跡発掘調査報告書、南八王子地区遺跡調査報告11、上ノ原遺跡、 堂之上遺跡、兜塚古墳発掘調査報告書、関耕地遺跡発掘調査報告書、三の

全国天領ゼミナール事務局
てんびんの里文化学習センター
(財)古代学協会
富田林市石川化石発掘調査団
岸和田市立文化会館
河内長野市遺跡調査会

奈良国立文化財研究所
朝鮮学会
御坊市遺跡調査会

吉備人出版
博物館等建設推進九州会議・
編集委員会

大江町教育委員会
大山崎町教育委員会
京都府立丹後郷土資料館
京都府立総合資料館
京都市歴史資料館

大山崎町歴史資料館
宇治市歴史資料館
京都大学埋蔵文化財研究センター
口丹波史談会
宗教学人 東福寺
中山修一先生追悼文集刊行会
京都府立ゼミナールハウス

伊與田光宏

大野左千夫
寒川 旭
橋口達也
樋口隆康
松井忠春
森下 衛

森島康雄
山本祐作

丸元蔵掘第三・IV地点
第12回全国天領ゼミナール記録集
五個荘町文化財調査報告33 山本遺跡第3次調査

古代文化 第49巻第8～10号
富田林の足跡化石
想～十年を振り返って～
河内長野市遺跡調査会報XV 上原遺跡、同XVI 天野山金剛寺遺跡、同XVII 高向遺跡、同XVIII 栄町南遺跡
アンコール文化遺産保護共同研究報告書I 平成5年度～平成7年度
朝鮮学報 第163輯
土地改良総合野島地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報、土地改良総合野島地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報2、野島II遺跡発掘調査概要報告書、稲荷山古墳ほか第二火力発電所建設に伴う埋蔵文化財確認調査、祓井戸古墳ほか調査報告書第5集
垣間みた吉備の原始古代
文明のクロスロード Museum Kyushu 通巻56号

大江町文化財調査報告書 第2集、同第3集
大山崎町文化財年報平成8年度、大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第3集
古代のくらしとうつわー須恵器ー
京都府資料目録追録No.13
京都市歴史資料館年報No.15 平成9年度事業計画・平成8年度事業報告、
京都の医学
自治の街、大山崎町
王朝人の浄土、平成8年度・1996
京都大学構内遺跡調査研究年報1993年度

丹波史談 平成8・9年度合併号
東福寺常楽庵(開山堂・相の間・昭堂)修理工事報告書
中山修一先生追悼文集
安定社会の総合研究ーことがおこる・つづく／なかだちをめぐってー

じんもんこん 第4号、「人文科学とコンピュータ」研究のてびき1996、同1997
シンポジウム 製塩土器の諸問題
地質調査所研究資料集No.303 平成8年度活断層研究調査概要報告書
中種子町埋蔵文化財調査報告書(3) 種子島・島ノ峯遺跡
東アジアの稲作起源と古代稲作文化、三角縁神獣鏡と邪馬台国
海東華嚴宗刹 浄石寺
伽耶史復元のための福泉洞古墳群の再照明、三國時代の動物園、遺物に描かれた古代文字
出土銭貨 第8号
東播磨 第4号

編集後記

年の瀬も近づきましたが、情報66号が完成しましたのでお届けします。

本号では、今年度の当調査研究センターの実施しました発掘調査の中で特に成果のあがりました3件につきまして、抄報を掲載しました。また、職員の研究成果をまとめたものや、毎年実施している共同研究事業で取材したときの文章もあわせて掲載いたしましたので、御味読下さい。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第66号

平成9年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER